

太陽の備忘録【完結】

zeonneral

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

君と過ごした一ヶ月は、とても輝いていました。

俺がもし、繋いでいた手を離してしまっても。君の温もりを忘れてしまっても。

心はいつも、君のそばに。

目次

太陽の備忘録

一日目	1
二日目	9
四日目 (I)	15
四日目 (II)	22
七日目	30
十日目	39
十一日目	48
十二日目	56
十三日目	64
十四日目 (I)	72
十四日目 (II)	79
十七日目 (I)	86
十七日目 (II)	93
二十日目	102
二十三日目	109
二十四日目	117
二十八日目	124
三十日目 (I)	133
三十日目 (II)	142
エピローグ	
まだ見ぬ未来へ	151

太陽の備忘録

一日目

序

今からあなたが目にするお話は、嘘でも作り話でもありません。全て、現実起こったお話です。

救いのないような話に見えるかもしれませんが、切なく感じるかもしれません。しかしこのお話が終わった時、あなたはきつと心に温かさを感じる事でしょう。

どうか途中で飽きる事無く、最後までお読み頂きますよう。それでは、ごゆっくりどうぞ。

★★★☆☆

パチリ、という音が聞こえそうなほど綺麗に目覚めた。白い天井だ。少なくとも、自分の家ではないことは確か。俺はカラダを起こし、キョロキョロと辺りを見回す。どこだここは。

カーテンで隔離された空間に、純白のシート。そして俺が着ているのは、入院患者が着る病衣^{びょうい}。これらの情報から総合的に判断し、自分は病院にいるのだと判断する。

他に何かないかと探すと、ちょうど小さめのチェストに紙が貼り付けられていた。『起きたらナースコールしてね』……か。

ふむ、このボタンだな。

「はい。あらっ、おはよう隼人くん。ぐっすり眠れた？」

「えと……。え？」

「陰山隼人くん、あなたの事よ。ナースコールしたでしょ？」

「あつ、はい。まあ、快調……だと思えます」

あまり理解が追い付かなかったが、無難に返しておく。それを聞く

と、看護師は『じゃあ、また後で来るから』と言い残して部屋を出ていった。

頭がボーッとしている。もう何時間も眠っていたかのようだ。ここに来る前、自分は何をしていただろうか。考えてみるが、どうにも思い出せない。

病院にいるということは、カラダのどこかがおかしいのだろうか。だが目立った外傷はないし、どこも痛くない。点滴もされてなければ、何かに繋がれているわけでもない。謎は深まるばかりである。

「今日、何日だっけ」

目が覚める前はいつだったっけか。それを見れば、記憶も戻ってくるかもしれない。俺は病室に備え付けられていたカレンダーを見る。日付は、十一月一日の土曜日だった。

「二日……。月の始め、か」

それを見て、俺はようやく自分の状況を理解する。

——いや、思い起こす。

……ああ、そういう事か。今日がりセットの日なんだ、と。

★★★☆☆

自分の状況を理解してからは落ち着いたのか、看護師が再度来るまで惰眠を貪っていた。病院という場所は、それほど退屈なのだ。

看護師が来てからは、何の面白みもない検査を次々と受けさせられる。体調はどうであるか、脳波に異常がないか等々。あちらこちらの部屋に引つ張り回されて、それはもう忙しない。

それが終わったら今度は、『結果が出るまで少し待っててね』だつて。また退屈な病室へ戻される。退屈しのぎにと雑誌をいくつか貰ったが、芸能人の情報なんて見ても分かる訳がない。すぐにチエス

トの上に放置してしまった。

……暇だなあ。

「ミッシェルー!! 次はこの部屋よっ!!」

「ちよつ、分かった。分かったから押さないでっば……」

そんな俺の心を読んだかのように、タイミング良く病室のドアは開いた。会話を聞いて察するに、二人組だろうか。一人は少々騒がしい。ここは仮にも病院だぞ。

どんな常識知らずが入ってきたのやら。ベッドから降りて、仕切りのカーテンを開ける。いたのはやはり二人組……というよりか、一人と一匹だった。

ブロンド金髪を腰まで伸ばした同年代の女の子に、ピンク色の熊の着ぐるみを来た誰かさん。二人とも赤と白を基調とした、マーチングのような衣装を着ている。

「あら、こんにちはっ!! あなたのお名前は?」

「いや、こつちのセリフなんだけど」

開口一番にお名前はって……。少なくとも、病院にそんな格好で来るような人に言われたくない。なんだこの人。

そんな心中もお構いなしに、ブロンドの少女は笑顔で両手を振り続ける。いや、ホントなんだこの人。

「ここはあなただけなのよね?」

「そうだよ。入り口にネームプレートがあつたはずだけど」

「そうなの、それはラッキーだわ!! あなただけの特別ステージね。ミッシェル、いつくわよー!!」

この人達、本当に何しに来たんだろう。ステージとか、病院に似つかわしくない単語な気がするんだけど。お見舞いって感じでもないし、そもそも俺はこの人達を覚えてないし。

暴走しかけている彼女を止めたのは、ミッシェルと呼ばれた着ぐるみの熊だった。

「ち、ちよつとこころ待つて。さつきからずつとパフォーマンスしつ

放しだし、その人も困ってるだろうし……」

「あら、ミツシエル疲れたの？　なら休んでいいわよ」

「そういう事じゃなくて!!」

着ぐるみの人も苦勞してるんだなあと、俺はベッドに戻りながら傍観している。完全に他人事である。まあ、見てて飽きそうにないからいいけれども。

ていうかこの人達、他の部屋でもこんな事してるのか。なんで看護師とかは止めないんだろう。

「あのさ、そろそろ君たちの事を教えてくれない？　申し訳ないけど、俺は君たちの事が全然分らないから」

「あたしは弦巻つるまきこころ!!　世界を笑顔にするために、『ハロー、ハッピーワールド』っていうバンドを組んでいるの!!　こっちはメンバーのミツシエルよ」

弦巻さんにミツシエルさん。……いや、ミツシエルに関しては中の人の情報が知りたいんだけど、まあいいか。どうせ知らない人だろう。それに着ぐるみの中に人なんていない、うんきつと。

弦巻さんのよく分からない説明に、ミツシエルが付け加える。彼女達のバンド——通称ハロハピは『世界を笑顔に』をモットーとして、幼稚園や病院といった場所を定期的に慰問しているらしい。本当のメンバーはミツシエル含めて五人だが、今日は二人だけなのだ。

「で、そのハロハピさんがこの病室に何の用？」

「あたし達と一緒に、あなたも笑顔になりましょつ。　ほら、あたしに続けて」

質問にちゃんと返してください。具体的に何をしに来たか聞いてるんだよ。

説明を放棄して、弦巻さんはメロディーを口ずさみ始める。話を聞いていないし、こちらの様子を確める気もなさそう。

「ララララ〜ララ〜、ラララララ〜。はいっ」

「いや、はいって……」

「ごめん、こころはこころに付き合っただけ」

「ええ……」

困っている俺に、ミッシェルがボソボソと耳打ちする。彼女(?)にも、弦巻さんの制御は無理なようだ。

「ララララ〜」

「ら、らららら〜」

「もつと!! 笑顔が足りないわっ」

「んな事言われても……」

結構厳しい。笑顔笑顔と言われても、こんな状況で笑えというのが無理ではないだろうか。苦笑いしか出ないよ。

弦巻さんの綺麗な歌に、俺のぶきつちよな声が混ざる。人となりは置いといて、彼女の声は魅力的だった。それこそ、彼女の印象が少し変わってしまうぐらいに。

それに……なんて楽しそうに歌うんだろう。観客は俺しかないのに、満面の笑みで。俺には絶対に無理そうだ。

「どうして? 楽しくないかしら?」

「いや、今そんな気分じゃないというか……」

「大丈夫よっ。あなたが楽しいと思えば、笑顔になれるわ!!」

無茶苦茶言ってるよこの子。その楽しいという気持ちになれないから、今こうして困っているんだけど。

俺がいくら困っていても、いくら泣いても彼女は諦めない。『さあ!!』と、強引に俺に歌わせる。その度に、病室に外れた音が響く。やはり笑顔にはなれなかった。

きつと、彼女は裕福なんだろう。多くの友達に恵まれ、親の寵愛を受け、さらにはバンドまでやっている。だから、人に笑顔になれと言えるほど心の余裕があるんだ。そうに違いない。

俺は……俺は自分の事で精一杯だ。

難病を抱えているのだ。一ヶ月周期で記憶がリセットされるといふ。交通事故で頭に強い衝撃が加わったのが原因で、それは今年の六月の話だと聞かされた。

月の最初の日に目覚めたら、まず自分の名前が分からない。人間関係も白紙に戻される。自分の趣味、好きな食べ物等々の情報も一切忘

れてしまう。そのくせ自分の病気については、感覚的にだが理解している。一ヶ月経ったら記憶を失う病気であり、今日がその一日目だということ。そして、もうそれを何度も繰り返していること。なんて皮肉な話なのだろうか。

きつと、彼女は俺の病気の事なんて知らないだろう。本心でこの病院の患者を笑顔にしたいと、偶然俺の部屋に現れた。そして、絡まれている。楽しく思えば、笑顔になれると。

「分からないよ、楽しいなんて」

俯き加減に、俺はポツリと呟く。何も覚えていない自分が、楽しいという感情や出来事を知るはずがない。笑顔になれるはずがない。

弦巻さんが、少しだけ目を丸くした。常に笑顔だった彼女が、表情を変えた瞬間だった。ミッシェルは俺を気遣っているのか、『こころ、ちよつと……』と引き止めている。

「そう……。だったら、あたしが教えてあげるわっ!!」

「……え?」

「笑顔も楽しいって感じる事も素敵だもの!! それを知らないなんて、もったいないじゃない?」

表情が変わったのも一瞬の話。弦巻さんは目を輝かせて、あっけらかんと言いつつ放った。普通、そこは引き下がるところじゃないのか? ますます、この人が分からない。

でもどこか、彼女の醸し出す雰囲気が変わった気がする。口だけじゃなくて、本当に何かしそうな……。いや、やりかねない雰囲気。面食らったのも相まって、俺は彼女の圧に押された。

「こころ。そろそろ……」

「ん、分かったわミッシェル。じゃあね、隼人!!」

もう名前呼びですか……。つてか俺に乗ったつけ。まあ、退屈しのぎにはなったからいいや。きつとそう簡単に会うことはないだろう。

ミッシェルに連れられて帰る弦巻さんは、ドアが閉じる寸前まで俺に手を振っていた。やっぱり、満面の笑みで。たった十分かそこらで、随分と気に入られたものである。

嵐のような彼女が過ぎ去ったのも束の間、入れ替わりとなる形で看護師さんが医者を引き連れて入ってきた。検査の結果でも出たのだろうか。

「はい、お待たせしました。検査結果は、後で親御さんが来たときに一緒に報告するからね。今晚までここに止まって、夜の君の頭を見させてもらうから」

「ああ、はい」

まだ検査するのか。溜め息が溢れそうになるのを、すんでの所で堪える。

医者はそれだけを伝えに来たのだろう。報告が終わると颯爽と部屋を出ていった。

「あつ、そうだ。すいません」

「はい？」

続いて出ていこうとする看護師を引き止める。

「その、弦巻ごころって知ってますか？ マーチングみたいな格好で、熊の着ぐるみと一緒にいた」

「ええ、もちろん。有名なもの」

そりやそうだろう。あんな衣装で病院に来て、各病室を歌って回るんだから。有名にならない方がおかしい。

でも、俺が聞きたいのはそういう事じゃなくて。

「あの子、大きな家のお嬢様なんだけどね。月の始めにはこうして、慰問しに来るのよ。楽しみにしてる子供もいるから、出入り禁止するわけにもいなくて」

「……へえ、そうなんですか」

本当に裕福な家庭の子だったとは。でも、少しばかり常識が欠けているようなあの振る舞いを見ると、妙に納得出来てしまった。

看護師は優しい表情を見せる。それだけであの子は、この病院で愛されてるんだなあというのには理解できた。疎ましく思う人なんかより、彼女が笑顔にさせる人の方がずっと多いんだ。

彼女は、俺の事なんかお構いなしにずかずかと侵入してきた。笑わない俺が珍しかったのか、結構しつこく付きまどってきた。それが、

少し印象に残ったのだ。

きつと、彼女は楽しい人生を送っている。楽しい思い出も、たくさんの引き出しがあるんだろう。そういった引き出しが全く無い俺とは、対極の位置にある人間だ。

空っぽのタンスには、これからいくらでも詰める事が出来る。だが、どうせ期限は一ヶ月限り。またいつかは空になってしまうのだから。

「もういいかしら?」

「ええ、まあ」

「じゃあ、とりあえずはゆっくりしててね。さつきも説明したけど、これ書いとくのよ。毎日ね?」

そう言つて、看護師は部屋を去っていく。俺が貰ったのは、赤い日記帳だった。さつき検査の途中で、毎日書くように言われたつけ。記録も兼ねているんだろう。

彼女の事を聞いたのは、単なる興味だった。俺が健常だったら、もう少し彼女への受け取り方が違ったのかもしれない。もしかしたら、笑顔で歌っていた……なんて事も。

とはいえ、そんな事を思つても現実は何も変わらない。いくら俺の興味を引こうが、所詮彼女もいつか忘れ去つてしまう有象無象うざうざむざうざにすぎないのだ。

せめて、今日の日記に形として残しておいてあげよう。俺は、チェストの上に置かれた日記帳とペンを手に取った。

十一月一日(土)

天気：晴れ

リセット開始。検査があつた以外には、特筆すべき事は起こらなかつた。あとは、弦巻ころろという子が来たくらい。彼女はとても明るく、歌も上手い子だった。ただ少し……というか、かなり変わった子だつたように思う。

二日目

翌日。寝る前に頭につけられた装置も特に意味は為さなかったよ
うで、検査結果からは大した収穫が得られなかった。そもそも、あま
り期待はしていなかったから別に良いが。

ベッドを起こし、俺はぼんやりと外を眺める。雲一つない空模様と
一本の木が覗けるだけで、大した景色も見られなかった。

「暇だなあ」

俺がそう呟いても、誰も答えてくれる人はいない。特殊な病気の患
者だからか、病室には俺一人しかいないからだ。親だと思わしき人達
も今はいないし、話し相手がいないというのは辛いものがある。

この時期に吹く風は木枯らしと呼ばれる。木を吹き枯らすとはよ
くいったもので、外の木も葉が全くついていない状態だった。春や秋
の半ばなら、桜だったり紅葉だったりが見られたかもしれない。それ
なら、少しは景色も楽しめただろうに。

病室のテレビを着ける。が、やっぱり面白いと思える番組はなかつ
た。誰が出ていようが分からないし、その度に虚しくなるからだ。ス
ポーツでもあったら良かったんだけど、この時期の昼にテレビでやつ
てるスポーツなんてそうそうないし。

「あ……。日記書こうかな」

チェストの上に置かれていた日記帳を見る。が、すぐに書くことが
ないのを思い出して止めた。だって、起きてから検査の結果聞かされ
ただけだし。

日記帳を開くと、昨日書いた分が一ページ目にある。そこで俺はふ
と思った。今までの日記帳はどこにあるんだろう、と。

看護師さんの話によると、俺が障害を抱えるようになったのが五ヶ
月前の六月。てことは、今までも日記を書いていたんじゃないだろう
か。無論、今月から始めたという可能性もないわけではないが。

「……やっぱないか」

チェストの引き出しを開けても、手荷物を探しても、やはりそれら
しきものは見当たらなかった。やはり、今月からの試みなのだろう。

それを読めば、少しは何か思い出せたりするかと思ったのに。そうでなくとも、退屈はしのげそうなのに。

「はーやとー!!」

「こ、こころちゃん。ここ病院だから静かに……」

俺の溜め息をかき消すかのように、彼女はまた現れた。私服で来たところを見ると、今日は歌いに来たわけではないようだ。それでも満面の笑みで手を振る姿は、昨日の出来事を彷彿とさせる。

付き添いの子は、昨日とは違った。水色の髪をサイドテールにしており、少し気弱そうに見えた。ハロハピのメンバーだろうか。直感だけど、ミッシェルの中の人ではない気がする。

「こんにちは、弦巻さん。今日はどうしたの?」

「隼人に会いたくて来たのよ!! ちゃあんとお見舞い品もあるわ!!」
「それはどうも」

なるほど、お見舞い品があるなら無下にすることは出来ない。彼女から受け取った箱の中身を見ると、高そうなケーキが複数個入っていた。聞けば、シェフにわざわざ作ってもらったとか。

昨日知り合ったばかりのはずなのに、何でここまでするんだろう。昨日笑わなかったからだろうか。もしそれが本当だとしたら、彼女は存外諦めが悪いのかもしれない。

「さっ、食べて食べて。美味しいものを食べたら、きつと笑顔になれるわ!!」

「う、うん……」

なるほどそういう事かと、妙に納得できた。楽しいからくる笑顔ではなく、今日は幸せからくる笑顔で攻めようと。昨日とは路線を変えてきたわけだ。

弦巻さんに急かされるから、急いで中を吟味する。チョコレートケーキにイチゴケーキ、モンブランにチーズケーキ。一口サイズのケーキがズラリだ。何から食べようか。

色々あつて迷うが、ケーキを選ぶ段階である事に気付く。俺は自分の好きな食べ物も、嫌いな食べ物も知らない。故に、何を食べたらいのか分からない。

病院で出された食事で嫌いなものは特になかった。大好物も特になかった。傾向としてはご飯よりもパンが好きなようで、魚よりも肉派だった。デザートも……特に問題なく食べられたと思う。もしかしたら、満遍なく食べられるのかもしれない。

「い、いただきます」

最初に目についたチョコレートケーキから食べることにする。みんな大好きチョコレート。これが嫌いな人なんて見たことないし——自分が覚えてないだけだが——、自分がまさかそうだとも思わない。食べて『これ嫌いでした』とは言えないし、まずは無難な奴から。

口の中いっぱい広がるカカオの風味。ほろ苦さが先行して、甘味は後からやってくる。これは——

「あら？ お口に合わなかったかしら？」

「そ、そんなことないよ。美味しいよ」

苦し紛れだった。口の中にメツチャ残る。焼けつくような感覚が、喉の奥底にある。水が飲みたい。ケーキを食べた感想がこれである。結論からいえば、一つ目から地雷を踏んでしまったようだ。俺、チョコレートとは相性が悪いらしい。誰だよ、嫌いな人なんて滅多にいないとか言ったヤツ。いや、自分だけでも。

「んー。ケーキはあまり好きじゃないのね」

「ごめんね、弦巻さん。そんなつもりはなかったんだけど」

彼女の表情が若干だが曇る。ガツカリさせてしまっただろうか。

少し申し訳なくなる。

「やっぱり歌うしかないんだわ!! 花音、いくわよ!!」

「え、ええっ!? ここ、病院だよ……? 楽器もないし……」

「大丈夫よっ。昨日もやったもの」

「そういう問題じゃない気がするよお……」

切り替え早いな、オイ。俺が僅かながら心配した時間よりも早いじゃないか。俺の気持ちを返してくれ。

相変わらず弦巻さんは強引だ。そして全然めげないなあって。一つ一つの行動がこちらの予測を上回るから、退屈しないのは良いけ

ど。その点だけは彼女に好感が持てた。

「大変だね、弦巻さんの付き添いは。えーつと……」

「あ、松原花音まつばらです。『ハロー、ハッピーワールド』でドラムをやります」

薄々感じてはいたけど、この人もバンドのメンバーだったらしい。でも、担当がドラムなのは少々意外だったなあ。なんていうかこう……自分の中のイメージと。人は見かけによらないって本当だ。

「あの、っ（迷惑だったらごめんささい。昨日も美咲みさきちゃんと来たって聞いたし……」

「気にしないで。楽しませてもらってるから」

まるで保護者みたいだな。代わりに謝る松原さんを責めるのはお門違いだし、暇潰しになってるのも事実。出来るだけ優しい口調で、俺は彼女に返す。

美咲ちゃんってのは、恐らくミッシェルの中の人だろう。

「でも、隼人は笑ってないわ？」

「それとこれとは話が違うよ。言葉の綾ってヤツだね」

来るだろうなと思っていた質問が、弦巻さんから投げ掛けられる。確かに弦巻さんの理論上では、俺は笑顔じゃないとおかしいかもしれない。だけど、弦巻さんの言う『楽しいければ笑顔になれる』の定義が誰にでも当てはまるかって話。俺の楽しいは、見ていて飽きないから楽しいのだ。興味本位のそれに近い。

「例えばさ、松原さんはどんな時に笑顔になる？」

「えっ？ わ、私だったらお友達とお話してる時とか、ハロハピの皆とライブしてる時とか……かな」

「弦巻さんは？」

「んー、そうねえ。いつも笑顔よ!!」

「だよね……まあいいか。要するに、笑顔になる条件も人それぞれって事だよ。俺に松原さんの条件が当てはまらないようにね」

バンドはやってないし、友達もないしね……と付け加えておく。とはいえ、全くいないというわけではないのは、昨日ケータイを見て分かった。先月、結構数のメッセージのやり取りをしていたから。だ

が、結局一ヶ月だけの付き合いである。

話を戻そう。十人十色という言葉のとおり、人にはそれぞれ個性と
いうものがある。笑顔になる条件も、人によって分かれるだろう。よ
く笑う人と、感情をあまり出さない人がいるように。

俺が言いたいのは、無理に笑わせようとしても意味ないよつていう
事と、俺の事は諦めてほしいつて事。退院したら、彼女と会う機会も
会つて話す理由もないのだから。

さすがの弦巻さんも、これにはうむむむと唸っている。眉に皺しわを寄
せて困り顔。だが何か思い付いたのか、すぐに表情を変えた。

「そうだわ隼人!! あたしとお友達になりましょ!!」

「……は？」

「隼人が笑顔になる条件、あたしも一緒に探してあげる。これなら問
題ないわ!!」

弦巻さんの提案に、俺の思考は一瞬止まった。この人、ここまで
言つても諦めないの？ 本当に何なんだ、この弦巻こころという少女
は。

「あのさ……」

「ん？ 何かしら？」

「どうしてここまでするの？ 俺と君、昨日会つたばかりだよ？」

「付き合いの長さなんて関係ないわ。あたし、隼人の笑顔が見たいも
の!!」

『世界を笑顔に』と謳っている事からくる意地だろうか。それとも、俺
の話を分かっているようで分かっていないのか。単に、彼女がバカな
のか。俺には分からなかった。彼女がここまで俺に興味を示す理由
が。

だつてケータイを見ても、弦巻さんと連絡先の交換なんてしていな
い。正真正銘、本当に会つたばかりなのだ。

最終手段として、自分の病気を話す事も考えた。だがここまで来て
は、もうそれすら意味を為さないのではと思いとどまる。松原さんは
松原さんで、彼女を止める気配すら見せない。

直接『嫌だ』とは言えず、断るための上手い口実も見つからず。あ

とは彼女に為されるがままであった。トークアプリはお気に召さないのか、電話番号を交換。弦巻さんの強引な薦めで、なぜか松原さんとも連絡先の交換をする事になった。こちらは、トークアプリ。どうせ一ヶ月で全部忘れてしまうのに。仮に彼女の前で笑顔を見せられても、来月にはまた笑い方を忘れてしまうのに。虚しくぶつけようのない想いが積み重なるばかり。でもそれを口に出すことはできず、俺は弦巻さんの電話番号を眺め続けた。

十一月二日（日）

天気：晴れ

まさか、弦巻さんがまた来るとは思ってなかった。今日はケーキを持ってきてくれたが、俺はどうやら洋菓子が苦手らしい。特にチョコレートは、二度と口にしたくない。

彼女から強引に友達宣言をされ、連絡先を交換した。早速夜に電話がかかってきて、二時間も相手にしていた。ずっと聞く側だったとはいえ、さすがに疲れたかも。

四日目（I）

「つんく。カラダがバキバキだ」

首をコキコキと鳴らしながら、ふわあと大あくび。さすがに三日間も寝たきりでは、カラダもなまってしまいか。検査で入院していた土日はともかく、祝日^{文化の日}まで家に籠っていたのは怠慢だったと反省。遅すぎるが。

俺はすでに誕生日を迎えて、現在は16歳。たとえ脳に障害を抱えているとはいえ、学校には行かなければならない。親に送迎されて着いた高校は、ごく普通の共学校だった。

正直、思うところはあある。授業内容は把握できているのか。部活動や委員会は、どうなっているのか。

そして何より——人間関係。クラスメイトは病気の事を知っているのか。どう思われているのか。たかが一ヶ月の付き合いとはいえ、学校の一ヶ月は長い。入院していたときは考えもしなかったが、いざとなると怖いものだ。

親は心配するなど言っていたが……。

「おつ、隼人じゃねーか。おつす!!」

「お……おつす?」

とりあえず一年生の昇降口でウロウロしていると、背後から声をかけられた。俺より一回りくらいガタイの良い、男子生徒だった。俺を知っている人なのは間違いない。……名前分らないし、生徒A这件事情で。

同じように返すが、Aは首を傾げる。が、すぐに何かを思い出したかのようにポンと手を打つ。

「そうか、月始めだったな。隼人、お前は三組だぜ。教室案内してやるよ」

「え? あ、ありがとう」

靴箱の場所を教えてもらい、教室に案内してもらおう。自分の今までの心配を嘲笑うかのように、彼はさも当たり前前に振る舞っている。

病気の事を知っていた上で、俺に親切にするのか。毎月同じ事を繰り返しているのか。面倒ではないのだろうか。そんな疑問が尽きない。向こうは純粋な親切心だというのは、接している俺が一番分かっているのに。

移動中にも、色んな事を彼は話してくれた。担任の先生は怒らせるとか、ヤバいとか、クラスではあの子が可愛いだとか、アイツが面白いだとか。どうせ一ヶ月で忘れるのに……とは思ったが、ここまで親切にされては彼に申し訳ないように感じた。

「さ、着いたぜ〜」

Aがガラツと教室のドアを勢いよく開ける。生徒の視線が一瞬集まったが、すぐに分散した。そして聞こえたのは、次々に飛び交う挨拶の数々。まるで、普段の日常を繰り広げているかのようだ。

まるで……という言い方はおかしいか。普通の人たちからしたら、何も変わらない日常を過ごしているだけ。イレギュラーなのは自分だけなのだ。

だが、その日常に自分も含まれているのは俺にとっては予想外すぎた。俺は何も覚えていない。気分は転校初日と同じだ。誰からも手にされないというのはある種覚悟していたが、こうも普通だと逆に困惑する。

Aに座席を案内され、俺は席につく。隣の人は気さくに話しかけてきたし、先生も存外普通だった。俺は確かに、この一年三組で当たり前が存在なのだ。

居心地は悪くない。皆が仲良く、いいクラスだ。むしろ良いと言っている。だから……だからこそ、『一ヶ月限り』であることが脳裏によぎる。

そう、どうせ忘れてしまうのだ。いくら良い居心地でも仲の良い友達がいなくても、一ヶ月で容赦なく忘れ去ってしまう。そのことが、全てを無駄だと思わせる。

この居心地の良さは、逆に俺の孤独感を加速させた。

——どうせ、一ヶ月で忘れるのだから。

★★★☆☆

今月初の登校は、特に変わったことが起こることもなく終わった。ちよようど先月に文化祭が終わったらしく、しばらくは学校行事もないのだ。その方が良かった。

授業内容に関しては、ほぼ問題はないと言って良かった。自分は真面目な方であるらしく、全ての授業のノートをちゃんと取っていた。理解の遅れも見られず、そっちでは現時点で心配はない。

「はあ、疲れた」

それでも、カラダに溜まった疲労感は拭えなかった。俺はガクリと肩を落とす。同級生との会話や、クラスでの自分の立ち位置を把握するのに、神経をすり減らしたからだ。

結論からいうと、クラスメイトは誰も俺の事をひいき贖したり煙たがる事はなかった。ちよつと厄介な障害はあるが、クラスの一員という認識らしい。病気の事は皆知っていたし、その都度色々教えてくれた。だが何も知らない人間からすれば、それはそれで辛いものがあった。

やはり、人間関係に関してはキレイさっぱり抜けている。知識とは別に、自分に関する記憶だけ忘れるようだ。おかげでもうヘトヘトである。

「帰って早く寝——着信？」

一刻も早く帰りたい。そんな俺の歩みを止めたのは、ケータイのバイブレーションだった。そういえば、授業中に鳴ると困るからバイブに設定していたな。

——誰からのものかは分かりきっているけど。

「……もしもし」

『はーやとー!! やつと出たのね。お昼からずっと掛けていたのにつ』

「学校内ではケータイ使えないの。で、何の用？」

弦卷さんが、昼間からあげつない数の電話をしていたのは知ってい

る。面倒そうだったから折り返しをしなかっただけだ。何を言い出すか、分かったもんじやないもの。

『あなた、二日に退院したじゃない？ そのお祝いをしようと思ったの!!』

なぜ彼女がその事を知っていて、なぜ退院祝いをする謂れがあるのだろうか。大体、俺は定期検診で入院してただけだ。退院しても、めでたくも何ともない。

電話の向こうではしゃぐ弦卷さんを想像すると、余計に疲労感が増す気がする。今度は何をさせる気なのか。

「今から会うとなると時間下がるし、もう帰り着くし。悪いけど、気持ちだけ受け取っておくよ」

『あら、遠慮しなくていいのよ。その心配はないわ!!』

半分本当だが、半分嘘だ。具体的には時間が下がるのが本当で、もう帰り着くというのが嘘である。こうでもしないと、引き下がらないだろうから。嘘も方便ってね。

だが、弦卷さんはそんな簡単に食い下がるほど甘くなかったらしい。電話口なら何も出来ないだろうから、これは別にいい。家に帰り着けばこっちのものだから。いつそ、会話を長引かせて時間を稼いでもいい

……そう考えていた自分が甘かった。

「なんでさ。俺の場所知らないでしょ?」

『知ってるわよ? だって、今あなたの後ろにいるもの!!』

「へえ、後ろねえ……後ろうし——うえええ!?!」

記憶がリセットされてから、初めてマトモに感情を表に出したかもしれない。それぐらいビックリした。だって、自分の真後ろにいきなり人がいたら驚くでしょうよ。メリーさんですかあなたは。

弦卷さんは両手を振って、相変わらず無邪気な笑顔を見せる。純度満点、悪気皆無の笑顔だ。もう嫌この人。

「隼人ってそういう顔もするのね。初めて見たわ」

「十人に同じことやったら、十人が同じ顔をすると思うよ。大体、何で俺の場所が分かったのさ」

「あたしの学校と隼人の学校、近くだもの。正門近くで待った甲斐があったわ」

その笑顔は、腹立たしさを通り越して清々しさすら感じさせる。ホントにこの人無茶苦茶だ。最初から俺を巻き込むつもりだったんじゃないか。強引なんてもんじゃない。

彼女に付き合うことが確定してしまった俺は、ガツクリと肩を落とす。すると弦巻さんは、『あら、元気がないのね』なんて言い出して。まったく誰のせいだと思ってるんだ、誰の。

「学校どうだった？ 笑顔になれたかしら!？」

「おあいにくさま。色々と疲れたよ」

「あら、そうなの。んー、どうやったら隼人は笑顔になるのかしら」

「さあね」

人差し指を唇に当て、弦巻さんは真剣に考える。彼女といえる時の話題といえば、やはりこんな事だった。どうやら、彼女はまだ諦めてないらしい。

こないだから堂々巡りの会話はいい。それよりも、今日は何をするかの方が俺は気になった。

「で？ それより退院祝いの内容って?」

「私たちのライブの招待券をあげるわ!! 隼人に、ぜひ見てほしかったの!!」

そう言うと、弦巻さんは一枚の紙切れを俺に手渡す。確かに、それはライブのチケットだった。ライブハウスでやるなんて、思ったより本格的に活動しているんだな。

どんなことをやるんだろう。あの弦巻さんが普通に歌うだけで済むとは想像しにくい。花火使ったり、なんかバズーカみたいなの打ったり……。さすがにないよな。いや、きつと、多分、恐らく。

「ライブ、ね……。まあいいけど」

「あたし達のライブを見たら、きつと隼人も笑顔になるわ!! いつつもライブに来る皆も、笑顔になってくれるもの!!」

それはどうだろうね、と心の中で呟く。弦巻さんの歌は嫌いじゃない。だが、笑顔になるかはまた別の話。これはもう何度も言った。

「ねえ、弦巻さん」

「何かしら?」

「仮に俺を笑顔にしたとして、その先に何かあるの? ただ笑うだけだよ? 別に、何かが変わるわけでもないし……」

「何でこんな質問をしたんだろう。自分自身にそんな疑問を抱いたのは、彼女に尋ねた直後だった。」

彼女のしつこきに対する怒り? 彼女への根拠のない期待? どちらも違う気がする。恐らく純粹な——心からの疑問だ。

「さあ? 私にも分からないわ」

「はあ?」

だが、返ってきたのは的はずれな答え。俺は、思わず間の抜けた声を出す。

「だって、あたしもあなたの笑顔を見たことないもの。その後になんかあるかなんて、分かるわけじゃないじゃない」

「そ、そりやそうだけど……」

「それに、何も変わらないなんて誰かが決めたわけじゃないわ。もしかしたら、変わるかもしれないじゃない」

『もしかしたら、隼人が普通に笑えるようになるかも!!』なんて、彼女はそんな事を言う。まるで、そうなると思っていて疑わないうちに。そんな根拠は全くないのに。

でも弦巻さんの言葉には、説得力があった。それはなぜか。

……きつと、彼女が大真面目に言っているからだ。馬鹿げたような事でも、心から信じているから。だから、芯があるように聞こえてしまう。そう、実際の信憑性しんぴょうせいなんか抜きにして。

「……やっぱり、変な人だね。弦巻さんって」

「そうかしら?」

「そうだよ。たかだか人を笑わせるのに、ここまでする人なんていないと思うよ」

「あら、あたしは皆を笑顔にするならなんだってやるわよ。それに……」

クルリと、弦巻さんがこちらを向く。靡なびいたブロンドから、仄ほのかに

甘い香りが漂う。

少しだけ、心臓が跳ねた。さつき驚いた時とは違う、別の理由で。「やっぱり、隼人の笑顔が見たいっ」

歯をニカツと見せて、彼女はそう言った。今まで見た中でも、とびきりの笑顔だ。本当にこの人は、よく笑う。

少しだけ見惚れた。今日多くの人に会ったが、笑顔らしい笑顔を見せた人はいなかった。それは、土日の間で弦卷さんと話したからそう感じるだけなのかもしれない。黙っていたら綺麗なのにね、この人。

残念美人だなあと少し失礼な事を考えていたら、弦卷さんが俺の手を握った。

「うえ？」

唐突だったから、変な声が出てしまった。弦卷さんは相変わらずニコニコしていて、何がしたいか分からない。

……するといきなり、グイツと腕ごとカラダを引かれた。

「はっ？ ……え？」

「ほらっ、そうと決まれば早くライブハウスに行くわよっ!! ダアッッシュ!!」

「ちよちよちよ?! 弦卷さん、待って——って聞いてない!」

「さあつ、隼人を笑顔にー!!」

弦卷さんは俺の声に耳なんか貸さず、全速力で駆けていく。物凄く恥ずかしい文言を、道のど真ん中で叫びながら。やっぱり変だよこの人!!

夕暮れ時。手を取り合い走る影が二つ。腕を突き上げて走る弦卷さんの進行方向に、沈みかけの太陽が重なっている。太陽は今日の役目を終えたというのに、どうにも眩しくて。

俺は空いている手で顔を覆う。夕焼けに照らされて、弦卷さんがとても輝いて見えた。それは、今の俺には目映まばゆすぎるほどの光だった。

四日目（Ⅱ）

ライブハウスCiRCLEサークルに着いた頃には、もう肩で息をしている状態だった。ずっと走ってきたからね。体力は人並みかそれ以下だ。キツイ。

「隼人、どうかしたの？」

なんで弦卷さんはケロっとしてるんでしょね。俺を引っ張って来たっていうのに。

ていうか、そんなきよんとした目で見ないで。なんか情けなくなるから。

「走ったからね。疲れたんだよ」

「あら、そうなの。じゃあ中に入りましょっ」

「待って選択肢はないんだ……」

呆れはするが、驚きはしない。だって、弦卷さんだもの。何となく、こう言うかなって予想は出来てた。弦卷さんはまたもや俺の手を引き、CiRCLEの中へと引きずっていく。

中は結構キレイだった。ライブハウスってもう少しゴミゴミしてるところだと思ってたから、少しだけ意外だった。客層は、俺たちと同じような学生が多いように感じる。

受付があって、そこでチケットの回収をする。そして飲み物を持って観客席へ……というのが一連の流れだ。立ち見のスタンディングと座席があつたが、今回は座席にした。弦卷さんはスタンディングを推したが、ここは譲らない。なんでかって、絶対に体力が持たないから。

「あれっ、こころん？」

「え……？ あら、香澄かすみじゃない!!」

ドリンクサーバーの列に並んでいると、一人の女の子が弦卷さんに声をかけてきた。……どうなっているんだ。髪型が猫耳みたいになっっている。一体、どんなセットをしたらこうなるんだろう。触ってみたい。

そんな冗談はさておくとして。

「お友達？」

「ええ、そうよ。同じ学校だもの」

「戸山香澄ですっ!! P o p p i n , P a r t y っ て バ ン ド で、ボーカーとギターやつてるよ!!」

「陰山隼人です。よろしくね、戸山さん」

「香澄でいいよお〜」

随分と元気が良くて、明るい子のようだ。

戸山さんは、ズイズイツと俺に詰め寄る。さすが、弦巻さんの友達と言ったところだろうか。初対面なのに、距離がいきなり近い。

「それはそうとこころん、準備はいいの？ はぐと美咲ちゃんが探してたよ？」

「あらっ、もうそんな時間なの？ それは行かなきゃいけないわね」

腕時計を見ると、開演まで三十分ほどしか残されていないなかった。ハロハピの順番がいつかは分からないが、普通は音合わせとかやるものじゃないのだろうか。だが、弦巻さんに常識とか普通なんて通用しないな、と考えた後に気付く。

「じゃあ、あたしは行くわね隼人」

「うん、頑張つて」

「ちゃんと、しっかり見てるのよっ!!」

「はいはい」

弦巻さんがドリンクサーバーの列から抜け出し、人混みの中に消えていく。ちよつと立ち止まって手をブンブンと振るので、仕方なくそれに応えていたり。早く行きなよ。

さて取り残された俺は、どうすればいいだろう。戸山さんと二人きりだ。初対面で何を話せばいいのか分からない。気まずい。

とりあえず自分の前が空いたので、ドリンクサーバーで飲み物を選ぶ。……コーラでいいかな。注がれるのを待っていると、隣でジーツと視線を感じた。戸山さんがこちらを凝視している。

「戸山さん、どうしたの？」

「あ、ううん。隼人くんって、こころんとどんな関係なのかなーって。

気になっちゃった」

「え？ うーん……」

唐突な質問に、俺は唖って考える。俺を笑わそうとして付きまわられてる、なんて弦卷さんの友人に言えるわけもなし。いざ考えてみると、妙な関係だ。

「あ、無理に答えなくていいよ!! ころんが男の人といるなんて珍しいから、気になっちゃって」

「そうなんだ。そんな大層な関係じゃないから、気にしなくて大丈夫だよ」

「お友達？」

「まあ、そんなところかもね」

こないだ友人宣言されたし、間違ったことは言っていない。濁した言い方だったが、戸山さんは『そっか』と言うだけであっさり引き下がってくれた。

「ライブハウスは初めて？」

戸山さんはすぐコロツと表情を戻して、話題を変える。

「そうだよ。弦卷さんに連行されちゃってね」

「へー、そっか。じゃあ、私と一緒に見よっ。私もころんのステージ見ようと思ってたんだ!!」

「いいの？ 俺と君、初対面だけど」

「だいじょぶだいじょぶっ。ころんの友達だから、もう私とも友達だよ」

何か弦卷さんみたいだな、と戸山さんに少しだけ既視感を覚える。ピヨコンと、猫耳が跳ねそうな勢いだ。実際は固めてるから、そんな事は起こらないだろうけど。

俺としても一人でいるのは不安だったし、断る理由はなかった。戸山さんの理論はよく分からなかったけど。友達……ね。

随分と友達のハードル低いなあって。弦卷さんの人望のおかげなのか、戸山さんがフレンドリーすぎるのか。いや、どちらもかもしれないな。

また脳裏に、『どうせ一ヶ月』の文字がよぎる。せつかく関係を築き

上げて、すぐに崩れ去ってしまう。その事實は、どうしても俺をネガティブにさせた。友達を作る意味は？ ライブを今から見る意味は？ 突き詰めれば——生きる意味は？

……止めよう。こういうことはあまり考えたくない。虚しくなるだけ。頭空にして生きたほうが、絶対に健康的だ。ふうと息を吐いてから、戸山さんを追う。幸い、弦巻さんのライブはあれこれ考えるのを止めさせるのに向いているような気がした。

★★★☆☆

「ハッピー!! ラッキー!! スマイル!! イエイエイエイ!!」

……本当に、今ライブハウスにいるんだろうか。そう錯覚してしまふほど、彼女達のステージは俺の予想を上回っていた。およそ想像していたバンドのライブとは、だいぶ違うパフォーマンス。よく言えば何でもアリのパーティー、悪く言えばやりたい放題。

ギターの子は、まるで演劇でもやっているかのような立ち振舞い。女の子なのに凛々しく、堂々としている。……まあ、これはライブなだけで。

ベースの子は、楽器を持っているのにも関わらず激しく動いている。ステップを踏み、リズムに乗りながらも音を奏でている。ライブ……なんだよな？

ドラムの松原さんは……さすがに普通に叩いていた。それでも、ステージ上ではしゃいでいる人たちを見て楽しそうだ。ライブだな、うん。

「さあつ、もっと盛り上がって行くわよー!!」

そしてステージ上を駆け回る弦巻さん。異様なほどの存在感を放つミッシェル。

さて、松原さん以外を見てもう一度問おう。果たして、これはライブなのだろうか。

「おおく!! 風船だ、風船だよ!! こころんスツゴいねく!!」

この会場で、そんな事を考えているのは俺だけだろう。隣に立つて

いる戸山さん然り、みんなステージに夢中だ。とても楽しそうに、彼女達の演奏を見ている。

風船が大量に宙を舞い、また観客が沸き立つ。スゴい。先ほどから、会場の興奮が止む気配を見せない。

『世界を笑顔に』という謳い文句は伊達じゃない。ハロー、ハッピーワールドのステージは、とにかく観客を楽しませることに重点を置いていた。松原さんを覗くメンバーは動き回って、カラダ中で音楽を表現。

ボーカルという性質上、何も持たない弦巻さんは殊に走り回っていた。彼女の性格もあるんだろう。勢い余ってステージから落ちそうになるのを、何度もミツシエルに助けられていた。

曲調も、明るく前向きなものが多い。弦巻さんの意向がそのまま表れているような、でも音楽としてのクオリティーも高くて。やはり病室で感じたのはその通りだった。

——俺は、彼女の歌『は』好きなようだ。

「ねえ、隼人くん!! スゴいでしょ!」

「そうだね。みんな楽しそう」

「隼人くんは楽しくない?」

「楽しんでるよ。これでも」

「そうなの?」

戸山さんが、コテツと首を傾げる。漠然と眺めているだけの俺が気になったんだろう。表情が変わってないのが、自分でもよく分かる。

楽しんでる、という言葉に偽りは無い。でもやっぱり、この会場にいる人たちとの温度差は拭えなくて。盛り上がれないというのとは別に、どこか『盛り上がりたくない』という気持ちも含んでいる。

「楽しい時つてもっとワーツ!! てなったり、ウオー!! ってならない?」

「人それぞれだよ」

「そうかなあ」

戸山さんは、あんまり納得してくれなかった。コテツと首を傾げて、頭に疑問符を浮かべる。

「そりゃ、君たちは楽しいよね」

また弦卷さんが派手なパフォーマンスを始めて、会場の注目が彼女たち集まる。戸山さんの視線もそちらに写ったおかげで、俺の眩きは彼女の耳には届いてないようだった。

楽しいというのは、考えうる限り二つのものがある。その場で感じるものと、後に思い起こして共有し『楽しかった』と感じるもの。前者は俺でも感じるが、後者は無理だ。一ヶ月しか記憶が持たないのだから。

人間は楽しさに限らず、感情を共有したがる生き物だ。SNSの書き込みだってそう。自分と同じ感情を抱くものがないか探し、それを共有することで自己の確立や安定を求める。そうして気の合う者達が出会い、人間関係というものは出来上がる。

そして、それを保つために新たに感情を共有し続ける。今日のライブだって、後に戸山さんと弦卷さんの間で話題になるかもしれない。そしてまた話をして盛り上がり、仲を深めるんだろう。

俺には、それが出来ない。感情を共有するための素材、ここでいう記憶がたった一ヶ月で抜けてしまうのだから。誰かと振り返られるものがない。だから、話を合わせられない。

今日クラスにいた時から、ずっと感じていた。みんな俺に良くしてくれている。クラスのみんなの仲も良い。クラスに馴染むのに、一週間もかからないだろう。

なのに。いや……だからこそか。みんなとは仲良くなりたくないと思った。楽しい思い出を共有すればするほど、月末を迎えるのが怖くなると思うから。新たな月が始まれば、きつとまた同じことの繰り返し。何も分からない状態で学校に行き、みんなに良くしてもらって、集団でいるのが楽しくなって、でも月末を迎えると全部忘れることに怯えて。

そんなの——そんなのって、虚しいだけじゃないか。

「もつともつと!! みんなも歌ってー!!」

弦卷さんに続き、会場中にハロハピの歌が響き渡る。ボルテージは

最高潮。ステージ上の彼女は、やっぱり笑顔だった。

あれだけの人に包まれて、自分の好きなことをやり通せて、周りには仲間がいっぱいいいて。そりゃあ楽しいだろう。今の自分に満足しているだろう。

弦卷さんの歌は好きだ。透き通るような声で、上手く言えないがパワーのようなものを感じられて。初めて聴いたあの日以降、TVでプロの歌を聴いたりもしたが、彼女よりも魅力を感じたりはしなかった。

弦卷さんの笑顔もまた、好きだ。彼女が笑えばみんなが笑う。太陽と形容するに相応しいほどに、周りを笑顔で照らしている。俺には些か、眩しすぎるぐらいに。

だが、弦卷さんの事は嫌いだ。こちらの事情も知らずにズカズカと侵入してきて。友達になろう、あなたを笑顔にさせてあげると勝手な事を言っつて。

君は、いつたい俺に何を期待しているんだ。俺のどこに惹かれたんだ。興味本位なら手を引いてくれ。本心で俺を笑顔にさせたいと言うのなら諦めてくれ。

俺と君では住んでいる世界が違うんだ。君は俺がいなくたって、問題なく生きていけるだろう？

ライブから得たのは虚無感、そして喪失感。周りが盛り上がれば盛り上がるほど、俺はその輪に溶け込みたくなくなる。周りが楽しめば楽しむほど、俺の気持ちは冷めたものへなっていく。

楽しい思いをするだけ、後で苦しさが増すだろうから。だから、脳内の片隅に留める程度でいい。最後に、『そういえばこんな事もあったな……』とふと思ひ出すぐらいの記憶でいいのだ。

「……帰ろ」

何も考えないで、頭空にして見ようと思ってた。だが、結果は真逆のものになってしまっつて。ダメだ、あの人が絡むとどうしてもアレコレ考えてしまう。

盛り上がるステージとは真逆、出入り口の方へと俺は歩き出す。戸

山さんは、ステージに夢中で気づいていなかった。

ドアに手を掛ける前に、もう一度振り返る。弦卷さんはパフォーマンスの最中。俺の好きな……でも腹立たしい笑顔を振り撒いていた。少し後ろ髪を引かれたが、それでもドアを開けてしまえばこちらのものだった。会場外の空気は、なぜかとても清々しく思えた。

深呼吸をしてたつぷりの空気を吸い込む。地下にいるだけあって、冷静になってみればやはり埃っぽかった。でもなぜか、会場内よりも居心地はよくて。思わず俺は、もう一度だけ深呼吸をしていた。

十一月四日（火）

天気：晴れ

記憶が戻ってから初の登校。クラスメイトはみんな気さくで、簡単に話しかけてくれた。クラスに馴染むのは、そう難しくなさそうだ。

夕方は、弦卷さんに強引に誘われてライブを見に行つた。みんな楽しそうにしていたが、俺は心から楽しむことが出来ない。とうとう居た堪れたまなくなつて、途中で抜け出してしまった。弦卷さんといるのが辛い。あの子は何でも出来て、悩みなんて何一つ無さそう。そんな彼女に、少なからず嫉妬しているんだと思う。

俺は、弦卷さんが嫌いだ。

七日目

寝不足というのは、何も夜更かしをしたから起こるとは限らない。充分に眠ったはずなのにカラダが睡眠を欲する事もあるし、寝過ぎが却^{かえ}って良くないということもある。

「……もう、こんな時間か」

俺の寝不足は、どちらかといえば前者だった。精神的にくたびれていたり、学校に行きたくないという気持ちの表れでもあるんだろう。弦巻さんのライブを見てから、その思いがより顕著になってしまった。

だが、正当な理由でもないのに学校を休むわけにはいかないの、俺はモソモソと布団から抜け出す。……ああ、布団が恋しい。

部屋の鏡に写った自分は、酷い様相だった。ボサボサの髪の毛に、一切の覇気も見られない目。あまりの不細工さに、自嘲^{じちよう}の笑みが溢れる。

「隼人ー。起きてるのー?」

「起きてるよー」

いつもより五分遅かったせい、ドア越しに母親が声を掛けてくる。早く着替えて出ていこう。

「早くしなさい。あなたを待ってる人がいるんだから」

「……は?」

服を脱いだ矢先、身に覚えのない言葉が母親から浴びせられた。俺を待ってる? 誰の事だ?

誰かと登校する約束をしたんだろうかと、携帯を開いてトーク履歴を見る。だが、そんな約束を交わした友達がいるはずもなく。疑問は深まるばかり。

——そして、嫌な予感が高まるばかり。

「はっやとー!!」

「うわあああああ!?!」

嫌な予感の中。

ドアを開けて堂々と部屋に入ってきたのは、弦巻さんだった。

★★★☆☆☆☆

「今日もいい天気ねっ!!」

「やかましいわ」

思わず口が悪くなってしまうぐらいに、いまの俺は機嫌が悪かった。寝起きのそれも寝不足状態の時に、一番来てほしくない人が、着替え中の部屋に入ってきたのだ。そりゃあ機嫌も悪くなる。

弦巻さんは悪びれる様子を見せず、いつも通りの調子。唯一救いがあるとするれば、ちゃんと母親の許可を経て家に上がり込んだ事だろうか。俺の部屋へは無許可で入ってきたのだが。

「で、なんだったの? この朝早くから」

「隼人と一緒に学校に行こうと思ったの。もっともっと、隼人の事を知る必要があるもの!!」

頭が痛くなってきた。なんで俺の家知っているんだとか、もうこの際そんな細かい事はどうだっていい。なんで俺は、登校の時間までも彼女と顔を合わせないといけないのだろうか。問題はそこだ。

隣を歩く弦巻さんは、鼻歌を交えつつご機嫌な様子。今日も素敵な笑顔を隠すことなく見せている。弦巻さん本人は嫌いなのに、やっぱりこの笑顔は嫌いにならない。

「もしそうだったら、ちゃんと連絡してよね。あんまり君が急かすせいで、朝ごはんも食べないで出てきたんだから」

「あら、それは謝るわ。でも、つい今朝思い付いたもの」

そんなところだろうと思った。弦巻さんらしくて、妙に納得してしまう自分がいる。

「もう……コンビニにでも寄るから、ちょっと待ってて」

「どうして?」

「言ったでしょ。朝ごはん食べてないの」

怪我の功名で、幸い登校時間までにはだいぶ余裕がある。朝ごはんを買いに行くぐらいしても、罰は当たらないだろう。

「確かに、朝ごはんは大事ね!! 任せて隼人、それならオススメのいいところがあるわよっ」

「え? いや、別に朝ごはんなんてどこで買っても……」

「ほらっ。ここから近いし、せつかくなら美味しいものを食べた方が笑顔になれるわ!!」

俺の言葉を遮って、弦卷さんはグイッと俺の手を引く。この人は、人の話を聞かずに事を小さい頃に教わってこなかったんだらうか。こなかったんだらうなあ。

逆らうだけ無駄なのは分かりきっているので、諦めて弦卷さんについていくことに。訳の分からない、高い店にでも連れていくんじゃないだろうな。さすがにそんなわけないと思いつつ、心の隅で密かに疑っている自分がいる。

「……よっ!!」

いつのまにか、商店街に入っていた。弦卷さんは不意に立ち止まると、手を広げてお店に向ける。

「やま、ぶき……ベーカリー?」

予想に反して普通のパン屋。何の変哲のない、普通のパン屋だ。

「そうっ。あたしの友達のお家なんだけど、このパンはとっても美味しいの!! 隼人もきつと気に入るわっ」

ホントどこにでも友達いるんだな、この子。呆れ半分、感心半分だ。

弦卷さんがここを推す理由は、存外普通。至って当然のものだった。それならば疑いすぎるのも失礼なので、大人しく店内にお邪魔することにする。

自動ドアを通ると、焼きたてパンの良い香りが鼻腔びこうをくすぐった。それだけで、弦卷さんの『オススメ』という言葉が信用に値する。焼き立てというのは、やはりポイントが高い。

「どれにしようかな……」

パンはアレンジしやすいだけに品揃えが豊富で、何を買えばいいのか目移りしてしまう。ガッツリいけるピザパンやソーセージパン、ス

イーツ感覚でも食べられるあんパンやクリームパン等々。

あんまり悠長に選ぶ時間はないというのに、人間やつぱりこういうのは吟味したくなる。あれでもないこれでもない、トング片手に店内をグルグル。弦卷さんは、そんな俺をジーンと眺めている。

「隼人って、パン好きよね」

「そう……かな？　なんで？」

「だってそんなに悩むってことは、好きって事じゃない？　隼人楽しそうよ!!」

楽しいかどうかはさておき、弦卷さんの言葉になるほどと思ってしまった。確かに、嫌いなものでここまで悩む必要はない。

俺はパンが好きらしい。入院していた時も家でご飯を食べる時も、パンの方が嬉しかった気がする。というか、家の朝は三日前からずつとパンだ。母親も把握してらんだろう。

「そうかもね。弦卷さんのオススメ、ある？」

「うーん、そうねえ。チョココロネが美味しいんだけど、隼人は嫌いだし……」

チョコは確かに嫌いだ。病室でチョコレートケーキを食べた時、一口で分かった。上手く誤魔化したつもりだったが、弦卷さんにもバレていたか。人の気持ちをガン無視してるようで、この人の観察眼は鋭い。

人差し指を唇に当てながら考えるのはクセなのか。別にないならないでいいんだけど、一生懸命になってるところに水を差すのも何だか申し訳ない。

「これとこれと……あとこれもどうかしら!？」

「いや、多い多い多い。そんなに食べきれないから」

「んー、困ったわ」

「とりあえず、お盆にパンを山のように積むのは止めて。食べても二つだから」

「そう？　少ないのね」

でも弦卷さんに任せると、收拾がつかなくなるのも事実。お盆を突き返して、パンを元のところに戻してもらおう。こっだけ山のように

取って、お金取られてもおかしくないからね。

普通こんなには食べられないでしょと俺が聞けば、『あたしの友達はこれぐらい食べるわよ?』とのこと。どんな胃袋してるんだろうね、その子。やはり、類は友を呼ぶんだろうか。変な人って意味で。

まるで、一つしかお菓子を買ってもらえない子供のよう。弦巻さんはあれでもないこれでもないと言っている。相変わらず、変なことには一生懸命になる人だなあ。

「じゃあこれっ。これは!?!」

「これって……コロツケパン?」

弦巻さんが最終的に選んだのは、バンズにコロツケを挟みウスターソースで味付けした——コロツケパンだった。案外普通というか、数あるパンの中でこれを選んだのは少々意外。

「はぐみのお家のコロツケを使ってるの!! すーっごく美味しいのよっ」

「ふーん。じゃあこれにしようかな。後は適当に……これでいいや」

北沢はぐみ。ハロー、ハッピーワールドのベース担当だ。運動能力が高いのか、ライブでも軽快に動いていた。実家は精肉店で、ご覧の通り山吹ベーカーリーにもコロツケを届けているようだ。……という説明を弦巻さんから受ける。

そんな彼女イチオシのコロツケパンと、近くにたまたまあった焼きそばパンをとって精算。うん、思いの外ポリューミー。炭水化物ばっかだし。

「さ、一緒に食べましょっ!!」

「ちやつかり自分の買ってるし……」

「見てたらあたしも食べたくなかったもの。それに二人で食べた方が、もーっと美味しくなるわよ」

そんなものかね。弦巻さんはすでにベンチに座っている。嫌だと言っても、きつと離してくれないんだらうな。観念して、彼女の隣に腰を下ろす。

「いただきまーす!! つむ、ん〜!!」

「早いね、食べるの」

座った瞬間に大きな口でパンをガブリ。お嬢様って聞いたんだけど、その辺は気にしないのかな……って今さらすぎるか。

隣で美味しそうに食べられるとやっぱり気になるので、俺も一口。もちろんコロツケパンから。

「あ……美味しい」

甘辛いソースがしつかり衣に染み込んで。それがパンにも絡んで……。肝心のコロツケもホクホクで病み付きになりそう。美味い。今まで食べた何よりも。

「どう？ 気に入ったかしら!？」

「うん、結構好きかもしれない」

気に入った食べ物は何多かつたが、それらを初めて食べた時とは比べ物にならない衝撃だった。これがいわゆる、好物なんだろうか。ものを食べてるだけなのに、何か変な感覚。

「……それが隼人の好物なのね」

弦卷さんは目を細めて俺を見る。嬉しそうに、でもどこかしみじみとしていて。

「分かるの？」

「もちろんよ!! 顔が少しだけ、優しくなってるわ」

「え、う、うそでしょ?」

「ホントよ。もう少しだと思ふのよねー」

なんかその指摘が恥ずかしくて、慌てて自分の顔をベタベタと触る。……が、当然そんなの分かるわけない。なんだ、これじゃ恥ずかしいだけじゃないか。

弦卷さんは、『ほら』と言いながら電源のついていないスマホを俺に向けた。鏡代わりに画面を見る。そこに写っていたのは、相変わらず据わった目をしている不細工な男だった。何がもう少しなんだろう。

「何も変わってないと思うんだけど」

「むうー……」

ズイツと弦卷さんの顔が近づいた。顔立ちだけは整ってるから、俺は少しギョツとして距離を置く。柔らかなフワリとした香りが襲った。それにビツクリして、俺はさらに距離を置く。

が、俺が引くと弦卷さんはさらに距離を詰める。

「な、なに……う？」

「えいつ!!」

弦卷さんはジーっとこちらを見たかと思うと、両手で俺の頬を挟んだ。いきなり何するんだ。抗議の声を上げたかったが、それも口を動かせないから叶わない。

頬をつままれてグニグニくっつと引つ張られる。そしてそのまま、上にグイーツと持ち上げられて。結構痛い。

「んー、やっぱり分らないわ。もう少しで笑ってくれると思うのに、頬がひきつってるもの」

「そりや無理やり引つ張られたりしたら、誰でも強張こわっちゃうって」

「そうかしら？ 頬を触ると、結構リラックス出来るのよ？」

知らないよ。別に緊張とか何かで表情筋固まつてるわけじゃないから。ビックリして損したじゃないか。

『全く……』と溢しながら、またコロツケパンを一口。……やっぱり美味しいな、コレ。毎日食べても飽きないかも。

「あつ、また優しくなつたわ!!」

「ツ……!?!」

弦卷さんに顔を指差されて、慌てて口を覆う。完全に無意識だった。恥ずかしいから、いちいち嬉しそうに反応しないでほしいな。だから、君の要望には答えられないんだってば。

「また、隼人の新しい表情が見れたわねっ」

「……大袈裟だよ」

「どうやったら笑ってくれるかしら。コロツケパンをいっぱい食べさせたら……」

「却下。絶対にそれは止めて」

なんか恐ろしいことを言い出すし。この子だと冗談じゃ済まないから怖いんだよ。どう考えても、苦しくなって笑顔とは程遠くなるってば。

「冗談よっ。もっともっと、隼人の好きなものはあるはずだもの!!」

「……だといいいね」

弦卷さんが目を輝かせるから、俺はなるべく聞く耳を持たないようにする。こうなった彼女は面倒だ。また、おかしな事に俺を巻き込むに違いない。

彼女は何も言っただけ。足をブラブラとさせて、また鼻唄を歌っている。先日のライブでも歌っていた曲だ。こうして見ても、この人は何を考えているのか読めない。

強引すぎるところさえなければ、彼女は良き話し相手ぐらいにはなったと思うんだけどなあ。ズカズカとこちらに介入するから、どうしても彼女を好きになれない。人の話は一切聞かないし。

でも、不思議な事に彼女の友達が多い。変人扱いされてもおかしくないはずなのに、何故か人が集まる。魅力的な人には自然と人が集まるといえるが、彼女もその一人なのだろうか。

「きつと見つかるわっ!! 今日だって、自分の好きなパンを見つけたらじゃない?」

「それは……そうだね」

弦卷さんには、大口を実現させるだけの不思議な力があるんだと思う。自分の世界にグイグイ引っ張って、様々な景色を見せてくれる。それをきつと平然と行えるから、彼女の強引さに皆がついていくんだろう。

だからか。俺にとっては、彼女は怖い。嫌いだし、怖い。自分が変わってしまったようで怖い。努めて他人と深い関係を築かないようにしてるのに、それすら崩れそうで。

拒絶したくても出来ないのは、既に彼女に魅せられているからだろうか。それとも、単純に俺が彼女に甘いからか。

「じゃあ、そろそろ行こうか」

「そうねっ」

一緒に朝ごはんを食べただけ。こうして一緒に登校してるだけ。時間でいえばたった十数分の出来事なのに、君は俺にあれこれ考えさせるんだね。

弦卷さんと早く別れたくて、俺は歩調を速める。また、彼女がおかしな事を言い出さないうちに。俺にあれこれ考えさせないうちに。

また、原因のタネが増えた気がした。今日も、ぐっすり快眠とはいかなさそうだ。

十一月七日（金） 天気：晴れ

最近寝不足だ。布団に潜ると、やっぱり病気の事とかアレコレ考えってしまう。一生このままなのか……とか、将来職についたらどうなるのか……とか。でもやっぱり、そんな先の事よりも今をどうにかしたいという気持ちが強かった。何でだろうね。

あ、朝食食べたコロツケパンが美味しかった。これは本当に。

……今日は早く布団に潜ろう。

十日目

週明けの月曜日。学校に行くようになってから、ちょうど一週間が経った。決して長い期間ではないがクラスに馴染むのは割りと早く、現状特に問題はないと言って良い。そしてそれと同時に、もう十一月の三分の一が終わろうとしていた。

道行く人を眺めていると、厚手のコートを着ている人をちらほら見かけるようになった。いよいよ冬到来、といった感じだろうか。

本格的な寒さが増してくる今日この頃。そんな日に、俺は……俺はどうして。

「はい、四等ポケットティッシュユでーす」

「あちやー、外れかあ」

「ありがとうございますましたあ」

こんなバイトをやっているんだろう。

★★☆☆☆☆

事の始まりは、放課後唐突に起こった。

「あ、隼人っ。やっと見つけたわ!!」

「君はさ、とりあえずアポイントメントという言葉覚えてほしいな」
またいつかのように、校門付近で待ち伏せしていたらしい。弦巻さんは、俺を見かけるとタタタツとこちらへ駆け寄ってきた。

全く、いつも神出鬼没なんだから。今日は何の用だろうね。

「アホインコメンドウ?」

「いや全然違うし……もういい」

言うだけ無駄らしい。アホは君だ。

「それよりもっ!! 隼人、今日は忙しいかしら?」

「いや、別に。忙しくはないけど、すぐに帰りたい気分ではあるかな」

「じゃあ暇って事ね!! 今から、商店街に来てほしいの!!」

「ねえ、俺の話聞いてた?」

「ええ!! 忙しくないから、時間はあるのよね?」

相変わらず、会話のキャッチボールが難しい人だ。きよとんと首を傾げる彼女に、溜め息しか出なかった。これが全て天然なんだから、恐ろしい人だよなあ。

何をさせられるのやら。

「もうそういう事でいいよ。で、どういう用件?」

「一緒にバイトしましょ!! 詳しいことは、行ったら分かるわっ」

……ホントに、何をさせられるのやら。

商店街にはその名の通り、多くの街が立ち並んでいる。この町なら先日行った山吹ベーカリーを筆頭に、精肉店、青果店、魚屋……。休憩処として、珈琲店なんかもある。

夕方の今の時間帯は人も多く、その波を掻き分けながら弦巻さんについていく。昨今は大型量販店の台頭が問題視されているが、ここに関しては大丈夫そうである。

辿り着いたのは、小さな事務所のような場所だった。

「みーさきく!! 連れてきたわっ」

「ごころ遅い。もう集合時間の二十分も過ぎてるよ」

そこにいたのは建物の関係者らしき人物と、弦巻さんの知り合いらしき黒髪の女の子。制服が同じだし、きつと弦巻さんの同級生だろう。

……この声、どこか聞き覚えがあるような。いや、でも顔は見たことない。

「で、代役ってその人?」

「ええ、そうよ!! 美咲は初めて会うわよね?」

「初めて……。うん、一応初めてといえば初めてだね」

一応という言葉に引つ掛かりを覚える。ハロー、ハッピーワールドにはこんな子いなかったし、どこで見たのだろう。

「紹介するわ隼人。美咲よ!!」

「いや、それ全然紹介になってないから……。どうも、奥沢美咲おくざわです。よろしくお願いします」

「うん、よろしく。陰山隼人です」

ペコリと一礼。松原さん同様、マトモそうな人で良かった。

「仕事内容はここから……。聞いてないですよね?」

「何も知らされずに連れてこられました」

「だと思った。ホントこころは……」

どこか遠い目をする奥沢さん。困っているようで、その実嫌がつてはいないような。聞けば出るわ出るわの愚痴のオンパレード。

当の本人は、まーったく俺たちの話を聞いていないが。暇だからと、たった今部屋を出て行った。

「結構苦労してる?」

「もう慣れたよ。陰山さんは?」

「同じく、かな」

アハハと、俺たちに出てきたのは苦笑い。それぞれ、弦巻さんに振り回されている同士ってことで。互いに、考えることはおんなじなんだろう。

俺はどこか、奥沢さんに親近感を覚えた。

★★★☆☆☆

そして今に至る。バイト内容とは、商店街の福引きの係をすることであった。何の事はない、客の対応をして景品渡すだけの簡単な仕事である。本当はハロハピのメンバーが担当だったらいいのだが、諸用で来れなくなったらしく。人手がないところに、俺へ白羽の矢が立ったということだ。

何をさせられるかとヒヤヒヤしたが、想像よりずっとマトモな仕事で本当に良かった。仕事内容も決して難しくなく、お金も貰えるんだから文句なしだ。使い道ないけど。

しかし、まあ……

「わーっ、ミッシェルだー!!」

「ハイハイ、押さないで押さないでー」

「ミッシェルー!!」

「つてえ、なんでここまで混ぜてるの!?!」

ミッシェルの正体が奥沢さんだったとはねえ。着ぐるみ着て目の前に現れたときは、何の冗談かと思ったよ。顔は初めて見るのに、声だけ聞き覚えがあるのはそういう事か。病院で一度会ってるもんね。

そんなミッシェルは、商店街の人気者。ハロハピのメンバーとして生まれたのではなく、このマスコットとして生まれたらしい。今も、子ども達……と何故か弦巻さんから引っぱりだこ。何やってんのこの人。

「ほら、弦巻さん。仕事仕事」

「ミッシェルうー!!」

「聞いてないし」

弦巻さんは、完全に職務を放棄してミッシェルに抱き着くばかり。こんな大きな子どもを相手にしないとイケないとは、奥沢さんも気の毒だ。第一、バンドの練習なんかでいつでも会えるだろうに。

相方がもはや役に立たないので、俺は一人でお客さんの相手をする事に。やはり、自分の親世代の女性が多い印象。買い物ついでに福引券が貰えるからだろう。

期待感に胸を膨らませて引いては、ポケットティッシュを手に肩を落としていく人たち。不謹慎ではあるが、その様は中々に面白い。

まだ一等の当たりを当てた人はいない。今もなお、福引きをする人たちが誘うかのようにその景品は展示されている。

「ハワイ旅行、ね」

「あら、行きたいの?」

「うわっ!?! ……別に、そういうんじゃないよ」

弦卷さんがいきなり、ニョキつと視界に現れる。ミッシェルは解放されたようだが、依然として子ども達に囲まれていた。大変そうだなあ、南無阿弥陀仏。

俺が行きたそうに見えたんだろうか。実際のところ、全くそんな気はないのだけど。ただ、奥様方が狙っている一等賞の景品が気になっただけだ。

「そう。隼人は、どこか行きたいところないの？ お出かけて楽しんでいっよっ!!」

「特にないかな。どうせ……」

どうせ覚えてられないから。もはや、常套句のように頭に浮かぶ。

だけど、彼女は俺の病気を知らない。だから、この言い訳は使えなかった。

「どうせ?」

「……いや、何でもない。俺は君と違ってアウトドアじゃないんだ。静かに過ごしたいね」

「あら、それならアタシの家に来ない？ 家ならいいわよね?」

「え、うーん……。まあ、考えとく」

特に何も考えずに安請け合い。もつとも、弦卷さんと一緒にいれば家だろうが外だろうが静かには過ごせないんだろうが。

それでもいいか、とどこか樂觀視している自分がいる。まったく、矛盾した話だ。俺は、可笑しそうに肩をすくめた。

「二人とも、ちよつと来てくれない!?!」

二人で雑談をするぐらいには人が減ってきた頃。ミッシェルもとい奥沢さんが、慌てた様子で俺たちを呼ぶ。もちろん、ミッシェルの姿で。

「つぐ。えつぐ……」

奥沢さんが寄り添っているのは、小さな女の子だった。年は四つか五つぐらいだろうか。小さな手で懸命に涙を拭いながら、嗚咽おえつを漏らしている。

「おくさ——じゃなかった、ミッシェル。これは……?」

「迷子だよ。お母さんとはぐれたらしくて」

「あら、それは大変ね」

大変ね、って……。暢気な弦卷さんは置いといて、これは困った状況である。辺りはもう薄暗くなり始めているし、商店街にはデパートよろしく放送で迷子の呼び出しなんて出来ない。このままだと、親御さんを探すのが難しくなる。

「うわああん!!」

「あー、泣かないでー。ほら、ミッシェルがそばにいるからねー」

とうとう泣き出した女の子を、奥沢さんが必死にあやそうとする。が、商店街の顔ごとミッシェルも、迷子の女の子には意味がなかったようで。悲しいかな、女の子は泣き止む気配を見せない。

奥沢さんが、こちらに目配せをする。どうしようと困っている半分、手伝つてと頼んでいる半分だろうか。着ぐるみの目だから、そんな感情は伝わらないけど。

第一、そんな事言われてもどうすれば良いのやら……。

「どうして泣くのかしら?」

狼狽うろたえている俺に割り込んできたのは、弦卷さん。しゃがんで女の子の目線にまで合わせると、優しく語りかける。

「だ、だっで、ママが……。ママあ!!!」

「んー、困ったわねえ」

人差し指を唇に当て、思案する弦卷さん。彼女もまた、何とか女の子を泣き止まそうと考えているのかな。弦卷さんの考えは、俺には到底分からぬ。

「あつ、そうだわ!!」

急に声を上げたかと思うと、弦卷さんは福引きを開いているテントの奥に急いで戻っていった。当の女の子を完全に放置して。今度は何を思い付いたんだろう。きつと、意味があるんだろうけど。

弦卷さんがゴソゴソ何かをしている間にも、俺と奥沢さんで何とか女の子をなだめようとする。背中をさすってあげたり、声かけをしてみたりと色々。でも、そのどれもが効果を為さなかった。

やっぱり、泣き止ませるには親御さんを探す他ないんじゃないか……。
「準備できたわ!! さあつ、この指をよーく見るのよ」

内心諦めかけてたその時、弦巻さんが戻ってきた。だが、何かが変わった様子は見られない。指を見ろと言われても、変哲のないただの人差し指だ。

俺も奥沢さんも女の子も、言われた通りジツと人差し指を見る。疑問に思いながらも、指を見つめて数秒。不意に弦巻さんが動く。

「えいっ」

掛け声と共に手を振ったかと思うと、次の瞬間彼女の手には一輪のバラが握られていた。

これには、女の子も俺たちも驚く。

「お、お花……?」

「はい、これあなたにあげるわ!! まだ見たいかしら?」

「うっ、うん!!」

女の子は、弦巻さんにもらったバラを大事そうに両手で握る。端から見ただけでも分かる、ただの作り物のバラだ。だが彼女は、そんなバラを見て嬉しそうに微笑んだ。

女の子の要望通り、弦巻さんは次々と手の中からバラを生み出していく。何のことはない、簡単なマジック。だがそんな簡単なマジックは、女の子の笑顔をいとも容易く引き出した。

「すごいすごいっ!!」

「いい笑顔ねっ。その調子よ。寂しいのなんて、アタシが吹き飛ばしてあげるわ!!」

さつきまでの泣き顔が嘘みたいに晴れやかになった。俺たちはあんなに苦労したというのに、弦巻さんはあつという間に女の子の不安を笑顔に変えてしまった。

いや、そもそも考えが根本的に違ったんだ。俺は泣き止ませようとしただけ。弦巻さんのように、楽しさや笑顔を呼び起こすなんて発想がそもそも無かった。親御さんに会えないという寂しさを、笑顔で忘れさせる……理屈は分かるし単純だ。それが、年端もいかない子供なら尚更。

単純だが、効果は絶大。かねてから弦卷さんが言っている、『世界を笑顔に』の片鱗が見えた気がした。この人は、こうやって人々を笑顔にさせるんだなって。

「どうしたの？ ボーツとところを見て」

「あ、いや。弦卷さん、スゴいなって」

「まあ、ああいうのはこころの得意分野だからねえ……」

「だろうねえ」

女の子と談笑する弦卷さんを、奥沢さんと眺める。

「いつも言ってるんだよ。人は誰もが笑顔になる事が出来る、そういうツボを持つてるって。綺麗事に聞こえるかもしれないけど……」

「弦卷さんが言うのと、妙に納得出来ちゃう？」

小さくこもった肯定の声で、着ぐるみの奥から聞こえて来た。気持ちには分かる。俺だってそうだ。何でかな、根拠は全くないのに。

今月の頭から色々な人に出会って、この人だけは普通ではないと常々感じていた。……非常識な意味でも、超ポジティブな意味でも。もちろん、良い意味でも。

そして今日、初めてこの人を『スゴい』と感じた。いや、ライブの時から薄々感じてはいたが、今日改めて思った。この人は、いつも他の人を自分のペースに巻き込む。この人が『楽しい』と思えば、周りも楽しむ。『笑顔に!!』と言えば笑顔になる。まるで、皆魔法にかかったかのように。

「さ、あの子のお母さんを探しに行こうか」

「そだね。弦卷さん、呼んでくるよ」

女の子の親御さんは、すぐに見つかった。彼女はすっかり弦卷さんになつたようで、別れ際にも全力でブンブンと手を振っていた。その時の笑顔は印象的で、とても輝いて見えた。

他人とこうしているのを眺める分には、何とも思わないんだけどなあ。その矛先が自分に向けられると、やっぱり冷めた感情が生まれる。君はどうして、俺に付きまとうんだと。

女の子とのやり取りを見て、どこか心が落ち着いた気がした。それは確かだ。

弦巻さんをスゴいと思った。それも確かだ。

そうやって弦巻さんや彼女の周りが輝けば輝くほど、自分が黒く浮き上がるのも確かだった。どうして、俺はあの中に入れないんだろう。

そういう感情が芽生えてきたのもまた、確かだった。

十一月十日（月） 天気：晴れ

初めてバイトをした。福引きの案内をやる、簡単なバイトだ。やりがいかかそういうのは感じなかったが、新鮮な体験だったんじゃないかと思う。

体調の方はというと、芳しいとは言えない。寝不足は未だに続いている状態。今日はバイトをしたから、よく眠れると良いが。

十一日目

「今日は何か面白いこと、見つかったかしらっ!？」

下校するときは大体この言葉から始まる。

そして、返す言葉も大体決まっている。

「特に。いつもとおんなじだったよ」

「あら、そうなの」

俺と弦卷さんは、すっかり登下校を共にするようになった。朝は俺の家まで来て、夕方は校門付近でずっと俺を待っている。最初は驚いたが、もう断るのも面倒だし良いかなって。

返答が面白くなかったのか、弦卷さんはプイツと顔を背ける。だって、本当に何もなかったんだもの。授業を受けて、他愛もない話をクラスメイトとしたぐらいだ。

「じゃあさ、そう言う弦卷さんは何かあったの？」

「もちろんよ!! 音楽ではいっっぱい歌ったし、体育のサッカーも楽しかったわね!! あ、それにお昼休みに美咲とハロハピの曲を少し作ったわ!! あとは……」

「あー、ストップストップ。今度聞いてあげるから」

聞けば出てくるのは、小学生が言うような感想ばかり。曲作りはともかくとして、授業の内容なんて日常ありふれているものだと思うのだが。

でも、こんな話題でも延々と楽しそうに話すのが弦卷さんだ。きっと、言葉で表す以上に感じ取ったものがあるんだろうと思う。

まあ、今日は聞いてる時間がないわけだが。

「あら、どうして?」

「今朝言ったでしょ。学校帰りに用事があるって。君がその気になったら、ずーっと話しっぱなしだからね」

「ああ、すっかり忘れていたわ!! じゃあ、今日の夜にでも話させてもらうわね」

「あんまり遅くなりすぎない範囲でね」

用事があるというのは嘘ではない。別に、弦巻さんと別れるための口実では断じてない。

どうせその場しのぎをしたところで、『話し足りないわ!!』と言って容赦なく電話を掛けてくる子だ。もうその辺は諦めてる。

「そうだわ。隼人に話しておきたい事があつたの!!」

また唐突だなあ。あんまり良い予感はない。でも、気になるから聞き返す。

「なに?」

「明後日、アタシの家に来てほしいの!! 楽しいこと探し、しましょっ」

はあ、弦巻さんの家ねえ。昨日の福引きのバイトの時、そんな話をしたような。すごい豪邸だと聞いた事がある。

というか、楽しいこと探してアバウト過ぎるでしょ。しかも、それを自分の家の中でやるのか。『俺の』楽しいこと探し、というニュアンスなんだろうけど。

「楽しいこと探して、何をするの?」

「いっぱい遊んで、パァっと楽しむのよ!!」

「いや、何も情報が伝わらないんだけど」

だいいち、君は何をやっても楽しむでしょ。

そんな俺のぼやきも彼女には通らず。彼女の中で、俺はもう行くことが確定しているんだろう。

明後日……明後日かあ。あいにく、何も予定がないや。

「とにかく、来れば分かるわっ。今度こそ、隼人に『楽しい』って思わせるから!!」

こういう風に、弦巻さんが俺を何かに誘うのは何回目だろう。毎度洩々といった形で彼女の誘いに乗るが、思えば自ら断つた事はなかった。

弦巻さんの事は嫌いだ。何かと俺に付きまとは、俺に色々な体験を与えてくれる。その度に心が揺れ、タイムリミット 惑い苦悩する。

その時得た感情も抱えている惑いも、月タイムリミット末が来れば全て無くなるのに。なぜ俺はこんなに考えるのだろう。

なぜ……断れないのだろうか。

もし、もしも俺の記憶が正常なものならば。弦巻さんをどう思っているだろうか。

弦巻さんの誘いに喜んでついて行き、良き友として笑い合っているのか。

否、彼女は俺を何とか笑顔にさせようと試行錯誤しているのでは。普通に笑う俺には、興味がなにかもしれない。

だが、結局のところ想像の域を出ない。というか想像すらままならない。自分の事がほとんど分かっていないのだから、そのifなんて考えられるわけがない。

「分かった分かった。ちゃんと予定空けておくよ」

ほら、またこうやって安請け合いをする。こうして悩みのタネは増えるというのに。同じ事を繰り返す自分に対して、俺は呆れ返る事すら出来なかった。

★★★☆☆

平日だというのに、変わらず病院は人が多かった。傷病者は日を選ばないから、当然といえば当然である。それも、ここはかなり大きな総合病院。よって、色んな患者が詰め寄る。

弦巻さんと別れ、最初に入院していた病院へ来て、そして今に至る。待ち時間は二十分ほどだった。『陰山』の名がアナウンスされたので、俺は急いで缶コーヒーを飲み干して立ち上がる。口の中に、コーヒーの苦味が嫌な感じで残った。

「失礼します」

部屋は薄暗く、少々不気味であった。

俺の声に反応して、初老の男性が顔を上げる。初日に数々の検査を

俺に受けさせた先生だ。恐らく担当医だろう。

「退院してから来るのは初めてだね。今日はどうしたかな？」

穏やかな口調で、やんわりと話しかける。

「ここ数日、よく眠れなくて。良ければ、睡眠薬みたいなのを貰えないかなど。あとは、病気の事を少し聞ければと思います」

「ほう。眠れない？」

「早く布団には入ってるんですけど、何か寝た気がしないというか……」

眠れない、眠れない……と反芻はんすうしながら、先生はカルテに何かを書き取っている。ここからでは、それが何かは確認できなかった。

先週からの寝不足は、寝付きが悪いからだと言った結果の行動であった。その原因は自分でも分かりきっている。布団に潜っている時、どうしても考え込んでしまうからだ。

眠るのに集中しようと目を閉じてても、布団を被って音を遮断したとしても。瞼まぶたの裏にあの笑顔が浮かぶ、どこかからあの元気の良い声が聞こえる。薬の力でも使わないと、おかしくなりそうなんだ。

「睡眠不足っていうのは、今までに無かった症状だねえ。分かった、後でお薬を出しておきましょう」

「ありがとうございます」

「で？ 病気の事についても知りたいんだっけ？ これも、今までには無かった質問だねえ」

うんうんと、勝手に一人合点している先生。そんなに珍しかったのか。彼の言う『今まで』とは、恐らく俺が障害を抱えるようになってからの話なんだろう。

「何があったかは知らないけど、聞かれたことには答えないとね。で、何が知りたい？」

「治療法、です」

今まで淡々とカルテを書いていた先生の手が不意に止まった。目をギョロリと丸くして、こちらをじっくり見ている。見定められているようで、少し不気味だ。

「……初めて聞かれたね」

また同じように返すと、カリカリとカルテを書き進める。

そして書き終えたかと思うと、先生は椅子ごと正面を向いた。俺は、背筋をピンと伸ばす。

「まず君の病気、健忘症には種類があつてね。一過性全健忘と全生活史健忘っていうんだけど、君は後者の方だね」

健忘症というのは、記憶障害の一種である。発症後の記憶が抜け落ちる——すなわち新しいことを覚えられない前向性健忘と、逆に発症前の記憶が抜け落ちる逆向性健忘とがある。

俺の場合周期的に記憶が抜けるため、相当に特殊な事例である。言うなれば、永続的な逆向性健忘と一ヶ月周期で前向性健忘が起こるといった感じだろうか。

次に、先生が挙げた二つについて。

まず一過性健忘。過度のストレスが原因で突然起こり、前向性健忘を引き起こすというもの。要するに、新しいことがまったく覚えられなくなる。だが、こちらは二十四時間以内に回復するため、積極的な治療はいらないとか。

そして全生活史健忘。発症する前の自分に関する記憶全てが思い出せないというもの。俗にいう記憶喪失は、これに当たる。これは心因性、稀に頭部への外傷が原因で起こるらしい。

……という説明を先生から受ける。要するに俺の病気が、想像以上に重いという事は分かった。

「で、全生活史健忘は治療が必要だね。自動的に記憶が戻ることは殆どないとされているんだよ」

「だったら……!!」

『何で今まで』と言いかけたところで、俺は言葉をつぐんだ。

言われる前に気づいてしまったから。

「君はそれに乗る気じゃなかった。話は数カ月前から通していたけど、当の本人がどうしても承諾しなくてね。話が平行していたんだよ」

きつと自棄やけになった。

何も覚えていない今の状態から記憶を戻したところで、どうなるの

かと。

きつと不安だった。

記憶を失う前の自分の環境が、必ずしも良いとは限らないだろうと。

今日ここに来るにあたって、何度も考えた事だ。きつと先月の俺も先々月の俺も、同じ事を考えていただろう。

それならば、一つだけ腑に落ちない事が。

「何で今になって……」

先生も言っていた。こんな事を聞かれたのは初めてだと。

なぜ、今の俺は治療について聞こうと思ったのだろう。

「私には君の考えは分からないけどね。察するに、何らかの外的要素が加わったのかなあ」

「外的……要素？」

「周りの人の影響って事だよ。昔の記憶がない君の考えが変わるとすれば、その原因は他の人にあるんじゃないかなあと思うんだよねえ。心当たりはあるかい？」

「周りの人……!!」

胸がドクン、と音を打つ。

まさかまさかまさか。いや、そんな。影響を受けた人物で考えられる人なんて、ただ一人しか思い浮かばない。

絶対に違うと頭で否定しようとはするが、それでもやはりと思いとどまる。病院の、それも自分の担当医の言葉だ。今までは俺の主観で考えていたが、第三者の客観的な意見を前にするとその考えはぼやけてしまう。信憑性が増す。

俺は弦巻さんが嫌いなんだ。あんな輝かしい人とは、住む世界が違うんだ。

彼女に出会って『病気を治したい』と思い始めた？そんな馬鹿な。俺は弦巻さんが嫌いなんだ。何の悩みもない、不自由な生活をしている人とは住む世界が違うんだ。

彼女に影響を受けてる？ そんな馬鹿な!!

「特にない、と思います。分からないです」

「そうかい？ まあ何はともあれ、治療を受けてくれるなら私も医者として嬉しいからねえ。今度、親御さん連れておいで。詳しく話すら」

「……はい」

平静を装い、必死に対応する。いない。そんな人物は知らない。

先生という第三者に指摘されて戸惑う気持ちと、頑かたくなに弦巻さんを認めない気持ちがぶつかり合う。

頑なに弦巻さんを認めないのは、自分が飲み込まれそうだから。根っからのプラス思考な彼女に、流されそうだから。どれだけプラスになっても、月末になれば無ゼロに戻される。それが辛いのは分かりきっているから。

だから彼女が嫌いなんだ。俺をどんどん、どんどん引き込むから。引き込まれ過ぎて、来月彼女といたいことを思うと寒気がするほどに。気を使われるのを嫌って、未だに病気の事を話せないほどに。

なんて矛盾しているんだろうと考える。一人の自分は弦巻さんを避け、だがもう一人の自分は弦巻さんに巻き込まれるのをどこかで期待している。今度は何を見せてくれるのかと、密かに。

俺の気持ちは、今後どちらに動くのだろう。

それは自分でも分からない。

「あの、最後に一つ」

「はいはい」

「その治療、完治するまでにどれくらいかかるんですか？」

もし、願うならば。俺が一番の理想を、先生にぶつける。

だが現実はその上手くはいかなかった。

「君の症例は特殊だから何ともなあ。少なくとも、今月中って訳にはいかないだろうねえ。残念だけど」

今月中に治療は終わらないということとは、今月の記憶も消えてしまふということ。やはり、彼女との出会いは全て無かった事になるということ。

分かっていなかったことだ。分かっていなかったことじゃないか。

「……失礼します」

特に追及する気も起きず、俺は部屋を後にした。

気がつけば、涙が頬を伝っていた。

やっぱり消える。君の記憶は全て消える。分かっていたことなのに、どうして悲しいのだろうか。どうして泣くのだろうか。

分かっていたじゃないか。こうなるのが辛くなることくらい。だから、努めて人とは関わりを持たないと決めたのに。

まだ半月もある。まだたくさん顔を合わせる事になる。その度に、弦卷さんは俺に新たな景色を見せるんだろう。それと同時に、俺に残酷な現実を突きつける。今、経験したことは幻だ。どうせすぐに消えるのだと。

決して抗えない、覆せない現実が俺の肩に重くのし掛かる。何を手にしても、最終的には何も残らない。そんな生き地獄に、俺は向き合う他なかった。

やっぱり弦卷さんは嫌いだ。大嫌いだ。

十一月十一日（火） 天気：曇り

病院へ行き、自分の病気について聞いた。治療する事を親に話したら、驚いてはいたが喜んでくれた。

俺としては、結局意味のない診療になってしまった。今月中に間に合わないのならば、何の意味もないんだ。

明日、弦卷さんにどんな顔をすればいいんだろう。もう、自分の気持ちに分からない。俺は疲れた。

十二日目

次の日の目覚めは、そりやあもう良かった。やはり、貰った睡眠薬が効いたんだろう。夕食後にガバツと飲むだけで、その日はぐっすりだった。嫌なことを全部忘れ、睡眠に集中出来るのがこんなに良かったとは。おかげで、今日は三十分ほど早く起きられたぐらいだ。

「よっす、隼人。どした？ いやに早いじゃねえか」

「ま、たまにはね。おはよ」

校門を抜けた時。制服ではなく、運動着に身を纏ったAと出くわした。やたらグラウンドに生徒がいると思いきや、朝練をやっていたのか。Aはサッカー部所属だったような。

いつもは朝礼時刻ギリギリで来る俺にしては、確かに珍しいかもしれない。それどころか、見渡す限り数えるほどこしか制服を着た生徒はいない。Aの疑問も分かる。

だが、そんな怪訝そうに見なくても良いじゃないか。ほんの気紛れというヤツだ。早起きは三文の得とも言うし、実際今は気分が良いのだから。

「なんだ、いつも一緒に登校してる子ってのはいねえのか」

ピクリ、と俺はその言葉に反応する。

いるはずがない。いつもより三十分も早く家を出たのだから。今ごろ俺の家に来て、俺がいないことに驚いているだろう。

「いないけど、なんで？」

「いやなに、結構可愛いって聞いたからさ。ちよつと見てみたいかなんて……」

「ふーん」

別にどうでもいいや、という風でAの言葉を受け流す。そんなの、商店街歩いてたら嫌でも目につくと思うよ。目立つもん、弦巻さん。

「あれ、機嫌悪い？ 別に取りうとか考えてねえって。怒んなよお」

「取る取らないとか、そもそも俺は関係ないし。しつこく付きまとわれてるだけだよ」

「そうかねえ……っておい隼人!!」

これ以上は話題が平行線になりそうだったので、俺はさっさと教室に向かうことにした。後ろからAの呼び止める声がするが無視無視。後で、教室で謝っておこう。

弦巻さんの事は、この学校でも知っている人が何人かいた。俺と毎日登下校していたからというのものもあるが、大半が別の理由だ。言うまでもなく、良くも悪くも彼女は目立つからである。

ある女子生徒からは『商店街でよく見かける、元気な女の子』と。クラス男子生徒からは『超可愛いお嬢様』と。音楽が趣味の子からは『ハロハピのボーカル担当』と。他校の生徒の癖に、どうしてこうも目撃証言が多いのか。……目立つもんなあ。

とにかく、今は彼女の事を考えないようにわざわざ時間をズラしたのに、これでは本末転倒だ。せつかく早起きして爽快だった気分は、早々に落ち込んでしまった。

「ハア……ご飯でも食べよ」

教室に着いた俺は、袋からパンを取り出す。山吹ベーカリーで買ったものだ。急ぎの集まりがあるからと嘘をつき、家で食べずに外へ飛び出したからである。

今日はウインナーロールを買った。これはまあ、近い惣菜パンを適当に選んだだけである。本命は、いつものコロツケパンだ。

山吹ベーカリーには何度か通ったが、このパン以上に気に入ったものは見つからなかった。俺の好物と言っても差し支えない。そういうえば、これは弦巻さんが見つけてくれたっけ。すごい偶然だよな。

微かな幸福感に包まれるのを感じながら、俺はコロツケパンを頬張る。ふと気付いたのは、やっぱり弦巻さんが関係しているなあってこと。それもそうだ。今月の頭から一緒にいる時間が最も長いのは、家族を除けば弦巻さんが圧倒的。

彼女と話した事、体験した事、共有した事は全て脳裏に焼き付いている。『今は』鮮明に思い出せる。

「……美味しいなあ」

このコロツケパンだってそう。彼女が俺に薦め、彼女と一緒に美味しさを共有した。だからこれを食べると、その時の出来事が嫌でも思

い起こされてしまう。

これを選んだのは失敗だったかな、と俺はまたコロツケパンを齧る。弦巻さんの事を一日でも早く気にならないようにしたい、忘れてしまいたい。だが、それは難しいことなのだ、身を以て思い知った。早起きの清々しさは、もうとつくに消え失せていた。

★★★☆☆☆

秋の日は釣瓶^{つるべ}落としとはよく言ったもので、下校時刻を迎える頃には日が沈みかけていた。日がすぐ落ちる上に、容赦なく秋風は殴り付けてくる。

ハア、と息を吐いて悴^{かじか}んだ手を擦り合わせる。手袋がないし、薄着だから帰りは地獄だ。朝急いで家を出るにしても、天気予報ぐらいは見ておくんだったかな。凍えそうになりながら、俺は今朝の早計な自分を呪った。

そんな思いをしながらも、俺はわざわざ商店街を通って遠回りして帰る。それには行きと同じく弦巻さんを避ける他に、ちゃんとした理由があった。

「相変わらず、人が多いな」

福引きの時もそうだったが、ここは本当によく賑わっている。まだ十一月の中旬だというのに、イルミネーションなんか出しちゃって。ずいぶん気が早いこと。

人だかりが出来ている中央には、一昨日と同じようにテントが立っている。聞こえるのは、奥様方の残念そうな悲鳴ばかり。一等のハワイ旅行は、依然として客を引き寄せていた。

ここに来た用事とは、福引きを引くことだった。最も、券が余ったからと親に頼まれたからだ。学校帰りのついでによるしくなんて、

随分勝手なことを言うものである。

「お願いしまあす」

「はいはい……って、お？ 陰山君じゃないか」

「あ、ども」

「一回分？」

「はい」

福引券を受け取ったのは、一昨日お世話になった俺たちの雇い主であるおじさんだった。こうして自分で対応しているってことは、さては俺達の後のバイトが集まらなかつたな。少し気の毒だ。

とはいえ手伝う事も出来ないの、大人しく客として福引きを回す。ガラガラ〜つと中の玉が音を立てながら、一周二周。三周目に入ろうかというところで、コトリと玉が出てきた。色は緑。あれ、ポケットティッシュの白じゃない。

「お、おめでと〜!! 緑ってことは四等かな」

あら、何か当たっちゃったんだ。ハワイではないけど、ポケットティッシュよりか遥かにマシなのは間違いない。ま、何だっついていいけど。

おじさんが俺に手渡したのは、薄っぺらい封筒。封筒。中を見ると、無料券が二枚入っていた。……どっかの入場券かな？ なんだこれは。

「四等は水族館のペア券だよ。誰か友達と行くといい」

「はあ。心当たり無いですけど」

ペアの無料券、か。そういえば、そこそこ大きな水族館が周辺にあつたっけ。

とはいえこんなもの渡されても、生憎相手はいない。たかだか半月程度の付き合いの奴と二人で出かけるなど、俺には考えられない。いたとしても、今の俺には行く気もなかった。

「こころちゃん誘ったらどうだい？」

ああ。そういえばたった一人だけ、一緒に行ってくれそうな人がいたな。きつと俺から声をかければ、弦巻さんは喜んでいくんだろう。

でも、彼女はダメだ。彼女だけはダメなんだ。

「そういうんじゃないんで。失礼します」

おじさんに短く断りを入れると、俺は足早にテントから去っていった。これ以上、あの人の話題が出るのが怖かったから。

どうしてだ。今日は一度も顔を合わせていない、話してもいないのに、結局弦巻さんの話題が出てしまう。何のために行き帰りの時間をズラしたと思ってる。

治療をしても、いつ治るかは未確定。少なくとも、今月中は無理。昨日医者にそう言われて、俺は残り半月の身の振り方を考えた。

そして出た結論が、今までの出来事をなるべく忘れるように過ごす事。何も考えないまま、変な悔いが残らないまま三十日を迎えたいというのが本音だった。

その結果、まずはあの超ポジティブお嬢様から離れるのが第一だと考えた。何も事情を話さずに申し訳ないとは思うが、登下校の時間をズラしてしばらくは一人で過ごそうと思っていた。

だが、結果はこれである。学校でも一人でいても、あの人の話題になる。

「クソっ」

思い通りにいかない現実には、確かな苛立ちを覚えていた。せつかくの無料券を封筒ごと手でグシャグシャに丸めて、ポイツと投げ捨てる。いらぬいし、こんなの。

「あら、落としたわよ?」

背後からの声に、思わず振り返る。

その声の主は今最も会いたくない人物。

俺は、つくづく自分の運のなさを呪った。

「……弦巻さん」

「んー。あらっ、水族館の無料券じゃない!!」

「欲しけりゃあげるよ」

また勝手に中身見るんだから。遠慮がないというか、デリカシーがないというか。

シワが出来てしまった無料券を手に、弦巻さんは嬉しそうに声をあげる。この人に見られたのは失敗だったな。

「ちようど二枚あるじゃない。隼人、今度一緒に行きましょっ!!」

「俺は行かない。奥沢さんや松原さんで行ったら?」

「それも楽しそうね!! でも、それはハロハピの皆で行けばいいもの。だから、ね?」

「行かないってば」

こうなるのは、目に見えていたからだ。一度食い付いたら、こちらが折れるまで決して離さない。まるですっぽんのような人だ。

いつもなら俺も早々に折れるが、今日ばかりは少々事情が違う。少し語気を強めて断る。

「そう……。なら仕方ないわね。これ、返しておくわ」

「えっ? いや、別にいらないよ?」

「そうなの? 他に行きたい人がいるから、断ったんだと思ってたわ」
「違うってば」

君と行きたくないから、とはさすがに言えなかった。この期に及んで気遣い? 何でだろうね。

第一、無料券なら欲しいならあげると言っただじゃないか。とりわけ、水族館に行きたいってわけじゃないのかな。俺もいらんだけど。

「それより隼人、今日はどうしたの? 行きだけじゃなくて、帰りもないなんて」

「別に……。何でもないよ」

「にしては、いつもより顔が暗いわ。悩みがあるなら聞かよ?」

一人で抱えるより、話した方がずっと楽になるもの」

顔、暗いのかな。自分じゃわからないや。弦卷さんはあれで結構敏感だし、きつと今の俺は酷い顔をしているんだろう。

でも、仮にそうだとしても。弦卷さんには関係ない。

「何でもないってば。じゃあね」

「あつ……。またね、隼人!!」

「……。またね」

珍しく諦めが良かったのか、追いかけてくるような事はなかった。振り返り、彼女に小さく手を振る。弦卷さんは少しだけ、ほんの少し

だけ悲しそうな顔をしていた。

何か言いたげだった彼女に、少しだけ後ろ髪が引かれそうになる。だが、ここで立ち止まったら意味がない。早く……早くここを離れてしまおう。

俺の悩みや言動の根源は、全て病気が原因だ。いくら弦巻さんでも、こればかりはどうしようも出来ない事実。だから事情を話しても無駄だし、余計な心配をかけたくない。俺と彼女は、やっぱり相容れないんだ。

彼女と一緒にいることで、俺は色んな体験をする。きっとそのどれもが新鮮で、心地よく感じることであってあるだろう。でもそんな体験をすればするほど、比例的に全てを忘れる事が怖くなる。

きっと弦巻さんも、俺と一緒に楽しいんだろう。どこに興味を持つたかは知らないが、俺を笑顔にさせようとあれこれ工面している。だが、来月の俺を見て彼女は思うだろうか。俺が全てを忘れているという事実を知ると、こういった反応をするのだろうか。

もしかしたら傷つけるかもしれない。ショックを受けるかもしれない。案外ケロツとしているかも……？ 考えられることは色々ある。でも確実に言えるのは、この一ヶ月の事は全部無かったことになるという事だ。マイナスはあっても、プラスはまずない。

だったら、もう今のうちから疎遠になっておけばいいじゃないか。これが俺の出した結論。きっと、それがお互いのためになるはずだから。

「…………ごめんね、弦巻さん」

決して届くことのない謝罪は、人混みの喧騒に消えていく。

これだけ風が冷たくて寒いつてのに、道行く人達は皆楽しそうに談笑している。どんな話をしているんだろう。今日の出来事か、明日の予定か、はたまた週末の楽しみについてか。

笑顔、笑顔、笑顔。周りにはたくさん笑顔が咲いている。仏頂面一人で歩いている俺は、どんなに浮いているだろう。明らかに、この商店街の中では異端だった。

手をポケットにズボツと入れ、体を丸めて早足で商店街を抜ける。

ここに来たとき僅かに見えていた茜色の夕陽は、もう見る影も無くなっていた。

やっぱり今日は寒いなあ。早く帰らなきゃ。

横顔を、秋風が強く撫ぜる。俺はまた一つ身震いをして、歩くスピードをさらに上げた。

十一月十二日（水） 天気：晴れ

目覚め『だけ』は良かった日だった。あとは最悪。全てを忘れてスッキリしたい気分だ。いつそのこと、一ヶ月とは言わず一日周期で記憶飛ばしてくれればいいのにね、なんて。

それとは別に、治療の件は本格的に話が進んできた。さっき、親とも話し合った。今週は無理だけど、来週には親も一緒に病院に行ってくれるらしい。そこで担当医との相談になりそうだ。もちろん嬉しいけど、やっぱり怖い気持ちの方が強いかも。

十三日目

次の日。十一月に入ってから初めての雨で、今日は昼頃からずっと降り通しだった。雨の日は気温が上がるため、今の季節ならありがたいといえはありがたい。が、やっぱり晴れてくれた方がいい事には違いなかった。昨日の反省を生かして準備した防寒具達も、これでは用無しだ。

下校時刻になると、通学路はいつも以上に混雑を見せる。道歩く人はみんな傘を差してるから道幅は狭いし、交通量も多いはず。この中を通過して帰るのは、少々骨が折れそう。

今日は雨だけど、彼女はどうしているかな。一昨日は彼女の家を誘われたけど、覚えているかな。そんな事を密かに考えながら、校門へ向かう。

校門にはやはりというか何というか、彼女が既にいた。

「……弦巻さん」

「隼人、お疲れ様っ」

弦巻さんが手を振るので、空いている方の手で小さく返す。いつも通りといえはいつも通りだが、普段と違うところが一つ。彼女は、びしょびしょだった。

「どうしたの？ 傘は？」

「朝は降ってなかったじゃない？ 忘れたわ!!」

彼女は、校門近くの軒下で雨宿りをしていた。せつかく綺麗に揃えていた金色の髪も、雨のせいでしんなりしてしまっている。本人は気にしていないようだけど。

あっけらかんに答えているが、寒くないのだろうか。第一、天気予報は午後から八十パーセントって報じてただけだね。見なかったんだらうなあ……。

「わざわざ雨の中来なくても……」

「でも、隼人はアタシの家を知らないじゃない？」

「それは……そうだね」

やっぱり覚えていたよね。自分から言い出したことだし、彼女が忘

れるわけがない。

それなら、電話でもしてくれれば待ったのに。後日にずらしても良かったのに。そんな考えが一瞬脳裏を過るが、口に出すのは留めておいた。なんだか、野暮な気がしたからだ。

「つくシユン」

「まったく……。ほら、入りなよ」

「いいの？ 狭くて迷惑にならないかしら？」

「この傘大きいし。それに、早くしないと風邪引いちゃうでしょ。くしやみまでしちゃってさ」

ホントはそこらのコンビニにあるビニール傘だ。俺が嘘をついているなんて、傘のサイズ見たらすぐに分かる。

こんな見栄、張る必要ないのに。

「そう。なら、お邪魔させてもらおうわ!!」

「ちよっ、引っ付きすぎだつて……。濡れる濡れる」

「ふっふーん♪」

誰もそこまで引っ付いていいなんて言っていない。この傘のサイズ上、そうしないと濡れるから仕方ないんだけどさ。

それでもやはり、彼女との距離は近い。肩がぶつかり合ったり、手が触れ合ったりするぐらいの近さだ。その度に大袈裟にビクリと跳ねては、ほんの気持ち程度彼女と離れる。

視線を落とすと、彼女と目があつた。弦卷さんは、大して気にしてなさそう。ニパツと笑顔を見せるが、俺は慌てて目を逸らす。なんか、気恥ずかしかつた。

本当に楽しみにしてたんだろうなあ。彼女の顔を見る度に、罪悪感で胸が締め付けられそうになる。俺は、ただ遊ぶために弦卷さんの家に行くわけではないのだから。

「(´▽´)よっ!!」

歩くこと二十分。連れてこられた場所は、家というか屋敷と呼ぶに相応しい建物だった。

これが弦卷さんの家？ ある程度の大きさは予想していたけど、それよりもだいぶ斜め上を越していた。斜め上というか、もう曲線みたいに遥か上にいつてしまっているレベル。

「……冗談でしょ?」

「ホントよ?… ここがアタシの家」

「でっか……」

俺が圧倒されている間にも、弦卷さんは門を開けずんと進んでいく。自分の家だから慣れてるのは当然だけど、俺に驚く時間が欲しい。何この豪邸。

明らかに庭師によって整えられている庭に、その中央で存在感を放っている噴水、奥の方に見えているのはテニスコート。ここ日本だよね? ハリウッド俳優の家に来たとかじゃないよね?

「さあ、入って入って」

「お、お邪魔します……」

家の中も外観に見劣りしない、それ以上の作りになっていた。スツゴク綺麗だし、お手伝いさんとかいるし、暖炉やらシャンデリアやらあるし。

弦卷さんの自室に通されて、一人取り残される。彼女はとりあえず、濡れた服を着替えに出っていった。

あまり物色するのは良くないと思うが、どうしても気になった。彼女の部屋には、色々な物が置いてある。

お馴染みミッシェルのグッズ。天体望遠鏡。探偵が使うルーペや帽子。ペンギンのぬいぐるみ e t c ……。ミッシェルに似たウサギ(?) のフェルトも置いてある。眠そうで、覇気無さそうだなあこの子。

とまあこのように色んな物が綺麗に整頓されている。でも取り分

け多いのは写真だった。ハロハピの子達と撮った写真や、同じ高校の友達と撮っている写真。春から秋にかけて、これも綺麗に分けられていた。

これらは全て、彼女が楽しいと感じた出来事を全て具現化したものなのだろう。部屋にいる度にこうして思い出に浸り、昔を回想出来るわけだ。

……楽しそうだな。

「お待たせ〜!! お菓子も持ってきたわよっ」

「わわっ!」

不意に扉が開き、着替え終えた弦巻さんが入ってきた。手にしたお盆には、高そうな和菓子が乗っている。こないだケーキを持ってきてもらった時、反応が薄かったからかな。

「あら、これを見てたの?」

「ごめんね。勝手に見たらマズかった?」

「そんな事ないわ。隼人が興味を持ってくれて、嬉しいもの!! そうだわ、どんな事が起こったか隼人にも話してあげる!!」

「え、あの……」

嫌な予感がする。そんなに長居する気はないんだけど。

「この写真は夏に宝探しに行った時ね!! あの時は——」

「……ダメだこりゃ」

やり出したら止まらない。それが弦巻ところという少女だ。俺の様子なんてお構い無しに、ベラベラと話し始める。南の島に別荘があったとか、もう驚かないからね。

弦巻さんが持ってきたお菓子をつまみながら、話に耳を傾ける。お饅頭……かな。結構美味しいな、これ。好きかも。

彼女の話は、不思議と聞いてて飽きなかった。内容そのものが予測不能過ぎて、興味深いというのもある。だが、一番は彼女が嬉しそうに話すからだ。

顔を見れば分かる。その時どれだけ楽しくて、どれだけ夢中になれたかが。だからこそ、わざわざ写真を部屋に飾っているんだろう。

彼女には、たくさんの思い出が記憶の引き出しに入っている。その引き出しはまるでビックリ箱みたいに奇想天外で、中身は何物にも変えがたい宝物で。彼女はそれをとても大切にしている。

対して、俺の引き出しはすっからかん。中身を詰めても詰めても、時間が来れば全て無くなってしまう。分かっていることだ。

……でも羨ましい。楽しそうに話す君が羨ましい。

「他にも楽しいことあったのよ!! 春には……って隼人? 聞いてる?」

「え、うん。聞いてるよ」

「そう? ちょっと上の空だったわ」

隠せないか。やっぱり変なところで鋭いな、この子は。

「楽しそうに話すねって、思っただけ」

「ええ、もちろん!! 楽しかったんだもの!!」

「……そっか」

お茶を一口啜すって、口の中をリセット。餡の甘味はすっかり薄れ、代わりにお茶の苦味がやってくる。

「隼人の事も思い出に残したいわっ。やっぱり、今度二人で出掛けましょーよ!!」

こういった話題になることは、何となく予想できていた。答えは、もちろんノーだった。

行かない。行けない。俺の思い出には、何も残らない。それは、虚しくなるだけだから。

「昨日も言ったでしょ。行かないって」

「それは言ったけど……。どうして? やっぱり何か悩みがあるのね?」

彼女が簡単に食い下らない事は、充分に分かっている。俺の意思とは裏腹に、彼女の事がある程度は理解しているつもりだ。『あつ、そう』で済みますのではなく、悩みがあると分かれば共有しようとする。共に解決しようとする。それは彼女のフレンドリーな性格、加えて優しきから来る考えだ。

だが……。いかな笑顔の天才でも、出来ることと出来ないことがあ

る。いくら彼女個人が奮闘しても、いくらお金があつたとしても、病気を治すのは無理だろう？

ここに来たのは、遊びに来たのではない。

彼女に、もう構わないでくれと……

別れを直接言いに来たのだ。

「あるって言ったら？」

「話してほしいわ」

「それは出来ない。君には話せない」

「アタシには、話せない？ どうして？」

「君の力ではどうしようもないから。話しても無駄なんだよ」

なるべく表情を変えずに淡々と話し続ける。心の中では、弦巻さんに頭を下げながら。

話しても無駄なんじゃない。余計な心配をかけさせたくないんだ。どうせ一ヶ月の縁。来月君が俺に話しかけてきても、俺は君の事を全く覚えてないのだから。そんな奴と一緒にいる必要はないだろう？

「そんなの分からないじゃない？ 無駄なんて決めるのは早いと思うわ」

君にはたくさんの素敵な友達がいるだろう。俺一人なんかは構う必要ないじゃないか。

俺の事はもう忘れてくれ。その方が、こっちも楽だから。

「訂正する。話したくないから言わない」

「どんな悩みも、話したらスッキリするわよ？ ほら、アタシでも力になれるかもしれないじゃない」

「無駄だって言ってるでしょ。無責任な事言わないでよ」

段々と、口調が荒くなっていくのが分かる。それと同時に、胸のなかで嫌な感情がどんどんどんどん渦巻いていく。悲しさが怒りか、それとも両方か。どちらにせよ、気持ちの良いものではない。

大人しく引き下がれ。『だから、これ以上構わないで』と一言添えるだけで終わるんだから。

「無責任じゃないわ。ちゃんと、あなたの悩みに向き合うつもりよ」

黙ってくれ。話しても、何の解決にもならないんだ。

「そんな事頼んでない。いらない、もう放っておいて」

「そんな訳にはいかないわ。隼人……」

「放っておいてって言うてるでしょ!! しつこいんだよ!!」

自分でも驚くくらいの声で叫んだ。

とうとう耐えきれなかった。

でもまだ、溢れた感情は収まりそうにない。

「何も悩みがない、全てに恵まれている君には分かんないよ!! 皆が皆、君が考えているように動く訳じゃない!! たかだか会って半月の癖に、何でもかんでも干渉して来ないで!!!」

ハアハアと息を切らし、我に返る。やってしまったと、後には引けない後悔の念が一つ。同時に、これが怒りって感情なんだなど無駄に冷静な自分がある。

弦卷さんは、呆然としていた。酷く驚いたその瞳は、ただ一点俺の目を捉え続けている。初めて弦卷さんが、俺に対して意見をしなくなった。

……ここまで、キツク言うつもりはなかったんだ。ただやんわりと、『そういう事情があるから』って断りを入れるだけだったのに。これでは、何のために病気の事をひた隠しにしたか分からないじゃないか。

でも、一度口にした言葉は巻き戻せない。悔やんだところで、全ての後の祭りだ。俺が弦卷さんを傷つけたことは、もう覆しようのない事実となった。

「……ごめん、俺もう帰るね」

弦卷さんは、何も言わなかった。引き止めも、怒りも、悲しみも。睨まれているわけでもないのに、彼女の視線が鋭く突き刺さる。

俺は、逃げるように部屋を飛び出す。彼女を、もう見ていられなかった。

俺は最低だ。弦卷さんは結局何も知らされなのまま、意味が分からないまま拒絶された事になる。こんな理不尽な事はない。ものの数

分前まで、普通に会話していたというのに。

謝罪の言葉一つも残さず、俺は彼女から逃げた。場の空気に耐えかねて、自分の過ちを受け入れられなくて。今日限りで綺麗さっぱり別れるつもりだったのに、悔いばかりが残ってしまう。もっと他に方法はなかったのか。ちゃんと彼女に、伝える事が出来たんじゃないかって。

外に出ると、雨は一層激しさを増していた。厚く積み重なった雲には、さすがの太陽も陰ってしまう。重厚な雲はどこまでも、どこまでも続いている。

沈んだ気持ちを煽るかのように、雨は降り続ける。もうしばらくは晴れないとでも、空が言いたげに。一人分の傘は、何故かいつもより大きく感じた。

十一月十三日（木） 天気：雨

人に対して、初めて怒った。

なんであるなにイライラしていたのか、時間が経った今ではもう分からない。弦卷さんに謝ろうと思ったけど、もうどの面下げて会っていないのかも分からない。電話を掛ける勇氣もなかった。

悪いのは全部俺なのに。

十四日目（I）

『アタシ達と一緒に、あなたも笑顔になりましょっ』

『隼人が笑顔になる条件、アタシも一緒に探してあげる!!』

『隼人の事も、思い出に残したいわっ』

『やっぱり、隼人の笑顔が見たいっ』

思い出されるのは、こんな言葉の数々だった。どれもこれも全て、弦卷さんが俺に対して言ったものだ。

弦卷さんへの理不尽な八つ当たりが残したのは、拭いきれない後悔だけだった。昨日家に帰ってから、今日起きてからも、授業中も、そして今も。考えているのは、そんな事ばかり。

昨日あんな事があつたせいとか、弦卷さんは行きも帰りも現れる事はなかった。本来はこれで良いはずなのに、酷く後味の悪い話である。

「どーも」

だが今日もまた、校門に人影が。

俺は心底嫌そうな顔をしたと思うが、その人は全く気にしていなさそう。小さくペコリとお辞儀。

「ハロハピの間では、待ち伏せが流行ってるの?」

「連絡先がないから、こうするしかなかったの。さすがに、その辺の常識は持ち合わせてるつもりだから。こころと違って」

「何の用なの? 奥沢さん」

「大体は、察しがついてるんじゃない?」

まあそうだよなどと、心の中で納得する。ただ一度バイトをしただけの関係である奥沢さんが、わざわざこうして会いに来たのだ。十中八九、昨日の事関連だろう。弦卷さんから直接聞いたか。

だが、彼女は怒り心頭というわけではなく、むしろ淡々としていて。むしろ、数日前に会った様子そのままのように感じた。昨日の文句を言ったり、何か注意しに来たのではないのか。

「弦卷さんは?」

「来てほしかったの?」

「まさか。よく一人で来れたなって」

「風邪引いて休んでるからね」

傘も差さずに、待ち伏せなんかするからだ。当然の結果である。

「ま、こんなところで立ち話もなんだし。移動しましょうか。今日、空いてるよね?」

「……空いてるけど」

空いてないと言えば良かったのに、何故か従ってしまった。奥沢さんから、言い知れぬ雰囲気を感じたからだ。上手く言えないが、断りにくいというか。今日都合が悪いと言っても、きつと空いてる日を聞かれるんだろう。それぐらいだった。

やはり気まずいので、奥沢さんの後方一メートルを離れて歩く。

空は昨日と同じく曇り空。午前中は降っていたが、今の時間帯はもう雨が止んでいた。

——まだ晴れそうにないな。あの雲が積み重なっているように、俺の肩には憂いと気だるさがズシリとのし掛かった。

★★★☆☆☆

「いらっしやいませ。空いてるお席へどうぞ」

商店街に佇む、小さなカフェ。その名も、羽沢珈琲店。奥沢さんは、そこに俺を案内した。なるほど、腰を据えて話がしたいということか。

あまり人目に付きたくないというのは、俺も奥沢さんも同じだったようだ。彼女が選んだのは最奥の席。それぞれ、向かいになって座る。

「コーヒー、嫌いじゃないですよね?」

「そだね」

好んで飲みたくはないが、勝手に注文した後言われてもね。別に休憩に来たんじゃやない、という意味表示のつもりだろうか。奥沢さんは、最小限のものしか頼まなかった。

一口、コーヒーを口に含む。……うん、につがい。生憎だが、俺には味の違いを区別するほどの舌を持ち合わせていない。このコーヒーだって、市販のものと同変わらないように感じるぐらいだ。さすがに、そんな事はないんだろうけど。

「昨日の事は、直接こころに聞きました」

「そ。仲直りして、とでも言いに来たの？」

「まさか。こころと陰山さんの関係に、あれこれ言うつもりはないよ」
「じゃあ何で呼び出したんだ。焦らすような奥沢さんの口調に、少なからず苛立ちを覚える。彼女の意図が読めない。」

「私は、私の知ってることを全部話しに来ただけ。そこからどうするかは、陰山さんに任せるよ」

「どうなっても、後で文句言わないでよね。どんな説得をされたとしても、病気が治る訳じゃないんだし。『はいはい』と、俺は小さく呟く。まるで興味無さげに。」

でも、奥澤さんはそんな俺を歯牙にも掛けない。紙袋から何かの冊子を取りだし、それを縦に重ねる。本……いや、日記帳だろうか？
いち、にい……四冊もある。カバーは、どれも不揃いだ。

「……これは？」

「読めば分かると思う」

「そこも、やつぱり焦らすのか。百聞は一見に如かずと言うし、やつぱり読むしかないよね。」

「適当に一冊取ってもらい、開く。やつぱり日記か。むこう四ヶ月分のらしいね。大方、弦巻さんのものなんですよ。そう高を括り、目を通し始めた。」

「だが、そこに書いてあるのは——」

「……え？」

「俺の想像を遥かに越えていて。」

十月一日（火） 天気：曇り

リセット初日。体調は概ね良好おおむねといった感じ。前日までの記憶がないこと以外は、これといって異常は感じなかった。そういえば、病室に変な子とクマの着ぐるみが来たっけか。医者と話してたから、摘まみ出されてたけど。なんだったんだ、あの子は。

次に九月分を開く。

九月八日（月） 天気：晴れ

また弦巻さんは俺の家にまで来た。一緒に学校に行こうと。さすがに非常識過ぎないか。何で俺は、会ったばかりのあの子にストーカー紛いの事をされてるんだろう。朝も早いし、迷惑極まりない話だ。あまりにしつこいから、もう来るなど強めに言ってしまった。間違った事をしたとは思わないが、少し言い方がキツすぎたかもしれない。ちよつと反省。

そして、八月分。

八月三十一日（日） 天気：晴れ

今日が今月最後の日。明日の俺には今月の記憶がないわけだが、これといって無くなって困るものもないと思う。特に、何も起こらなかつたし。

また記憶がリセットされて、同じことの繰り返し。今月まではずっと病院にいたが、来月からは夏休みが終わって学校が始まる。俺も行くんだろうか。

そんな事を今考えても意味がないことに気付くと、また空しい。数時間後の自分は、今とは違う自分。学校の心配なんて、その時の自分が何とかしてくれるだろう。先の事なんて、考えたくもない。

「筆跡からも分かるよね。毎日書いてるんだから」

「なんで……？ どういうこと!？」

ここまで三冊。もう何を言われずとも、全てを察することができた。だが、頭の整理が追い付かない。残る最後の一冊を手取る。

……七月分。

七月一日（火） 天気：雨

頭の整理が追い付いていないが、書けと言われたので日記を付ける事にする。

昨日の事を全く覚えていない。これに尽きる。起きたら知らない家で、知らないオバさんが俺の事を『隼人』と呼ぶ。病院に行ったら、そういう病気だと説明された。夢じゃないみたい。

これからどうすればいいんだろう。どうしようもなく怖くて、胸が潰されそうになった。

七月三十一日（木） 天気：晴れ

明日から、また記憶が飛ぶらしい。本当にそうなのかは分からない。嘘なんじゃないかと思うくらい、いつも通りだった。もし本当ならば、今月の記憶は全部消えてしまう。そう考えると、夜を迎えるのが少し怖いかもしれない。

病院でたまたま会った子にその話をする、大丈夫だと明朗な笑顔でそう言われた。自分が笑顔にさせるからと。だから、それも忘れてしまうつてのに変な子だったなあ。

病院の先生が言っていた、俺が健忘症になったきっかけというのが六月の話。そして、記憶がリセットされた最初の月が七月。もはや、疑う余地すらなかった。

この日記は……これを書いた人は……

「真正正銘、あなたが書いた日記。七月から、先月までのね」

奥沢さんが持ってきた四冊の日記。それは、俺が今まで書いてきた日記そのものだった。やっぱり、日記は今月から始めたわけではなかったんだ。今までもずっと書いていたんだ。

最も驚いたのは、その内容。どの月にも、必ず弦巻さんの事が書かれているのだ。名前を出していない月もあったが、どれも彼女と思わしき内容である事には違いなかった。

「一体これをどこで!? なんで奥沢さんが!？」

「持っていたのはこころ。私は、それを今朝借りてきただけだよ」

なぜ、弦巻さんがこれを。入院中で退屈だった時、過去の日記はないのだろうかとふと考えたことがある。あの時探しても見つからなかったのはそういう事かと、今合点がいった。

そしてさらに、この日記の存在によって生じた疑問はまだある。彼女はどこまで知っているのか。いつから、どうして知ったのか。

「こころが病院の看護師さんに頼み込んでね。陰山さんの日記を所持することの許可を貰ったの。もちろん、こころとの関わりがあつた事を隠すために」

「看護師さんに……!? ってことはもしかして……」

「今まで黙っててごめん。こころは陰山さんの病気の事を知ってる。

私もその時は付き添ったから、もちろん私も」

そしてその疑問の答えは、ある意味俺の予想通りだった。俺とは初対面だと思っていた弦巻さんは、彼女からすれば数ヶ月の付き合いいで。そして、病気の事まで知っていて。

今思えば、不自然な点があつた。会つたばかりだというのに、彼女が俺の家に迷わず来たこと。同様に、学校を知っていたこと。そして……名乗ってないのに名前と呼ばれたこと。彼女の異様なほどの干渉も、長い付き合い故だと考えると説明がつく。

「……ハハ。何も知らなかったのは俺の方が」

じゃあ、何か? 弦巻さんは毎月毎月、俺と初対面の『フリ』をして接してきたというのか。毎月最初に記憶が無くなってしまう俺に、わざわざ話を合わせてまで。

昨日、弦巻さんに対して何と言ったか、今でも明確に覚えている。何も知らない君には俺の気持ちなんて分からない、と。たかだか会って半月のくせに色々と干渉するな、と。

だが事情を知ってしまった今、もうそれは中身の無い怒りへと変わってしまった。九月八日の日記でも、俺は彼女に対して怒りを見せていることが分かる。九月だけじゃない。八月も、十月もだ。最初の七月以外、俺はどこかしらでこんな風に弦巻さんとトラブルになつて

いた。

月始めに俺と出会い、急接近し、どこかで俺に拒絶され、最終的には避けられて。三ヶ月半もの間、彼女はこんな事を繰り返していたというのか。無限ループみたいに、延々と。

「なんで、そこまでして……」

自分を犠牲に、そんな面倒な事をしてまで、彼女はなぜ俺に構うのか。

普通なら、とつくに距離を置かれていてもおかしくない。どうせ忘れてしまうんだし、俺からすれば先月の交遊関係なんて気にも留めないだろうに。

「私はこころじゃないから、それは分からない。元々、何を考えているのか分かりにくいからね。でも、そのきっかけになった出来事なら知ってる」

日記を見る限り、俺と弦巻さんが初めて言葉を交わしたのが七月三十一日だ。だが、肝心の内容が書かれていない。きつと当時の俺からすれば、日記に書くほどの会話でもなかったんだろう。それ以上に、月末ということで余裕が無かったというのもあるが。

だが、その出来事を知れば何か分かるかもしれない。たかが半月とはいえ、彼女と接してきた本人である。

「ねえ、奥沢さん。言ったよね？ 知ってることを全部話しに来たって」

「言った……うん。言ったけど」

「じゃあ、聴いてもいいかな。弦巻さんの、そのきつかけってヤツ」
気がつけば、そう彼女に言っていた。

どんな思惑があるかなんてなくて、単に弦巻さんともう一度向き合う時間が欲しかったんだと思う。

奥沢さんは少し驚いたように眉を動かしたが、すぐにポツリポツリと話し始めた。

十四日目（Ⅱ）

きっかけ、きっかけかあ。初めて会ったのは、七月の三十一日だったよ。知ってると思うけど、私たちは病院の慰問ライブをしててさ。それを初めてやったのが、その次の日……つまり八月一日だったんだよ。その日は、確かライブの事前確認とかで病院に行ったんだっけ。

「美咲、次はこっちよっ!!」

「ちよっ、こころ。だから、そっちは違うって……!!」

病院の人との待ち合わせ場所に着くまでに、こころはあちこちの病室に入って回ってた。まああんな性格だからさ、じつとしろって方が無理だったかもしれない。ライブの宣伝をするだけならまだしも、平然と患者さんに話しかけたりで、そりやもう大変だったんだよ。

……ってそんな事はどうでもいいよね。陰山さんと出会ったのは、そんなこころの気まぐれな病室巡りの一つ。何でもない、ただの偶然だったんだよ。

「あら？ こころは一人なのね？」

「……誰？」

陰山さんはその時ベッドの上で本を読んで、突然の乱入にちよつと驚いてた。まあ、当然の反応だと思うけどね。

「アタシ？ アタシは弦巻こころ!! あなたは？」

「陰山、隼人」

「そう、隼人っていうの。いい名前ねっ」

「あ、ありがと……」

案の定というか何というか、陰山さんは少し引き気味だったよ。それに対して、こころはいつも通りグイグイと距離を詰めてた。

そして他の病室みたく、ライブの宣伝をしたら出ていこうとしていたんだと思うよ。うん、いつも通りに。

「ね、明日ここでライブをするの!! あなたも良かったら来てみない？ たつくさん笑顔になれるわっ」

「ライブ？」

「アタシ達ハロー、ハッピーワールドってバンドを組んでるの。世界を笑顔にするバンドよ」

「残念だけど、明日なら行けないかな」

でも、陰山さんはキツパリとその誘いを断った。今まで多くの病室を回ってきたけど、断られたのは初めてだったよ。だからこころはいい、『どうして?』と尋ねた。

「明日って一日でしょ。その時になったら、俺は全部忘れちゃってるから。ライブがあるって事も、君たちの事も」

「えっ、どういうこと?」

「そういう病気らしいから。俺、月の最初に記憶が飛んじやうんだって」

記憶が無くなつちやうなんて聞いたときは、さすがにビックリしたよ。それも、一ヶ月の周期で。私だけじゃなくて、こころも驚いてた。そんな病気、聴いたことも無かったしね。

でも陰山さんは、淡々としてた。結構重たい病気なのに、まるで他人事みたいで。だから……うん、失礼だけどちよつとヤバいなって感じたんだ。私たちの出る幕じゃないのかもって。こころに耳打ちして帰ろうって言ったんだけど、それを聞いてくれなかった。

「そう。じゃあ、明日また誘いに来るわっ」

「いいよ別に。そんな気分にはならないと思うし」

「あら、どうして? 楽しいのよ?」

まあ……はい、この時から人の話は聞かない人だったよ。こころは食い下がった。

多分、軽く興味を持ったんだろうね。ほら、世界を笑顔にするって人が、目の前の人をスルーするわけじゃないじゃん。

「記憶が無くなるってき、スゴく怖いんだよ。自分が何で、どんな性格だったか、感情すらも分からないんだ。ライブに行くとか楽しいとか、そんな事考える余裕ないもん」

「そう……」

「医者は治療出来るって言うけどき。記憶が戻ってどんな自分に戻る

の分からないし、いつまでかかるかも分からない。そんなの怖いに決まってるじゃん。だから、治療にも踏み出せない。踏み出したくない。このままの方が気楽だよ」

でも、陰山さんは頑なに断った。ここも記憶喪失なんて経験はないだろうから、さすがにこれには面食らってたかな。確かに、当事者じゃないとその怖さとか分からないだろうから。

でも……それが、この中での引き金だったんだと思う。

「大丈夫よっ!!」

「……は？」

陰山さんを救いたって、スイッチが入ったのが。

「不安なんて、アタシが忘れさせてあげるわ!! 楽しいことを覚えてられないなんて、勿体ないもの。楽しい経験をいっぱいしたら、それを思い出に残したいって思うはずよ!! そしたら、治療も怖くないわ」

「話聞いてた？ 感情も分からなくなるって。笑い方も知らない俺が、そんなの無理だよ」

「無理なんて決めつけるのは良くないわ。笑い方が分からないなら、アタシが教えてあげる!!」

「この話も、明日には忘れちゃうけど」

「また来るから大丈夫よっ。毎月アタシの事を忘れるなら、毎月あなたに会いに行くわ」

話は平行線だった。ああ言えばこう言う……って言うに変だけど、とにかくこころは諦めが悪くってさ。いつもの事だと思う反面、ちよつと様子が変だったようにも見えたかな。

さすがにこれ以上は迷惑だと思ったから、慌てて病室を出てったよ。元々病院に来た目的を果たさなきゃだったからね。去り際、陰山さんは『明日君たちが来て歓迎しなくても、責任は取れない』って言ったんだけど、こころはまた『大丈夫っ!!』って。大丈夫な根拠なんてないのに、随分無責任だよな。私もそう思ってた。

「どしたのこころ。あんなに食い下がるなんて。もしかして、陰山さんって知ってる人だった？」

「いいえ、初対面よ」

「じゃあ尚更どうして」

病室を出てそう言ったのは、ある意味当然の疑問だったよ。会って数分の初対面の人に、ここまで入れ込むなんて。

こころの思い付きの行動は今に始まった事じゃないけど、今回はちよつと事情が特殊じゃん？ さすがに、私も慎重になった。

「……助けて欲しそうに見えたの」

「はあ？ どこが？」

「隼人は病気を治さなくて良いって言ったけど、それってずっと独りでいるのと同じことじゃない？ そんなの、耐えられるはずがないもの」

「それは……」

陰山さんがどう思ってるかは知らないよ？ でもこころからしたら、君が助けを求めてるように見えたんだって。でも、ちゃんと筋は通ってるよね。いつか記憶が消えちゃうってことは、誰の事も覚えられないって事だもん。少なくとも、毎月一日はスゴい孤独感を覚えてたでしょ？

「アタシはハロハピの皆の事も、花女の友達の時も忘れてしまうのは嫌。それは、皆が大好きだからよ。だから、隼人にも同じような気持ちを分かってももらえればいいんだわ。そうすれば、独りでいいなんて思わないし、病気を治そうとも考えるんじゃないかしら」

「そんなに上手く行くかな……」

「それはやってみなきゃ分からないわ。アタシが、隼人の友達第一号になるの!!」

全ては陰山さんに笑顔になってもらうため。これも、『世界を笑顔にする』っていう事なんだって、こころは晴れやかにそう言ってたよ。

そこには、何の打算も見返りもない。こころを突き動かしてるのは、純粹に陰山さんを救いたいからって気持ちなんだ。それだけは、私が責任を持って断言するよ。



俺は、奥沢さんの話を黙って聞いていた。俺の知らない弦巻さんは、やっぱり俺が今まで見てきた彼女と何一つ変わっていないかった。ホントにどこまでもお人好しだよ、あの人。

「そこからは日記を読んでくれたから、ある程度の察しはついたんじゃないかな。八月から今まで、こころはずーっと陰山さんに声を掛け続けた。でも……いずれも撃沈。酷い時は、出会って直後に陰山さんを怒らせた事もあった」

「愚痴とか不満とか……そういうの？」

「ないんじゃないの？　むしろ、毎回楽しそうに君の事を話してくるよ」

なんだか、そのビジョンが頭に浮かぶようだった。あの子はいつでも笑顔だった。俺が煙たがっていても、疎ましく思っている。常に笑顔を絶やさず、ずっと三ヶ月半寄り添ってくれていたのか。俺を独りにしないために？

「……じゃああの、本物のバカじゃん」

そんな事のためだけに、三ヶ月半も拘束されて。誰かに頼まれてもいない、自分から呼び掛けても冷たい対応をされる、挙げ句の果てには拒絶までされる。自分にメリットなんて何もないのに、疑わずお節介し続けて。

バカだよあの人は。どうしようもない、本当のバカだ。

「何なのあの人は。意味が、分からないよ……。バカじゃん、本当にどうしようもないバカじゃん……!!」

手の甲に雫が一滴、また一滴と落ちる。声は次第に震え始め、それに比例して大粒の涙がさらに溢れてきた。拭っても拭っても、次から次へと流れ出る。

泣いた。人目も気にせずに泣いた。声だけは抑え、周りに悟られな

いようにと、^{てのひら}掌で目を覆う。きつと顔はグシヤグシヤだ。

「バカなんだよ、こころつて。突拍子もないことし出すし、その癖一人で突っ走っちゃってさ。でもさ、何か不思議と全部上手くいっちゃうんだよね。こころのやる事ってみんな」

優しくあやすように、奥沢さんは続ける。

「陰山さんの痛みは分からなくても、きつとそれには向き合えてるよ。その上で、行動しているんだと思う」

全て忘れる事は確かに辛い。でも、自分『だけ』が覚えているのも、きつと同じくらい辛いはずだ。

俺が全てを忘れてしまっても、弦巻さんは全てを覚えている。楽しい記憶も、辛い記憶も。もちろん、過去俺に煙たがられたり怒られた事も、彼女は全部覚えていてる。それで傷付いたとしても、何度も俺に向き合い続けてくれてる。痛みを知っても、なお。

本当に何も理解できていなかったのは、俺の方。

「だから陰山さんの記憶が消えるまでのあと半月を、こころに預けさせて欲しいんだ。多分……こころは君を失望させる事はしないから」俺は手で涙をどかしながら、コクコクと無言で頷く。それはまた、あの騒がしい日常で半月過ぎすことを意味していた。隣にうるさい彼女がいる事を認めていた。

いっぱい毒を吐いてきた。彼女を傷つけるような事も言った。許してもらえるかは分からないけど、一度会って直接話さなきゃいけない。今の話を聞いて、本当の事を知って、俺がどう思ったかを。

そして、謝らないといけない。知らなかった事とはいえ、自分本意になっていた事を。彼女を傷つけてしまったことを。

もう一度——もう一度彼女とやり直すんだ。

十一月十四日（金） 天気：曇り

これを書き始めてから、通算で百日以上経つ。ようやく、俺は本当の事を知ることが出来た。ずっとずっと、俺は弦巻さんと一緒だった。記憶にはないけれど、確かに三ヶ月間今までずっと一緒だった。記憶を戻してもどうせ……なんて、もう言わない。知らなかっただけで、俺は独りじやなかった。ずっと、彼女から愛を受けていた。

十七日目（I）

翌週の月曜日。体調が優れなかった弦卷さんを考え、会いに行く日を今日に選んだ。いつもより早く家を出て、俺は弦卷家の巨大な門の前にいる。一度しか来なかったが、こんな大きな家をそう簡単に忘れることはなかった。迷わず辿り着けて良かったよ。

執事らしき人から門を開けてもらい、玄関へ向かう。名前を言っただけで開けてもらった辺り、この家では割りと知られているんだろう。

「すー、ふー……」

玄関前で、大きく深呼吸。とりあえず言うべきことは、『ごめんなさい』。そして次に、『ありがとう』だ。大丈夫、わかっている。

彼女と違って、面と向かって何か言うのは得意ではない。インターホンを押す指が震える。心臓が高鳴る。

無機質にインターホンが鳴り響き、そこから彼女が顔を出したのはほんのすぐだった。

「おはよっ、隼人」

「……おはよう、弦卷さん」

制服姿の彼女は、いつもと変わらない笑顔だった。まるで、こないだは何事も無かったかのよう。彼女の考えていることは、今でも分からない。でも、嬉しそうなのは間違いないかった。

「ごめんね、朝早くに。体調はもう大丈夫？」

「ええ、問題ないわ!!」

「そ。それは良かった」

「話があつて来たのよね？ 私の部屋に行きましょっ」

「うおっ……？ ちよっ、弦卷さん!?!」

俺の手を引いて、弦卷さんは部屋へと連行する。人の話を聞かず、勝手に行動するのは相変わらずだ。

ちよい、手が痛いってば……!!

「さ、ここなら話していいわよ。隼人からなんて珍しいわねっ」

「……こないだの事、気にしてないの?」

『なにがかしら?』と、弦巻さんはきよとんと首を傾げる。誤魔化しているようには見えないし、そんな事をわざわざする子ではない。きつと、本当に俺が何を言っているか分かっていないんだ。

部屋の時計をチラリと見る。登校時間まで、あまり余裕がない。ここで話を濁らせる事は出来ない。弦巻さんが良くても、俺が良くないから。きつちりと、けじめは付けなきゃ。

「木曜日に、ここであつた事。八月から数えて四回目なんだよね?

俺がこんな風に、弦巻さんに怒つた事は」

「……美咲に聞いたのね」

「まあ、ね。でも聞いてなかったら今ここにはいないし、俺自身聞いて良かったと思つてる。だから、奥沢さんを責めないでほしいな」

包み隠さず、俺はズバツと切り出す。それを聞いた弦巻さんの表情は、何とも言えないものだった。

すうつと息を吸つて、天……というか、天井を仰ぐ。脱力したように、彼女の肩から力が抜けたのが分かった。

「そうなの。知つちやつたなら、しようがないわね」

まあ仕方がないか、そんな風に聞こえた。

「……ごめん。知らなかったとはいえ、自分の癩癩かんしゃくで弦巻さんを傷付けた。先月以前の事も合わせてこの場で謝りたい。ホントに……ごめん!!」

「隼人?」

深く頭を下げる。こんな事で許されるかは分からないけど、言わねばならなかった。ずっと彼女は抱えていたのに、自分だけが特別だと思つて。そして尖つた態度で周りを見ていて、近づく人からはその『棘』で身を守つて。

理解者は、こんなにも近くにいたのに。

「顔を上げて、隼人」

「でも……!!」

「いいのよ。全っ然気にしてないわ。そんな事より、もつともーっと大事な事があるもの!!」

「そんな事って……」

そんな事扱い？ 弦巻さんらしいっちゃらしいけど、そんな有耶無耶にしているのか。何より、俺の気が収まらない。

そんな俺の気持ちをよそに、また彼女の笑顔が輝く。

「隼人が、自分から来てくれた。こっちの方がずうーっと大事だわ!!」
「あ……」

彼女に言われて、ようやく言わんとすることに気付いた。俺はいま初めて、自分から弦巻さんに歩み寄ろうとしている。いつも受け身だった、俺が。

その理由は、初めて真実を聞いたからだ。分かりきっている。だが、奥沢さんからは事実を聞かされただけ。行動しようと思ったのは俺だけの考えだった。これは、明らかに今まで過ごしてきた一ヶ月とは違う。

真実を聞いて、俺の考えが確実に変わり始めている。二度と変わらなないと決めつけていた、俺の環境が。

「ね？ 無理な事なんて、何一つないの。願えば、何でも叶うのよ!!」

「……そうかもね。ありがとう、弦巻さん」

「えへへっ」

願えば……か。弦巻さんが諦めずに何カ月も動いてくれなければ、今の俺はなかった。ずつとずつと閉じ籠ったまま、独りぼっちだったと思う。

弦巻さんのやるのが全部成功するのは、そういう事なんだろうね。もちろん、弦巻さんのカリスマや天性も大きいんだろうけど……。それ以上に大事なのは信じ続けること、迷わず前を向くこと……か。彼女にはそれを周りの人にまで及ぼす、不思議なパワーがある。

「日記は返すよ」

「隼人が持っていて良いのよ？ 元はといえば、あなたのだし」

「いいんだ。何も知らない状態でこれ読んじゃうと、どうなるかわからないし。……弦巻さんに遠慮しそうでね」

奥沢さんが持ってきた俺の日記四冊を弦巻さんに返す。この日記

は、お世辞にも良いことは書かれていない。病気に対する俺の不安や、マイナス思考が大半だ。そんなもの、記憶を失った直後の不安定な状態で読みたくない。

十一月分の記憶が消えてしまうのは、変えようのない事実。これは諦めでも何でもない、どうしようもない事だ。いかな弦巻さんでも、病気を治すことは出来ない。これはもう受け入れてる。

「それよりも、あと半月の事を考える事にするよ。奥沢さんに言われたんだ。残り半月を弦巻さんに預けてくれ……ってさ」

「預け……る？」

「俺がどう過ごすのも、弦巻さん次第って事。もちろん……嫌なら無理強いはしないけど」

大事なのは、その事実を受けてどうするか……だ。

もうどうせ記憶は消えちゃうから、なんて言わない。

「あら、そうなの。じゃあ、アタシが色々お願いしてもいいのねっ」

「……可能な限りで、死なない程度のお願いで頼むね」

俺は苦笑い。弦巻さんが言う『色々』ほど怖いものはない。何させられるか、分かったもんじやないからね。まさか、このワードに恐怖を覚える日が来るとは思わなかったよ。

「じゃあまず、アタシと友達になりましょっ。これなら良いわよね？」
「えっ？」

思わず、間の抜けた声が漏れた。どんな事を頼まれるんだろうと勝手ながら身構えていた結果、内容が案外普通の事だったからだ。

あ、ごめん弦巻さん。別に嫌な訳じゃないんだ。

「あら、ダメだったかしら？」

「そ、そんな事ないよ!! これからもよろしくね、弦巻さん」

正直、スゴく今更感はある。でも、弦巻さんがそう仕切り直したいなら俺としても異論は全くなかった。俺は、スツと右手を差し出す。

……だが、彼女はその手を握ってはくれなかった。

「あ、あれ？」

「なんか違うわ」

何がだ。そこは、よろしくって握り返すパターンでしょうよ。これ

で良いシーンになるんでしようよ。

「アタシ達は友達だもの。その『弦卷さん』っていうのは止めましょ？」

「え、なんで？」

「だって、アタシは友達みんなの事を下の名前で呼ぶもの。美咲、花音、香澄……それに隼人!!」

「それはそうだけど……」

弦卷さんの場合、友達であろうがなかろうが下の名前で呼びそうだけどね。しかも、松原さんって確か一つ上だったよね。その辺も気にしないんだろなあ……。

つまるところ、彼女の言いたいことは……

「要するに、下の名前で呼べってこと？」

「そーね!! その方が良いじゃない!!」

下の名前かあ。そう言えば、今まで誰も下の名前で読んだことなかったなあ。学校のクラスメイトも、弦卷さんを始めとする学校外の人たちも名字にさん付けだ。

記憶がないからその人との関係が分からなかったし、さすがに下の名前は馴れ馴れしいかなって。元より、他の人と仲良くしようとも考えてなかったわけで。

だが、彼女に対してはもうそんな事を気にする必要はない。弦卷さんの言うことにも一理ある。ただ、変な気恥ずかしさがあるけどね。

「えと、じゃあ……さん？」

「んー。何だか、まだよそよそしいわ」

そりゃいきなり呼び方変えろって言われたらね。誰だって普通はそういう風になると思うよ。

多分、そういう事じゃないんだらうけど。彼女の言わんとする事は分かる。……分かる。

「こ、こころ……でいいかな？」

「うんっ。それなら良いわっ!! よろしくね隼人!!」

「……よろしく」

絞り出したような声だったが、弦卷さん……じゃなくてこころはこ

満悦だったようだ。いきなり下の呼び捨てはハードル高いよねえ。あー、恥ずかしい。

……でもまあ、嬉しそうだからいつか。俺が今までしたことを考えれば、これくらいお安いご用だ。

「あ、もう時間。そろそろ、学校行く?」

さて、話のキリもついたところだし。そんな事をしていたら、もう時間が経っていた。いつも家を出ているのと同じ時間だ。今から出れば、充分間に合う。

「あら、今日は行かないわよ?」

「は?」

だが彼女から返ってきたのは、謎の答え。いや、どういうこと?

「制服着てるよね?」

「ええ」

「そこにバッグもあるよね?」

「あるわね」

「学校には?」

「行かないわ!!」

何でだよ。十人に聞いたら、十二人が学校に行くって答えるような準備が出来てるじゃんか。十割越えてるけどね!! それぐらい当たり前前って事だよ!!

「せっかく隼人と友達になれたのよ? だったら、遊びに行っちゃいましょ!!」

「え、ちよま……今から!」

「もちろん!! 隼人も、一日でも早い方がいいじゃない?」

いや、何言ってるのこの人。堂々とサボり宣言? 確かに俺に残されている時間は僅かだけど、これでも真面目な生徒で通ってるんだけど!?

大体学校に休みの連絡しないといけないのに、その辺をなんにも考えて……

「ごころ様。お二人の学校へお休みの連絡、完了いたしました」

「ありがとうございます!! 助かるわっ」

たんですね、はい。つーか誰だよこの人達。スーツにサングラスつてメチャクチャ怪しいんだけど。こころの側近？

っていうか、止めろよ。このお嬢様の暴走を止めろよ。側近なら、なおさら止めろよ。何で用意周到なんてレベルじゃない速さで休みの連絡勝手に入れてるのさ。

「……アタシが色々お願いしてもいいのよね？」

「いや良いとは言ったけど、それは可能な範囲でって事であって、全部が全部のお願いを叶えるってわけじゃ……」

「さーっ、行つくわよー!!」

「ちよっ、人の話聞いてっ!?　こころ、ちよっ……引っ張らないでってばあ〜!!」

こうなつたお嬢様は、もう止まらない。俺には止めようがない。俺の制止も一切聞かず、こころは外を飛び出した。もうこうなつたらどうしようもなく、俺はズルズルと彼女に成されるがまま引き摺られていく。

まだ他の生徒が登校している時間帯。通学路を逆方向に笑顔で駆けていく少女と、手を引かれたまま連行されている男子生徒が注目を浴びたの言うまでもない。

十七日目(Ⅱ)

さて、彼女に連行されて数十分。電車に揺られ、俺たちは見知らぬ街へ来ていた。見知らぬも何も、俺は自分のいる街以外覚えてないし、知らないんだけど。

高層ビルがズラリと立ち並び、高級車がビュンビュンと走っている。道行く人々は皆慌ただしそう。同じ東京でも、俺たちがいたところより都会なのだろうか。朝から、かなり忙しそうなお店という印象を受けた。

みんな自分の世界にしかいないようで、周りを見ているのは俺だけ。少しでも気を抜くと、こころとはぐれてしまいそう。こんな人多い街で、一体何をすると言うのか。

「さ、着いたわねっ」

「着いたじゃないよ。いきなり連行されたと思ったら、説明も無しにこんなところ……。どうするのさ、今から」

「さあ？ 楽しいことをすればいいんじゃないかしら？」

「わかった。何も決まってるんだね」

知ってた。こころに計画性なんてあるわけないんだよね。『どうする？』なんて聞いてはみたが、具体案が出るなんて全く期待してなかったし。

第一そこまで考えてるなら、いきなり外に行こうなんて言うわけないもん。うん、俺がすっかりしないといけないみたい。自分の身を守るためにもね。

「あら、隼人は行きたいところがあるのかしら？」

「うーん、ひとまずお腹空いたかな。朝ごはん、山吹ベーカリーで買う予定だったし。こころは？」

「アタシも食べてないわ。じゃあ、ご飯食べに行きましょうっ」

グイツと俺の手を引いて、こころは走り出す。人の波をスイスイと器用に抜ける様は、さすがというか何というか。

……あ、またぶつかっちゃった。ごめんなさい。繋がれている俺のことも考えて欲しいな、こころさんや。

地図も何も見ないで迷わず俺を案内したのは、大手のハンバーガーチェーン店。もちろんのこと、俺は初めてこういう場所に来た。

「ハンバーガー……ね」

「隼人、パン好きでしょ？ だからどうかなって思ったの!! もしかして、気に入らなかつたかしら？」

「いや、多分大丈夫だと思うよ。食べた事ないから分からないけど……。ただ、ここもこういうお店来るんだなって」

上流家庭のお嬢様であるところが、ファーストフードをチョイスするのは少々意外だった。もちろん、俺の偏見に他ならないのだが。

でも俺の事を考えてくれた結果なのは嬉しい、かな。

「皆で来ることは多いわ。ここ、楽しいもの!!」

「へえ、詳しいんだ。オススメでも選んでもらおうかな」

「まっかせて!!」

時間が時間なだけあって、店内で学生を見かけることはなかった。スーツを着ている人が多いかな。みんなコーヒー一つに、簡易的な朝専用のセットを買っていく。制服を着ているのは、俺とこころぐらいのものだ。

人がどんどん流れていき、すぐに注文の順番が来た。『ファースト』フードとはよく言ったもの。こころも、その勢いに乗るように手早く注文をしている。

しかし、メニューが多いなあ。通常のメニューから期間限定のものまで、目移りするほどある。こころはこの中から何を頼んだんだろう。後ろでポーツとしていたから、全然聞いていなかった。

あつという間に注文した物は届き、それをお盆に乗せて運ぶ。バーガーと飲み物が二つずつにポテト、そしてナゲット。結構頼んだね、こころ。

バーガーそのものも、紙袋の上からでも分かるぐらいに分厚い。一体、この中には何が入って……

「グラタンコロッケ……?」

「ええ。隼人が確実に好きなものを選んでわ!! アタシもおんなじよっ」

「ほえ、こんなのあるんだ。ありがとう」

スゴいなこのバーガー。小麦粉の衣の中に小麦粉で作った物が入っていて、それを小麦粉で挟んでる。カロリーを気にしてる人には天敵みたいな食べ物だけど、こういうのが良いんだよね。こころのチヨイスは大正解だった。

「いっただつきまー……あつふ!? あつっ!?」

「慌てて食べなくても逃げないわよ?」

「分かってるよ……。てか、こころは熱くないなの?」

「問題ないわ。んん、美味しいわねっ!!」

猫舌じゃないとは思っただけど、この熱さには勝てない。出来立てである証拠だね。そんな事もあってか、味は文句なしに美味しい。トロトロのグラタンソースに、ソースのピリツとした甘酸っぱさがいいアクセントを出している。

満面の笑みであるこころに合わせて、俺の顔も綻んだ。

「そういえば、このナゲットは?」

テーブルにはそれぞれのバーガーにポテト、飲み物。だが、ナゲットは一つしかない。となると、まあそういう事なんだろう。

「一緒に食べようと思って!! アタシの奢りよっ」

「え、そんな悪いよ……。半分払うよ?」

「いいの気にしないで。はいっ、あーん!!」

何さ、あーんって。子供じゃないんだから。俺は躊躇うも、こころは、ナゲット付きのフォークを差し出したまま固まっている。早く食べという、無言の圧を感じた。

知り合いの目が無いとはいえ、やっぱり恥ずかしい。ひと思いにバクリと、俺は一口でナゲットを頬張る。

「あつっ!?」

結果、やっぱり出来たてで熱かった。

「ねえ、こんなのはどうかしら?」

「うーん、そんな派手なのはちよつとなあ……。普通のでいいんだけど」

「そうかしら？　もつと隼人はオシヤレをするべきよ」

空腹を満たし、俺達が次にやって来たのはアパレル系列のお店だった。平たくいえば、服屋さんである。

早いところでは朝の十時頃から空いている店もあり、俺達が入ったのもそうだった店の一つだった。開店して間もないのもあって、お客さんはほとんど見かけない。

なぜ服屋に来たのか。それは、俺達が制服姿だったからである。今日はなんでもない平日で、それなのに真昼間から制服姿の学生が街を彷徨ってはどうしても目立つ。下手すれば、周囲の人に怪しまれる。これでは街を歩くこともままならない。

要するに、カモフラージュ用の服を買いに来たのだ。ここに屈したみたいになってるが、そんなのはもはや今更の話。特に問題ではない。

「服なんて何着ても同じだつてば。動きやすいトレーナーを適当に買うだけでいいって」

「そんな、勿体ないわ!!　せっかくだし、ちゃんと選びましょつ。ほらつ、こつちも良さそうじゃない？」

「あのさあ……」

問題は、こころが俺を着せ替え人形にしている事である。かれこれ店に入ってから三十分。俺は為されるがまま、こころの持ってくる服を着せられている。それも、どれもこれも色合いが派手なものばかり。

普段は制服だし休日に出る理由も一緒の相手もいないしで、俺は私服になる機会が減多にない。そのせいもあってか、俺のファッションへの関心は無に等しかった。部屋にある私服だつて、二、三セットあるぐらいだ。極論、着れば何でも良いのである。

「大体こんなに服持ってきて、お金どうするつもりなの？　俺はこころと違って、手持ちも少ないんだからさ」

「あら、それなら大丈夫よ。黒服の人達がいるもの!!」

「御安心ください。お気に召した服が多いのであれば、この店ごと買い取りますので」

いつの間にか、ここも普段着に着替えていた。なるほどね、こころがいくつもの服を持ってきたのはそういう事かあ。さすがに、その辺は彼女も考えてるよね。うん、それなら安心……

「出来るわけないでしょ!? さも当たり前のように金ピカのカード出すの止めてくれないかなあ!」

「あら、駄目かしら?」

怖いこの人達。『ここからここまで全部ちようだい』とか言うのは、金持ちの冗談だと思ってた。平然と店を買い取るとか言い出すし、お嬢様はそれを気にも留めてないし。金銭感覚勉強してきて下さい。

というか、黒服の人達アンタらはいつの間について来たんだよ。極々自然にこの服持つてきて、当たり前のようにこころは存在を認知してたけど。俺は今の今まで気付かなかったんだけど。

とにかく、服は自分で買える範囲のものを買う。そんな何着もいないし、全部払ってもらうのも何か嫌だし」

「隼人いまいくらあるの?」

「三千円」

「それだと足りないわよ?」

「……知ってる」

大見得切ったはいいけど、全然お金足りない。上か下、安いのをどちらかぐらいいしか買えない。だって、元々こんな事になるつもりじゃなかったし。お小遣いもそんなに無いし。

「じゃあ、こうしましょつ。服はアタシからのプレゼント!! ここで全部使っちゃったら、この後一緒に遊べないもの」

「それはそうだけど……」

「隼人の好きな服、一セットでいいわ。それならまだ良いでしょ?」

こころにしてはマトモ……というか、妥当な案だった。制服で街を歩く訳にはいかないし、かといってお金は増やせないから。それでも今ひとつ了承出来ない俺に、黒服の人達からトドメにも等しい言葉が投げかけられた。

「陰山様。ここはひとつ、こころ様に従ってください。仮にもこころ様のお隣を並んで歩くお方ですので、相応の格好をしてもらわないと」

「そう言われると弱いなあ……。分かったよ、今回は従う。ただし、記憶が消えないうちにお金はちゃんと返すからね」

「決まりね!! さあ、好きなものを選んでいいわ!!」

あ、そうか。自分で選ばなきゃなのか。なるべく安く、かつ派手ではなくて、こころと並んで歩いても恥ずかしくないような格好……。高望みしすぎかな。

着こなしも何も分からないので、結局何度も試着をして、こころにアドバイスを受けていたの言うまでもない。ようやく服が決まった時には、すでに正午を回っていた。

★★★☆☆

「くうう、もうちよい……!! 追いつけ、追いつけええ……」

「このまま真つ直ぐ!! やった、アタシが一番ね!!」

白熱のレースは、こころの一着で幕を閉じる。惜しくも二着だった俺は、力なくハンドルから手を離して項垂れた。

現状説明。昼食をその辺のお店で終え、俺達が次に来たのはゲームセンターだった。発案はもちろんこころ。だが、これが個人的にかなり気に入った。

残金にはもちろん気を払いながら、俺達は心ゆくまでゲームを楽しんでいた。このレースゲームの他には……。

「それっ!! スマイルスマッシュ!!」

「技名カッコ悪っ。ってか、パレット飛んでるって!? アブなっ!」

一、エアホッケー。こころの弾いたパレットが顔面に飛んできて危なかった。

「楽しいわコレ!! ハロハピの曲にもダンスを取り入れましょう。ミッシェルにも踊ってもらおうかしら!!」

「奥沢さん、南無阿弥陀仏……」

二、ダンスゲーム。音痴なのも相まって、まあ俺のダンスは見るに堪えなかった。こころはノリノリだったけどね。

「うわあ、こんなにコインが貯まったわ!!」

「ここでも大富豪っぷり見せるの?」

三、コインゲーム。何でか知らないけど、こころはバケツいっぱいコインが貯まっていた。

とまあ、色々とやった。こころはもちろん、俺も俺でゲームには年甲斐もなく興奮してしまった。時間を忘れるってこういう事を言うんだね。本当に初めて、年頃の学生っぽくエンジョイしている気がする。

「隼人、最後にこれやりましょつ」

「これ? これって……」

こころが指さしたのは、プリクラの機械だった。要するに、一緒に撮ろうって事ですか。まだお金はあるけども。

「いいけど、写真ならケータイとかで撮れば……」

「こつちもいいじゃない!! ほら、早く早く」

「ちよつ、ちよつとお!!」

渋る俺を、彼女は相変わらず強引に引き込む。プリクラ機の中は、思ったよりも狭かった。証明写真じゃあるまいし、わざわざお金払って写真撮らなくてもいいのに……。でも、中高生には人気なんだよね。分からないけど。

「ほら、撮りましょつ」

「あ、待って。服整えるから……」

そうは思っても、写る時はちゃんと写りたいのが人間の性^{さが}。俺は、ついさつき買ったばかりの服のシワを伸ばしたり、形を整えたりする。あんま意味無いけど。

「んー、やっぱり似合ってるわね」

「そお？」

「ええ!! とつてもカツコイイわっ」

「あ、ありがと……」

カツコイイと言われて、悪い気はしなかった。こうして考えると、あれだけ服装に迷った甲斐があったというもの。

俺が選んだ服は、白のニットにグレーのワイドパンツ。普段の制服がピシツとしているせいか、こういうダボツとしたのが良いんだよね。この組み合わせは、こころのお墨付きである。

『撮影を始めるよ。好きなポーズを取ってね』

「あつ、どんなのにしようかしら？」

「それ俺に聞くの? ……じゃあ、無難にピースで」

音声ガイドに従って写真をパシャリ。適当にポーズを変えながら、写真を複数枚撮っていく。特に何が起こるわけもない。

横目でこころを見ると、彼女はとても楽しそうにしていた。俺が謝ったのは今朝の話のはず。まるで、そんな事は無かったかのよう

に。
今までずつと、それこそ昔なじみの友といふ時のように。病気の事なんて……関係ないみたいに。

今日は一日楽しかった。これは本心だ。学校サボっちゃったけど、休んで良かったって思えるぐらい。まだ帰りたくないなあって思ってるくらい。

でも、それもいつかは消えてしまう記憶。そう考えると、少しだけ虚しくなる。前を向こうって決めたはずなのに。

「……やと。隼人っ!!」

「わっ!? ゴメン、何?」

「これで終わりみたいよっ」

次が最後の一枚らしかった。画面では『とびっきりの決めポーズ!!』なんて、明るそうに書かれている。どうしよう、あんまり時間ないけどポーズ思いつかないよ。

「え。ど、どうする? もうカウント始まって……」

「最後くっついて撮りましょっ」

「は!?! くつつく!?!」

「時間がないわ。せーのっ」

カシヤリ。

写ったのは満面の笑みで俺に抱き着くところと、テンパって間拔けな顔をしている自分だった。

十一月十七日(月) 天気：晴れ

仲直り……というか、ちゃんと謝罪出来た。終わってみればあっさりしてたけど、元の関係に戻れて良かったと思う。

その後は学校をサボってこころと遊びに行った。ハンバーガー食べて、服買っつて、ゲームして、その後は映画にも行っつて。こないだのバイト代が全部消えてしまったけど、まあ良かったかな。楽しかった、本当に。

月末まであと二週間。悔いを残さない事は難しいかもしれないけど、せめてやり残しが無いようにしたいかな。

二十日目

今週もまた、終盤に差しかかろうとしている。あの日以降学校はサボることなく普通に通り、俺の身の回りでこれといって変わった事は無かった。当たり前のように日常は過ぎてゆき、一日また一日とタイムリミット月末が迫ってきている。十一月も、もう残すところ十日程となった。

周りは何も変わらないが、俺自身もそれに合わせるわけではない。来るべき日に備えて、色々とやる事が残っていたからだ。

その内の一つが、病院に行く事だった。来月の事について、話をしておく必要があったからである。

「じゃあ要するに、毎月の末に行っていた検査は遅らせてほしいと?」「はい。最後の三十日まで、普通に生活したいんです」

治療を行う旨を主治医に伝え、日取りは十二月からという事にしてもらった。治療費などの経済的な話は親に任せるとして、俺が今日ここに来たのは個人的な話をするためである。

毎月の一日に俺は病院で目覚める事になっている。これは今月もそうだったし、毎月こころが会いに来ていた事からも確定事項である。それはつまり、その前日かそれ以上前から病院に入っているという事である。

検査してもらおう立場上、あまりワガママはいえない。だが、頼んで変えられるのであれば、是非ともそうして欲しいのが本音だった。

「ふうむ……。治療の際にも検査は行うし、良いでしょう。最後の一日は家族と過ごすなり友達と過ごすなり、のんびりしなさい」

「ありがとうございます……!!」

断られる事も覚悟の上だったが、案外あっさりを受け入れてもらえて良かった。言ってみるものである。

来月の予定や検査の要項を軽く説明され、その日は病院にもう用は無くなった。これで本日の予定の一つは終わりである。俺は、早足で院内で待っているところの元へ向かった。

「あら、おかえりなさい!! どうだった?」

「良いってさ。三十日はのんびり過ごさせて」

「良かったじゃない!! ね、言った通りでしょ?」

「ホント、何事も言ってみるもんだね」

十一月最終日について、主治医に検討しようと言い出したのはころだった。前述の通り俺は断られると思っていたのだが、彼女の言う通りにして正解だった。俺も俺で安堵したが、何故かここも嬉しうだった。

「隼人、その日はどうするか考えてるの?」

「いや全く。元々、病院で過ごすもんだと思ってたからね。家で何かやるわけでもないだろうし」

「そう。それならその日、アタシとどこか行きましょつ。隼人の行きたい場所に!!」

「ん、それは良いけど」

そう来るだろうかと、内心分かっていた自分がいる。もちろん、答えはYESだった。それでもなければ、病院にいるのと対して変わらない過ごし方だったはずだし。

それに、一人でいるよりも誰かという方が、気が紛れて余計な事も考えないだろう。自意識過剰かもだけど、ここはそこまで考えてくれたのかも。

「けど? もしかして、お金……?」

「そっちは何とかするよ。こないだの服代もまだ返せてないんだし。それよりも、場所が俺任せなんだなって」

「ええ、もちろん!! この前はアタシが案内したし、今度は隼人の行きたいところに行ってみたいわ」

無理難題という程ではないが、中々に悩ましい課題だった。これは気遣いというより、彼女の好奇心に近いものだろうね。俺が「くしたい」なんてお願いした事なんて一度もないし。

少し考えてみるが、やっぱり目的地は思い浮かびそうになかった。でも多分、こころと行くならどこでだって楽しいよ。きつとね。

「ま、それについてはその日までに考えておくよ。それよりも、今はお金の方が第一かな」

「あら、それなら黒服の人達を呼べば解決ね!!」

「なわけないでしょ。ちゃんと働いて、正規の方法で返すつてば」

ひとまず場所の話は置いて、経済問題を解決する事も考えないといけない。目の前のお嬢様は例外として、真つ当な人ならお金は働いて稼ぐのが普通である。幸い俺の高校に『バイト禁止』という校則はないので、俺もバイトは一応可能である。

ただ、俺の場合働くのにも幾つか問題があつて……。

「それで、少しお願いがあるんだけどさ」

「あら、なあに? 何でも言つて!!」

もう病院には用がないので、こころを連れて外へ出た。自動ドアをくぐった瞬間、無防備だった俺の顔を北風が切りつける。もうじき冬だと、改めて思わせるには充分だ。俺は反射的に、マフラーで口元まで覆つた。隣を歩くこころは、ものともしていなかったが。

俺がバイトを探す上で起こる問題は、大きく二つある。まず、時間的な余裕がほとんどないこと。仕事を覚える上でもお金を稼ぐ上でも、これは非常に厄介な問題だ。

そしてもう一つが、俺はバイトに関する情報を何一つ知らないこと。どのバイトがいいとか、全く分からない。

つまり、なるべく効率が良くて専門的知識を要しない仕事を探さなければならぬ。にも関わらず、それが分からなくて足踏みしている訳である。

「ここからお仕事を探せばいいのね?」

「うん。俺が説明した条件に、なるべく合うヤツをね」

来たのはコンビニ。そこで、二人してバイト情報誌をパラパラと捲っている。一人だとよく分からないから、こうしてここに付き合つてもらっている訳である。申し訳ない気もするが暇だと言っていたし、たまには逆でもいいかなつて。

「これなんかどうかしら!? すっごく楽しそうじゃない!!」

「えーと……遊園地の従業員? 働く時間は学校の後が中心になるから、これはダメだよ。遊園地つて、夕方には閉まるし」

「むー。じゃあ、これっ」

「水族館……って、俺の話聞いてた？」

「これもダメ？」

「ダメ」

「こころが提案するのは、なぜか遊ぶようなところばかり。ゲームセンター、映画館、カラオケにボーリング……。高校生的なお出かけフルコースみたいなラインナップである。しかも、どれも微妙に遠いし。

……本当に、俺の条件に合ったと思って提案しているのかな。

「まさかとは思うけどさ。こころ、自分が行きたい場所を挙げてるだけなんじゃ……」

「えっ。……そうよ？」

「おいコラ」

「なんでさも当たり前、みたいな顔してるのかなこの子。全然関係ないし、そんな事一言も頼んでないし。」

「しよがないわ。さっきの事が気になったんだもの」

「自分で自分を正当化しないの。言っとくけど、バイト見つからないと遊ぶお金だつてないんだからね」

「こころが言っているのは、さっきの月末に遊びに行こうって話の事だろう。結局、こころが行きたい場所を探してるんじゃない。心の中で、そんな事をぼやく。俺は別に、こころが選んだ場所でも構わないんだけれど。」

「ってか、今はそれよりバイト探しなんだってば。」

「それは困るわ!! 早く探さないよ」と

「だから、さっきからそう言ってるんだけどね……」

「こんなので大丈夫かな。不安になつてきたし、自分でも一層ちゃんと探してみる。」

カフェ。やっぱり閉まるのが早いし却下。

居酒屋。時給はいいけど仕事量スゴいし、こなせる自信はないかな却下。

アパレル。……俺には不釣り合いすぎる却下。

我ながらワガママである。これでは、こころにどうこう言えないな。さて、彼女は何か良いのを見つけただろうか。

「こんなのはどうかしら?」

「んーと、ホス……ト?!?どんなもの勧めてるの!?!」

「あら、指で隠れてたわ」

「ロイヤルホス……あつ、ファミレスね。紛らわしい……」

「隼人、どうしたの?」

一人で勝手に勘違いして、勝手にツッコンでる。疲れてるのかな、俺。今のところは全く悪くないというのに。

こころが勧めてくれたここも、お世辞にも近いとはいえない場所なので却下。場所、仕事内容、時給……クリアしなければいけない課題が多すぎる。

それからもあれこれと審議はしたが、これといったバイトは見つからなかった。

「うーん、中々見つからないわね」

「だね。ごめんね、せっかく付き合ってもらってるのに」

「気にしないで!! 隼人のためだもの。早くバイト見つけて、お金稼いで、いっぱい遊びましょっ」

いつものように明るく、こころは笑いかけてくれた。多少なりとも付き合わせたことに責任を感じていたが、少し気が楽になった。そうだよ、早くバイト見つけないとね。

お金返すためと、遊ぶためと……あとは所用で少しいりそうだから。

「あつ、やっぱりこころちゃんだ」

「ん……? あら、花音!! 偶然ね」

情報誌を漁っていると、買い物をしていたらしい松原さんと偶然遭遇。ライブでも見かけはしたが、こうして会うのは病院以来である。確か、二日だったかな。こころに振り回されていた、少し気弱そうな人って印象。

「こんなところで、何をしてるの?」

「バイト探しよっ!!」

「えっ!? ……こころちゃんが?」

「違うわ。隼人のよ」

「だ、だよね……」

酷い驚かれようである。気持ちは分かるけど。なんでこの子が働く必要があるんだろうって疑問と、こんな破天荒な子を店に放つたらどうなるんだろうって心配もしたくなる。少なくとも、俺ならする。

……松原さんがそんな失礼な事を思っってはないだろうけど。

「バイトかあ。私のバイト先、そういうえば求人出してたと思うけど……」

「えっ、ホントですか？」

「花音は、ハンバーガーショップで働いていたわよねっ。学校からもそんなに遠くないわ」

棚ぼたである。ここら付近のハンバーガーショップを探すと、確かにそれらしきお店の求人があった。時給もクリア、営業時間もファーストフード店ならば何の問題もない。何より、知り合いがいるというのが大きかった。

「これ、すぐにでも問い合わせていいですか？」

「う、うん……。履歴書があれば、大丈夫だと思うよ」

「よっし、ここに決めた。早速、帰ったら電話してみよう」

あれだけ悩んでいた時間が、嘘のようにすぐに決まった。何とも運が良いね。後で履歴書買わないと。

「でもなんで急に？ 隼人くんってその……」

「はい、もう直に記憶無くしますよ」

言葉に詰まったように、松原さんは押し黙る。言いたいことは分かるけど、俺の地雷を踏まないように配慮してくれているのだろうか。優しい人だ。

確かに、あと十日で記憶を失うようなやつが今更バイトなんておかしな話である。稼げる額もたかが知れているし、働く時間だっていとこ一週間程度である。

「ここらにお金借りちゃったから返さなきゃだし、遊ぶために必要だし、他にも色々……。とにかく、お金が必要なんです」

「色々？」

「あ、いや、まあ今は言えないんですけど」

それでも、ちゃんと働くに値するだけの理由は持っている。もし余裕があるなら……そうだなあ。感謝の意を込めて、プレゼントをもらうくらいの事はしてもいいんじゃないかなって。

隣に立つところを横目でチラリ。このお嬢様は、何なら喜んでくれるんだろうか。

「そっか。じゃあ、私の方からも店長にお願いしてみるね」

「ありがとうございます。もし採用されたら、その時はお願いします」
今後の方針が具体性を帯びてきた。ついでに履歴書を購入して、俺達はコンビ二を後にする。あとは残りの十日間、出来る限り働くだけである。採用されれば、だけど。

ああ、そうそう。最終日に行くところも考えとかなきゃね。あとは……まあ、何か渡すならその内容も。前者はともかくとして、後者は考えるのに時間がかかりそうだ。

俺に残されてる時間はそれほどない。本当にあと少しなんだ、という現実と寂寞感せきぼくが、不意に俺を襲った。

十一月二十日（木） 天気：晴れ

今月がもう終わろうとしている。やり残しがないように、俺は『今月までにやっておくべき事』を整理した。

病院は今日既にクリア。金銭面も、採用さえされればクリアだ。あとは三十日に行く場所だけど、家で考えてたら『使ってくれ』と言わんばかりにクシャクシャのチケットが出てきたんだよね。ここでいいかなって思う。

プレゼントに関しては……。もっとじっくり考えるところでしょう。

二十三日目

「んー」

喉の奥から声が漏れる。ああでもない、こうでもないと考えては思案顔。どれだけ考えても良い案は浮かばず、仮に浮かんだとしても、『なんか違う』と即座に却下。こんな事を、もう三十分ほど繰り返していた。

「は、隼人くん。お客さん……」

「えっ？ あ。えっと、すみません松原さん」

松原さんの声にハッと我に返る。今はそんなにのんびりと考え事に耽^{ふけ}っている場合ではないのだった。

こころと一緒に学校をサボって遊んだあの日から一週間。残された時間を無駄にしないためにも、俺は打って変わって意欲的に活動していた。

「いらっしやいませ。ご注文をどうぞ」

待たせてしまったお客さんに『申し訳ありません』と一礼して、覚えたばかりの常套句を口にする。先日希望を出したハンバーガーシヨップのバイトに、俺は見事受かっていた。

勤務時間は、基本的に平日休日共に五時間程だ。この間ずっと立ちっぱなしなのだから、身体への負担も中々に大きい。それに、今日は日曜日だったからシフトは朝から入っていた。早起きだった事や普段よりお客さんが多い事が相まって、カラダはクタクタである。

「ふいー、疲れた」

「お疲れ様、隼人くん。もう仕事には慣れた？」

「ぼちぼちって感じですかね」

勤務時間が過ぎ、ロッカーで軽く伸びをしていると、松原さんが後ろから声を掛けてきた。俺が働ける僅かな期間、彼女は全面的にサ

ポートに回ってくれていた。

ここの面接に合格出来たのも、ほとんどが松原さんのおかげである。店側に事情を話してくれて、たった一週間なのに特例で働くことを許可してもらった。給料も振込ではなく手渡し。普通なら、俺のような人間は面接段階で落とされていてもおかしくなかった。

「でも、今日はちよつと上の空だったよ？　どうかしたの？」

「あはは……すみません」

「何か悩み？」

「まあ……そんなところです」

心配そうに気にかけてくれるのが、何とも松原さんらしかった。松原さんは俺の一つ上の高校二年生だが、だからといって高飛車な態度を取るでもなく穏やかな人だった。少し内気だが責任感もあって、しつかりしている。ここらと同じバンドにいるのが、少し不思議なくらいだ。大方、巻き込まれたんだろうけど。

閑話休題。俺は、ここ最近ずっとこの調子であった。何かにつけては考え込み、他の事に手が付かない。授業中も、先生に注意されたばかりだったっけ。それに加えてバイトにも支障が出ては、もうお手上げである。

「こころちゃんの事？」

「え、あー、まあ……。つて、なんでいきなりこころが出てくるんですか」

「フフツ、何となくかなあ？」

一発で言い当てられ、俺は言い淀む。そんなに分かりやすいだろうか。確かに悩むような相手ってこころしかいないけれども、松原さんの笑みは何となく含みがあるような気がした。

「私で良かったら、何か相談に乗るよ？」

松原さんは優しい人だ。よく気が回り、親切に寄り添ってくれる。奥沢さん然り、こころの周りにはこんなにも素晴らしい人達がいる。巻き込んで良いものかと少し悩んだが、ここはご厚意に甘えるということで。考え込んだ仕草をすぐに戻す。

「ありがとうございます。今から時間ありますか？」

「えっ？ 特に予定はないけど……」
「じゃあ、一緒に羽沢珈琲店まで行きましょう。ちょうど、そこで人を待たせているんです」

★★★☆☆

数日前にも来た羽沢珈琲店。待ち合わせ場所にも良くて、落ち着いて話が出る場所といえば、思いつくのはここしかなかった。あの時と同じ、彼女は店内でも奥の席に座ってコーヒーを啜っていた。

「あれ？ 花音さんも一緒だ」

「せっかくだし、一緒に相談に乗ってもらおうと思って。ごめんね、遅れて」

「いや、大丈夫だよ。私も来たばっかだし」

ここらの事で相談するに当たって、俺が真っ先に思いついたのが奥沢さんだった。俺がここらに対して怒った時も、彼女を一番に案じたのは奥沢さんだ。態度からはそんな風に見えないが、きつと誰よりも弦巻ここらを大事にしているんだと思う。

最近連絡先を交換したトークアプリで頼んだところ、彼女は二つ返事で了承してくれた。

「それで……何の相談なの？ あ、私はブレンドコーヒーにしようかな」

「なんかね、ここらに何かしてあげたいんですって。陰山さん、飲み物どうする？」

「そう。もうすぐで残り一週間ですからね……。あー、俺はカプチーノで」

「苦いのダメなんだね」

「いいでしょ、別に」

以前奥沢さんと来た時に、ここらのブレンドコーヒーは俺には苦すぎ

ると、身をもって知ったからね。意外と味覚がお子様なのかな。洋菓子も食べられないから、甘党って訳でもないと思うんだけど。

「で、何を渡したいかだったよね？」

「まあ、そうだね。全然思いつかなくて」

奥沢さんがスパッと切り出す。段取りなど良いから、単刀直入にどうぞと言われているみたいだ。彼女らしいといえばらしい。

が、まあ情けないことに何も決まっていなのが実状である。家や授業中に考えてみてはしたが、全く案が浮かばない。

「そんなに難しく考えなくてもいいんじゃない？ 案外、直感で選んだものの方が喜びそうだけど」

「その直感が働かない場合はどうすればよろしいでしょうか」

「……それは困ったね」

ホントだよ。今までプレゼントなんてする相手もいなかったし、いたとしてもその経験はそもそも記憶から抜けているはず。どちらにしても、どうすれば良いのか分からないという壁にはぶつかっていたはずだ。

ネットでも調べてみたけど、あんまり有力な情報は得られず。

第一、プレゼントというのは相手に合わせて選ぶものだ。ネットの情報では参考にはなれど、最適解は見つからない。

「でも、なんでこころちゃんにプレゼントを？」

「えっ？」

「ほら、理由が分かっただらどんなものを送ればいいのか考えられるかなって」

「えーと、その、今までこころにはずっと助けられたっていうか何ていうか……。上手く言えないけど貰ってばかりだったから、たまには逆もいいかなって……」

松原さんの問いに答える俺は、まるで尻すぼみだった。ぼそぼそと、後半になるにつれて声が小さくなっていく。こんな理由で良いのか自信がないのと、単純に恥ずかしいからってのと。

彼女に対するそれは、紛れもなく感謝の意だった。殻にこもった俺に、ずっと付き添ってくれていたこと。しつこく、何度も何度もお

かげで俺は前を向くことが出来たし、今を楽しいとすら思っている。

それに、何も残さないまま記憶を失うのが嫌だった。俺は忘れるだけだが、こころの記憶にはいつまでも残るのだ。だから、何か爪痕を残したい。十一月の陰山隼人として、彼女の記憶に。

「へー、この前と言ってることがだいぶ違うんだね」

「う……ほら、あれから色々考え直したというかさ」

「仲直りもちゃんとしてるみたいだし」

「ほつといてよ。というか、そういう風に誘導したのは誰さ」

「さあ、何の話だか」

奥沢さんの意地悪そうな笑みが突き刺さる。その節は確かに迷惑をかけましたけども、恥ずかしいから掘り返さないでほしい。あの時とは、事情が違うんだから。

「まあ冗談はさておき、要するに『今までありがとう』っていうプレゼントでしょ？ その気持ちが伝われば十分な気がするけど」

「う、うん。気持ちが大それたと思うよ」

「それは……まあそうですけど」

二人みたいに簡単に考えられるのが、一番楽なのは間違いないけれど。そう割り切れないから苦労しているのだ。まあ、彼女たちは付き合い合いの長さもあるだろう。かく言う俺は、一月弱である。

何あげればいいかなあ。食べ物とかアクセサリーとか？ あとは

欲しいものを聞くって手もあるけど、あの人は『何でも!!』って答えそう。というか、身の回りの物には困ってないだろうし。

……となったら、市販の物ではないもの。手作りの何かとか？

ちよつとハードルが高いよね。

「何か買ってつてのが抵抗あるなら、だいぶ限られてくるけど」

「アルバムみたいなものを作るのはどうかな？ こころちゃんって写真

好きだし、隼人くんが記憶を失った後も残るし」

「あー、写真……ないですね」

松原さんの案はかなり良いと思ったが、アルバムを作れるほどこころと写真を撮ってない。企画倒れである。

でも、松原さんのでだいぶ考えの方向性が見えた気がした。ただあ

げるのではなくて、俺にも何らかの形で残るもの。そういうのが良いんだと思う。

写真がダメなら……文章？

「じゃあ、手紙とか？ 陰山さん、直接どころに何か言うのは難しそうだし」

「一言多いって。……否定しないけど」

「お揃いのものとかも良いんじゃないかな。アクセサリーとか、文房具とか」

色々と案が出てくる。何をすればいいのか、段々と輪郭を帯びてきた。さすが女子高生。頼ってみるものである。

でも、手紙にすると長くなりそうだな。もつと他の……他の何か。

「……一つ、俺も思いついたかも」

「へえ、どんなの？」

「聞いてもいいかな？」

俺の脳内にふと浮かんだ事を二人に話す。この一ヶ月の事を振り返って、その時に感じた気持ちや出来事を、一々手紙に書いてたんじゃあ長くなってしまうのがない。だったら、もつと別の方法で伝えればいい。

正直、自分でも無茶苦茶な事を言っていると思っている。でも、言わないままだと後悔しそうな気がしたから。まあ、やる前から諦めるなってね。

「それ……スゴくいいかも。こころちゃん、きつと喜ぶよ」

「確かに、面白そうかもね。でもさ、現実的に時間ないんじゃない？」

「その辺は大丈夫。一応、ツテもあるから」

案外、二人からの感触は良かった。だいぶ無茶を言っている自覚があっただけに、二人が好感を持ってくれたのは嬉しい。やっぱり、言つて良かった。言わないと始まらないし。

奥沢さんの指摘は現実的で、確かに考慮しないといけない事はある。あまりにも、取り掛かりが遅いのだ。だが、何も考え無しで提案した訳では無い。それに……

「やろうと思えば、多分何とかなるよ」

大事なのはやろうという気持ちだ。思った通りに事が運ばなくても、やろうとすれば何か起こる。やろうとしなければ何も起こらない……だよ。

「……なんか、言ってる事がこころちゃんみたいだね」

「やめてくださいよ、そんな……」

「やれやれ。陰山さんもこころに毒されちゃって」

「違っつてば」

こころっぽい……か。確かに、ずっと似たような事言ってたかな。あんまり繰り返し返されるから、伝染つたのかもしれない。思い返すと、少し恥ずかしいかも。

でも、知らず知らずのうちに前向きになっているという事なのかな。前までなら、絶対にこんな考え方をする事はなかった。『どーせ無理』だと、先入観で決めつけていたはずだ。今の俺の姿は、散々彼女に魅せられていた姿なのかもしれない。

「じゃ、やるなら準備をやりますか。時間は限られてるんだし」

「そうだね。私達も出来る限りの手伝いはするよ」

「奥沢さん、松原さん。ありがとうございます」

今後の方針は決まった。心強い味方も出来た。あとは、実行するだけだ。大丈夫、やればきつと何か起こるから。それは、俺がこの一ヶ月で嫌というほど聞いたフレーズだ。

残り一週間、やり残しがないように。その気持ちだけを胸に、俺は再び二人との話し合いを続けた。

十一月二十三日（日） 天気：晴れ

月が変わるまで、残り一週間となった。バイトは思ったよりも順調で、この調子ならお金は問題なく貯まると思う。

もう一つの、プレゼントの方。色々と案は出たけど、松原さんの出してくれたお揃いの『何か』と、奥沢さんの手紙、そして自分の案をそ

れぞれ採用しようかなと思う。

(中略)

少し準備が大変だけど、残り一週間でやるしかない。頼れる人には全部頼って、絶対に成功させる。大丈夫、きっと上手くいくはずだ。根拠なんてないけれど、なんでかそう思う。

二十四日目

バイトをしながら学校生活を送るといのは、予想以上にハードだった。ハンバーガーショップは基本的に立ちっぱなしだし、接客というものは酷く神経を消費する。お世辞にも人付き合いが上手とはいえない俺には、結構ハードルが高かったようだ。

そんなわけで、いつも家に帰るとグツタリ。そのまま一時間弱ほど寝てしまうなんて事もザラである。

だが学生の定めとして課題はあるし、朝も早起き。それに加えて、俺にはやるべき事があった。

「んー、十一月の五日って何してたかなあ……」

『まだ五日の分やってたの？間に合うの？』

「急かさないですよ。思い浮かばないんだからさあ」

『律儀に毎日しなくてもいいと思うけど……』

電話の相手は奥沢さん。スマホのスピーカーから声を聴けるようにして、通話しながら机に向かっていている。広げているのは、十一月分の日記帳と市販のノート。日記と睨めっこしながら、ペンを走らせていた。

「結構大変なんだよ、半月以上も前の事を思い出すの」

『まあ、気持ちは分かるけど……』

「ところで、製作の方は大丈夫だった？」

『今日練習の時にね、出来るかどうか頼んでおいた。半月あればやれるってさ』

「ホント、何でもやれるなあの人達……。ありがとね」

いま何をやっているかというと、今月の出来事を一日ずつ詳細に、ノートに起こしている。それは、昨日の話し合いで出した、俺のプレゼント案を実現するために必要な事だった。

毎日日記をつけているため苦じやないと思いきや、これが結構難しい。奥沢さんから、『なるべく事細かに』って言われたからなあ。人間の記憶力にも限度があるから、月初めの方はあまり覚えてないのだ。

『無理に毎日分書かなくていいよ。陰山さんのソレがないと、この案

はそもそも成立しないから』

「そだね……。色々ありがとう」

『大変だとは思うけど頑張つて。おやすみ』

「うん。おやすみ」

電話を切り、また過去の記憶を振り返る作業に戻る。放つておいても記憶を失う自分が、過去の記憶を思い起こしているのは何とも皮肉である。こんな事をするなんて、夢にも思わなかった。自分を振り返るなんて。

一日目から四日目まで纏めたのを見ると、それがよく分かる。最初はこころに対する当たりが強かったし、自分の事について軽く絶望もしていた。『笑顔がない』なんて言って近寄る彼女を、疎ましく思つてすらいた。

それでも心のどこかで彼女が眩しく、そして羨ましく見えていた。それを自覚したのは確か四日目、ライブに招待された時の話だ。大勢の観客に囲まれて歌うこのころの姿は、とても眩しかった。あんな楽しそうな思い出を残せる彼女が妬ましくて、そのくせ俺自身に介入してくるから目障りこの上なくて。ライブも途中で見るのが辛くなつちやつて、最後まで見ずに帰つたんだよね。

こんな感じで、何かがあつた日なら思い出せるんだけど、そうでもない日は中々ペンが進まない。何も無い日は日記も三行ぐらいで終わつてるから、あまり役に立たない。

こうして考えると、改めて思わされる。俺のこの一ヶ月は、弦巻ころろがいて初めて生まれたものなんだと。こころと何かをした、こころとどこかへ行った。そんな日の日記は決まって長い。奥沢さんと話した十四日目や、昨日のが数少ない例外みたいなものだ。これほどまでに俺は、彼女から多大な影響を受けていたのだと感じる。

「……………ん、電話？」

オフになっていたケータイの画面が唐突に付いて、電話番号が表示される。奥沢さんと通話していたのは、トークアプリの通話機能。すなわち、番号は必要ない。

俺がケータイの電話番号を登録しているのは、ただ一人である。

「もしもし」

『あつ、出た!! こんばんは、隼人』

『どしたの、こんな時間に。珍しいね』

『ええ。最近、あんまり隼人とお話してなかったもの』

「ごめんね。忙しかったからさ……」

電話先から聞こえるこちらの声は、夜にも関わらず楽しそうだった。バイトを始めてからというもの、彼女といえる時間は確かに少なくなっていた。行きはともかくとして、帰りは一緒にいられないのが一番の要因である。

『いいのよっ。今何してるの?』

「えっと、日記を見直してる……かな」

『自分の?』

「まあね」

本当のことは、もちろん言えない。でも、ウソも言っていないから悪いことはしてないよねって。サプライズのつもりだから。

日記の事を聴くだけならいいかな。こころとはほとんどいっていいほど一緒にいるし、俺の忘れてたところも覚えているかもしれない。

『どうしたの? 急に』

「うん……まあ、振り返りかな。俺にとっては、色んな事が起きた一ヶ月だったからさ」

『そう……』

「それでさ。こころの場合、どの日が印象に残っているかなあって。その……俺と過ごした時間で」

何言ってるんだろう、俺。物言いが誤解されそうな風になってしまつて、最後の方は声が力なくなっているのが分かる。恥ずかしい。

こころはそんな事を気にもせず、電話口で『うーん』と唸っている。彼女が鈍感で……というか、あまり気にかけれなくて良かった。

『会った日でしょ、ライブにも招待した事もあったわね。あとは、隼人の好きな食べ物が分かった日かしらっ。アタシの知らない一面が見れたもの』

「好きな食べ物……七日の事かな」

『あとは、福引きのバイトをした時もあったわね!!』

だいぶ日を跨いだけど、まあいいか。七日は確か、初めて一緒に登校した日だよ。ところが勝手に部屋に入ってきたんだ。それで朝ごはんを山吹ベーカリーで買って。あそこのコロツケパンは美味しかった。

で福引きのバイトをしたのは……十日だ。奥沢さんと三人だったっけか。泣き出した女の子を、こころがあやしてたのが印象に残っている。

この辺の日記では、体調の悪さを度々訴えている。といっても寝不足だけ。心的なものだったと思う。十一日には病院に行っているし、その次の日も病気に不安を抱いている様子が日記から散見される。

『この前遊びに行ったのも楽しかったわ!! 初めてだったもの!!』

「その節は……本当にごめんね。理不尽な事で怒っちゃって」

『いいのよ。そのおかげで今があるなら、アタシはとっても嬉しいわ』
十三日にはとうとう今まで積もっていたストレスや怒りが爆発。こころに、『もう構うな』と突き放してしまった。そして十四日目に奥沢さんの口から真実を知り、仲直りまでに至る。こころが言ったのは、仲直りしたのと同じ十七日の出来事。

最近の出来事という事もあって、この日はよく覚えている。学校はサボってしまったけど、本当に楽しかった。こんな普通の高校生みたいな生活を送れるなんて、思いもしなかったから。

そしてそれは、こころからしても同じだったんだと思う。多分、こころも俺と出かけるのは初めてだったから。十月以前の『俺』は、こころと仲直りしようだなんて思わなかったらしいから。

俺に拒絶されても次の月初めにまた声をかけ、再び拒絶されて。こころが俺を諦めなかったから、俺は一人にならずにすんだ。自分と向き合うことが出来た。

「ありがとね。ホント、色々」

『色々?』

「ずっと、俺といてくれて。こんな変な病気持つてる、ひねくれた奴と
いてくれて」

この一ヶ月を振り返って感じた、こころという人物の絶対的な存在感。日記を見ればそれは一目瞭然であるし、俺自身の彼女に対する感情もまた、それをよく表している。本当に感謝してもし切れないぐらい。

これだけ想っていても、きつと残酷なほどに綺麗さっぱり忘れてしまふのだろう。自分の想いが強ければ打ち勝てるのでは、という淡い期待もある。だが、それも直に分かる事だ。

『当たり前じゃない。隼人が笑顔になれるまで、アタシは諦めないから』

「十分、前よりは表情豊かになったと思うけどね」

『まだまだ。隼人の心は、いつつも泣いてるもの。全然笑顔じゃないわ』

「……そっか」

……全部見透かされているなあ。彼女に下手なごまかしやウソは、あんまり意味がないみたい。人の心の動きに関しては、特に鋭い子だ。

記憶を失った俺は、きつとまた塞ぎ込んだ性格に戻ってしまうだろう。ネガティブで投げやりで、冷めた考え方をするような。そしてこころは、そんな俺にまた付き添う事になる。いつ病気が治るとも分からない、俺なんかの為に。それは病気が治るまで、記憶を戻すまで続く。

ずっと歩み寄り続けてくれた彼女のために、俺に何か出来ることはないのか。来月の俺に、遺しておける事は……。

「ねえ、こころ」

『何かしら?』

「俺がさ、笑顔になったら嬉しい?」

『もちろんよ!! 嬉しいに決まってるわ。今の隼人といっても楽しいけど、笑顔の隼人と一緒だったらもっともっと楽しいはずよ!!』

「……そっか、その言葉を聴けて安心した」

笑顔になれたら。病気も無くなって、何のわだかまりもなく、本当の意味でこころと友達になれたら。そんな日がいつか来るだろうか。いや、きつとその日が来るまでこころは待ち続けてくれる。

だから、俺はその日までこの想いを次に繋ぐ。こころの事を忘れてしまっても、彼女を信じられるように。もう、くだらない諍いなんて起こさないように。

彼女が俺に希望を持たせてくれる。彼女はずっと俺の味方だと、次の『俺』に繋ぐんだ。

「俺さ、頑張るよ。こころが喜んでくれるなら、笑顔になれるように立ち向かう。前を向いてみせる」

『隼人……』

「だからその、これからもよろしくお願い……します。俺のそばにいてください。来月も再来月も、治るまでずっと」

今月の日記を、まず俺の目につくところに置いておく。今までは看護師に預けていたようだが、今回はそれをしない。記憶を失って目覚めた十二月一日の朝、思わず手に取るようなところに置いておくのだ。最初は受け入れられないかもしれないが、書いてある事は全て事実だ。いずれ信じるしかない。

あとは残念ながら、来月の俺次第になってしまう。また迷惑をかけるだろうし、こころに冷たく当たってしまうかもしれない。だから、こころを信じるしかない。彼女を信じて、今の想いを繋ぐことしか俺は出来ない。

だって、嫌じゃないか。記憶を取り戻した時、隣に彼女がいないなんて。

彼女がいないと……俺は笑顔になれない。

『ええ、もちろん。何を言われても、どれだけ避けられても隼人のそばにいるわ。約束よ』

「うん、約束」

俺は、そう言いながら小指を立てた。なんだか、電話越しで向こうも同じ事をしている気がして。それを想像すると、俺の心はほんのり暖かくなった。渦巻いていた不安が、少し拭えたように思える。

電話を切り、机に再度向かい合う。彼女と話して、色んな思い出がより鮮明に思い出せた。楽しい記憶も辛い記憶もあるけれど、どれも俺の大切な記憶。色褪せないように、ちゃんと書き記しておかないとね

……今なら、もつと詳しくノートに書けそうな気がする。

十一月二十四日（月） 天気：晴れ

一ヶ月の出来事をノートに振り返る作業に着手。今日は、十日目ぐらいまで進めた。月の序盤は、自分でも引くぐらい冷めてたなあと思う。よく今みたいに変われたなど、改めて感じた。金曜日までには、この作業を終わらせたいかな。

二十八日目

金曜日。週末を迎えるということで、校舎を出る者達の顔は幾分か晴れやかなように見える。今週に期末テストを終えたこともあって、あとは冬休みを迎えるだけである。そういった意味合いも強いのだろう。

だが、俺にとって今日という日は、他の誰とも違う特別な意味合いを持っていた。

「はーやとく!!」

「遅くなってごめん、こころ」

校門付近では、こころがいつものように待ち構えていた。彼女は俺を見つけると、小走りで駆け寄ってくる。人懐っこい犬みたいで可愛い。

「そんなに待ってないわ。さ、行きましょっ」

「うん……おっと」

いつものように手を引かれ、こころに引つ張られる形になる。俺とこころが出かける時は、この構図がもやお馴染みとなっていた。

今日は、最後の登校日だった。もちろん引越すとかそういうのではなく、今月最後のつて意味で。つまり、こころとこうして制服姿で会うのも最後になる。今日はバイトがないので、ならば一緒に帰ろうという話になったわけだ。

……ちなみに、誘ったのは俺の方である。

「珍しいわね? 隼人から誘うなんて」

「うん……まあね。その、他の人達みたいに学校帰りの寄り道つてしてみたかったし」

「行きたいところがあるの?」

「いや、全く」

こころに巻き込まれてどこか寄る……つていう経験はあったが、自発的に寄り道をするのは初めてだ。自分から誘っておいて、行きたいところもないという無責任な状態だけだ。

行きたいところがないというか、思いつかないというのが正しい。

経験に乏しいから、こういう時の定番が分からない。

「じゃあ、アタシに任せてっ。ほらっ、行くわよ」

「ご案内、よろしくお願いします」

困った時は、大体こころに任せておけばいい。俺が下手に考えるより、ずっと面白い経験をさせてくれる。これも、今までに学んだ事だ。こころが小走りで進むので、手で繋がれている俺も当然小走りになる。方角は商店街。すっかりお馴染みの場所へと、俺達は赴く。

次が休日ということもあつて、商店街には多くの人で溢れていた。多少乱れていた息を整え、辺りを見回しながら目的地へ向かう。

季節柄だろう、イルミネーションが飾られているお店が増えてきた。十一月の最初の方に比べて、商店街全体が明るく彩られている気がする。気の持ちよう次第で、こうも見える景色は変わるのかな。密かに沸く高揚を抑えられない。

今、自分は確かにこの商店街の喧騒の中にいる。

「こつちよ、こつち」

こころは人の間を縫うようにスイスイと進んでいく。この周辺は食材を扱うお店が多いのか、買い物袋を持った奥様方が多い。俺達が辿り着いたのは、そんな中の一角。

「いらっしやい、いらっしやい!! 美味しいコロッケあるよー!!」

そのお店は、俺にとって何とも魅力的であった。北沢精肉店というそこでは、入口に大きくコロッケと書かれたのぼり旗が。揚げ物の香ばしい匂いが店先から漂ってくる。

「おっ、こころーん!!」

「はぐみー!!」

北沢はぐみは、こころを見つけるといち早く駆け寄り、いえーいとハイタッチ。店の前であるにも関わらずテンションが高めな二人だ。

彼女は、ハロハピのベース担当。一度ライブを見た時は、楽器持ちながら軽快に動いていた記憶がある。それがバンドの在るべき形なのかはおいとして、ハツラツで元気な子のようだ。こころとタメ口なところを見るに、恐らく同級生。

「今日はどうしたの？ お友達？」

「そうよ、はぐみの家のコロツケを買いに来たの。隼人はコロツケ大好きなものね」

「ホント!? 絶対美味しいから、いっぱい食べてね!! 何個食べる？」

五個？ 十個？」

選択肢がおかしいよね。いくら好きでも、そんなに食べられるわけではない。普通に一個でいいですよ。一個で。

こころとノリが合うだけあって、この子も結構常識を無視しちゃう感じなのかな。いや、なんかハロハピらしいけどね。奥沢さんや松原さんの苦勞が窺える。

結局俺はコロツケを、こころはメンチカツを一つずつ買ってお店を後にした。店先ですぐに食べないんだ、と彼女の「らしくない」行動に首を傾げる。こころに手を引かれて、再び移動。日も下がり、いつの間にか人気のない場所に連れて来られていた。

★★★☆☆☆

「着いたわっ!!」

商店街を抜け、階段を駆け上がり、俺達がやってきたのは見晴らしの良い場所。自分の街全体を見渡せ、展望台としても使われている場所だった。周囲は、木の柵で囲まれている。

「ちよ、ちよつと休ませて……。キツすぎ……!!」

付近にあったベンチに腰を下ろし、俺は呼吸を整える。隣に腰を下ろすこころは、不思議そうにきよとんとしている。情けない話だが、俺と違って彼女はバテてないようだ。こころがタフなのか、俺がひ弱なだけなのか。

「いいでしょ、ここ。とっても景色がいいのよ!!」

「暗くてよく分かんないよ」

確かに昼間ならよく見えそうだけど、今は一番中途半端な時間帯

だ。景色を見るには暗すぎるし、星を見るには明るすぎる。まあさっきの人混みの中に居続けるよりはマシだけど。

でも、せつかく二人でいれるしいつか。俺は、さっき買ったコロツケを取り出す。紙袋から伝わる熱は、まだ冷めてはいない。全力で走った甲斐があつた。落としかいたとかいうお約束もないし。

「いただきます……うん、美味しい」

「こつちも美味しいわよ!!」

こころがメンチカツを差し出すので、一口かじる。当たり前だけど、こつちの方が肉々しいとか何というか。でも、嫌いじゃないな。お返しにと、俺もコロツケを差し出す。

こころはそれを見て、無言でかぶりつく。でも、顔は分かりやすく満面の笑みで。俺も釣られて、顔が綻んだ。

「いま、とても優しい顔をしてるわ」

「……そう? 前もそんな事言ってたよね」

あの時はコロツケパンを食べていた時だったかな。あの時も、こころは俺の表情を『優しい顔』と評した。その真意は今でもよく分からない。笑っているのではないのだ。わざわざ『優しい』と言っているのだ。

「よく分からないけど、いつもと隼人の顔が違うの。いつもはもつとこう、目元とか尖ってる感じなのよ」

「素の表情……って事かな。どれが素の自分なのか、イマイチ分からないけど……」

好きな物を食べて、本能が出ているのだろうか。記憶では忘れていても、カラダは覚えている。だから、自然と顔が綻んでいる……とか。自分自身、表情を変えているつもりはないし完全に無意識だ。でも、こころが言うならば本当に変わっているのだろう。彼女は、その辺鋭いから。

「それが本当なら素敵ね。隼人の優しい表情、アタシとっても好きだわ!!」

「恥ずかしいよ……。でも、ありがと」

照れくさいのを隠すように頬を掻く。好きだと言われて、嬉しさよ

りも恥ずかしさが勝った。何だか、変な気分だ。

「アタシがね、初めて隼人を見た時。目に光がなかったの。スゴく寂しそうだった。怯えてもいたわね」

「……それで？」

「何とか笑顔にさせようと思ったわ。だって笑顔じゃないなんて、つまらないもの。だから、アタシが教えてあげようって」

こころの独白に、俺は静かに耳を傾ける。彼女がこんな風に語るなんて、珍しいなと思った。いつもは、行動で感情を示すような彼女がだ。

「簡単だと思ってたけど、上手くいかなかったわ。何でなんだろうって考えても、アタシには分からなかったもの」

「それは……ごめんね」

こころと一緒にいて、笑顔にならない人の方が少ないだろう。というか、そんな人間なんて俺が初めてだったんじゃないだろうか。自意識過剰なんじゃなくて、こころの口振りから本当にそう思える。

そう考えると、やはり今までの罪悪感がのしかかる。だが、こころは『いいのよ』と優しく微笑みかけてくれた。

「だからこそ分かるの。今の隼人は、いつもと違うって。今なら、隼人も笑顔になれる気がするわ!!」

「ほ、ホント？」

「ええ。だから、ちよつと笑ってみてくれないかしら？ ほら、ニコって!!」

む、難しい事言うなあ……。こころは、お手本を示すかのように口角を上げている。俺も、彼女の真似を試みる。

意味があるのかとか、どうせ忘れるとか。かつて抱いていたそんな疑問は、頭から吹き飛んでいた。目の前の彼女を見たら、もうどうでも良くなったから。

「こ、こころ……かな？」

口元はピクピクと引き攣り、目は潰れている。およそ綺麗とは言えないような笑顔だと、自分ながら分かる。鏡があつたら見せてほしいぐらいに。

「アハハっ!! 素敵よ、隼人!!」

「いま笑ったよね?」

失礼な。人が苦勞して頑張っているというのに。

確かに、ぶきつちよかもしれなかつたけどさあ。

「でも、隼人が自分から笑顔になろうとしたわ!! スゴい、スゴいわ隼人!!」

「……うん、そうだね」

目を輝かせている彼女に、怒る気力も失せてしまった。いいよ、喜んでくれているから。こころが喜んでくれたなら、それはそれで恩返しだ。

俺がこころにしてあげられる、ある意味で最高の恩返し。本当は、もつと自然の形を見せてあげたいけれど。それでも、こころが喜んでくれるなら。

こころが俺に絡んできた当初、『笑顔になって何になる』と思っていた。自分本位でしか考えてなかつた。でも、実際は自分だけの問題じゃない。俺が笑顔になるだけで、こころがこんなにも喜んでくれる。きつと、もつと他の人も笑顔に出来る。俺の記憶には残らなくても、皆の記憶には残る。

「エへへ、やっぱり笑っている顔が一番ね!!」

「そ、そう? 変な顔になってない?」

「そんな事ないわ!! とつても素敵よ」

「……なら嬉しい」

それはきつと、素敵な事なんだと思う。笑顔は皆に伝染る、魔法の病気。それが広まり続ければ、きつと世界は笑顔になる。

楽しいことは、笑顔にして倍に。辛いことは、分け合つて半分に。俺とこころの関係は、まさにそんな感じだった。俺の辛い事は、全てこころが分け合つてくれた。楽しい事は、二人で共有しあえた。

俺はこころに、たくさんのものを貰っていた。

「来月の俺にも教えてあげてね、笑顔の素晴らしさつてヤツ。俺がもう笑つたから満足くなんて言わないでよ?」

「もちろん。何度だつて教えてあげるわ。……ずっと一緒よ」

良かった。こころは俺の手に自分の手を重ね、いつものような快活な笑みではなく、優しそうに。しかしどこか儂げに笑ってみせた。普段の彼女からは見れないような、慈愛に満ちたような表情だった。

いつもと違う雰囲気の彼女を少し疑問に、しかしどこか見惚れている自分がある。繋がれた手からは、段々と熱を感じて。普段の彼女と、何が違うのだろう。頭を捻っても、よく分からない。

そんな俺の考えをかき消すように、こころは不意に立ち上がる。

「さ、帰りましょつ。寒くなってきたわ」

「……え？ あ、うん。そうだね」

僅かに残っていた夕焼けも、いつしか色を失い始めている。時計を見ると、もう七時前になっていた。結構時間が経ってしまったんだなあ。

こころは俺の手を掴んだまま、先導しながら帰り道へと案内していく。暗いのも相まって、前を歩く彼女の表情は分からない。元々何を考えているのか分からないけど、今はそれ以上に分からなかった。

帰り道は何を話していたのかも、正直あまり覚えていない。いや、ほとんど話さなかったんじゃないかな。ただ一つ感じていたのは、繋がれた右手の感覚。華奢きゃしゃな彼女に似合わず、強く強く握られていたのを感じた。

こころを家に送り届け、俺は一人帰路に着く。すっかり辺りは暗くなり、住宅街の付近は人も通らなくなっていた。だがそんな状況は、むしろ今の俺にとって好都合といえた。

「お待ちしておりました」

「こんばんは。予定よりも遅くなってますみません。理由は……まあ、おたくのこころと一緒にいたからだけ」

黒のスーツに、サングラスをした怪しげな風貌。こころの側近とし

て仕えている、ボディガード兼使用人の女性だ。俺は、彼女に用があった。

「それで、約束のものは」

「うん、ここに」

「……拝見致します」

通学カバンの中からノートを一冊、使用人に手渡す。こないだから書き留めていた、あのノート。彼女はそれを受け取ると、持っていたペンライトを照らしながら中を確認する。ものの数分で流し読んだ後、ノートを閉じ、ふうと一息。

「予想以上です。驚きました」

「まあ、情報は多い方がいいと思って。出来そうですか？ 量もそうですけど、このメモだけで書くなんて……」

「問題ありません。我々はごころ様のボディガードですので、何らかの手段でごころ様の動向は把握しています。よって、我々もあなた様方の行いがある程度見えていますので」

「あ、そうですか……」

「私以外にも協力してもらい、半月ほどで仕上げてみせます。残り二日分は、後日家に伺います。家内の方に預けるなりポストに入れるなり、よろしくお願いします」

「あ、はい。わかりました」

「ごころが『彼女達は何でもしてくれる』と言っていたが、どうやら伊達ではない様子。ごころの凄さを思い知ると同時に、弦巻家の恐ろしさを垣間見た気がする。ある程度見張られていたって考えると、あの意味怖いけどね。ボディガードだから仕方ないのか。」

「そうそう、コレのタイトルは考えていますか？」

「タイトル……？」

「そうです。せつかくなら私達より、陰山様が考えた方がよろしいかと。その方が、ごころ様も喜ばれるかと」

使用人の言葉に、俺は色々考えを巡らせる。タイトルを考えるなんて、予想もしてなかった。いきなり言われても、パツと思いつくものではない。

彼女達に作ってもらうのは、俺とこのころの一ヶ月そのもの。本当は自分の手で作りたかったけど、時間がないからね。ずっと大切に保存出来るようにと、考えたもの。

こころと出会って、俺は本当に変わることが出来た。暗く閉ざしてた俺を明るく照らしてくれて、前を向かせてくれた。いつも明るく輝いていて、彼女の周りは笑顔で溢れていて。

そうだなあ、さながら太陽みたいなんだよ。こころって。全てを優しく照らす、太陽だ。

「太陽の……備忘録、なんてどうかな。ちよつとカツコつけちゃったけど」

「素敵だと思います。では、そのように」

「うん、よろしくお願いします」

備忘録って、忘れた時に備えて残しておくためのメモって意味があるんだ。それで、こころを形容する『太陽』を添えて。こころを忘れないように、いつまでも胸に残り続けるように。

そんな願いを込めて、このタイトルを捧げる。

十一月二十八日（金） 天気：晴れ

最後の学校帰り。初めてこころと寄り道をした。まだ最終日に出掛ける予定があるけど、もう会えるのも僅かなんだなあって感じる。口には出してないけど、こころもいつもと違う雰囲気だった気がする。そうそう、ノートも無事に提出出来た。あとは、あの人達に任せるとしよう。こころに、どうか俺の気持ち伝わりますように。

三十日目（Ⅰ）

「まだ……かな」

辺りをキョロキョロと見回して、時計を見る。この作業を、ここに来てからもう何度繰り返し返したのか。自分でもソワソワしていて、落ち着いていないってのが分かる。

今日は十一月三十日。つまり、記憶が継続する最後の日。本来なら病院にいないといけないのだが、許可をもらって外出を許されている。こころと一日中出かけることにして、今こうして駅で待ち合わせをしているわけだ。

服はあの時買ったばかりのものを着ているから、身だしなみは問題ないはず。髪は……寝癖だけ直してきた。どこもおかしい場所はないはずである。

約束までまだ五分ある。やはり早く来すぎたのかもしれない。

「はーやと〜!!」

時計にあつた視線をフツとあげると、こころが手をブンブンと振りながらやって来たのが見えた。朝から元気いっぱいだな、いつも通り。

彼女の服装は、ワインレッドのセーターにデニムのショートパンツ。私服を見るのは二度目だけど、よく似合ってるんじゃないかなと思う。静かにしてさえいれば綺麗な人だから。

「おはよう!! 早かったのね!!」

「ま、まあね。おはよう、こころ」

「隼人も楽しみにしてくれたのね。嬉しいわ!!」

「別に……早く目覚めたただだよ」

こころが俺の手を掴みブンブンと上下に振るのに対して、俺はプイツとそっぽを向く。意識して楽しみだと思っていたつもりはないんだけど、どうやら行動に出ていたらしい。それがすぐにバレたのは、何とも恥ずかしい話である。

……まあいいか、バレたって。最後まで変な意地通し続けるのも変な話だ。

「それで、今日はどこに行くのかしら？」

さて、ここから投げかけられるのは当然の質問。今日の行く場所は俺が決める、という事になっていた。今までその場所については、こころに何も伝えていなかった。

でも、それは何も考えていなかったからではない。俺は財布から、二枚の紙切れを取り出す。それは人に渡すものとは思えないほど、グシャグシャに皺しわが出来ていた。

「あら？　これって……」

「覚えてる？」

「ええ、あの時のチケットね」

これは、俺が商店街の福引きで引き当てた水族館のペアチケット。貰った当初はいらな**い**と思**い**、グシャグシャにして捨てようとしたものだ。結局捨てるに捨てられず、今までずっと持っていたのも何かの縁。きつと、神様が『ここに行け』と導いているんだと勝手に思**い**、今日の行先に水族館を選んだ。

「その、いいかな？　前はあんな事言っちゃったけど……」

「もちろんよ!!　とつても楽しみだわ」

「そっか、それなら安心した。……じゃあ」

俺が手を差し出し、こころがそれを握る。いつもとは、全く真逆の構図。今日ぐら**い**は俺が先頭歩いてもいいかなあという、実は昨日から考えていたことだ。

そんな事考えたとしても、きつとこころには通じないんだろうけどなあ。きつと彼女の行動力にはついていけないで、ずつと引きずり回されて……。そんな少し先の未来が見えた気がした。

★★★☆☆

電車に揺られて数十分。特に何が起ころるわけでもなく、俺達は目的の水族館に着くことが出来た。出来てまだ間もない事もあって、外観

はかなり立派。冬だというのに、お客さんもそこそこいるようだった。

潮の独特な香りは、水族館に近づくにつれて段々と強くなる。この季節の海風はとても厳しく、俺達は互いに身を寄せた。ズボツとポケットに両手を突っ込み、体を縮こませる

「今日は冷えるわね。中入りましょっ」

「だね。順路通りでいいかな？」

「ええ、構わないわ」

チケツトを通し、パンフレットを受け取って中へ入る。内装もまた、外装同様に綺麗だった。それに、中も広い。

順路を示す矢印に従って、入口のフロアから下へと降りて行く。最初はセイウチの水槽。

「結構おつきいねえ」

「あつ、手を振ったらこっちに来たわ!!」

俺が予想していたよりも、セイウチという動物は人懐っこいらしい。こころろが手を振ると、陸上から水に潜り俺達の目の前を華麗に泳いでみせた。

すぐそばではアザラシのブースもあった。こちらは残念ながら、陸上で休息中だったらしいが。次はサンゴがある大水槽。

「わあ、色んな魚が泳いでるわね!!」

大きな水槽の中には、多種多様な魚達が。数百ものイワシが群れを成して泳いでいたり、岩陰にウツボが隠れていたり。目を凝らしてみると、色んな発見がある。魚だけじゃなくて、エイなんかも泳いでいたり。

さらに俺達は運が良いことに、ちょうどスタッフによる餌付けショーが行われる時間帯だった。スタッフが手に持つ餌に、魚という魚が様々な角度から群がる。

「うわあ、襲われてるみたい……」

「アタシもお魚達と一緒に泳いでみたいわ。頼んだら入れてくれるかしらっ。」

「……頼まないでね？」

こころが不安な物言いをするので、キリを見て大水槽を離れる。この後も順路通りに進んでいき、グルッと水族館を一周。時間を経つのも忘れて、童心に返ったみたい楽しんだ。

「隼人見て!! ほらっ」

「ちよっ……気持ち悪いからそれ近づけないで」

「あら? 何か出てきたわ」

「わあっ!? 服にかかる!?!」

海の生物と直接触れ合えるブースで、こころがナマコを笑顔で掴んでいた。

「ペンギンがいっぱいいるわ!!」

「すごい人気者……」

ペンギンのお散歩ショーに偶然遭遇して、なぜかペンギン達に囲まれていたり。

「すっごく綺麗ねっ。隼人、写真撮りましょ!!」

「う、うん」

「はいっ、チーズ!!」

「ちーず」

ライトアップされたクラゲの水槽をバックに、こころと写真を撮ったりした。

こころばかりが楽しんでいるようだったが、もちろん俺も十分に楽しんだ。そりゃあもう、いつも先導しているこころに変わって先導するぐらいには。

そうして一時間強、こころに合わせるように歩き続けた結果……

「見て見て隼人。こーんなに写真が撮れたわ!!」

「う、うん。ごめん、少し待って……」

「あら、もう疲れたの?」

「情けない話だけどね」

一周した後にはもうヘトヘトになっていた。今は館内の椅子に座り、飲み物でも飲みながらしばしの休憩である。こころは変わらず元気であるが。

「隼人は運動苦手なのかしら?」

「かもね。こんなに体力ないんだし」

「今度は、みんなでスポーツなんてのもいいわね!! はぐみの入っている、ソフトボールチームに混ぜてもらいましょう」

そんな事したら、身体中が筋肉痛になって次の日は動かなくなりそうだ。学校の体育の授業を受けただけで、どこかしか痛めちゃうほどヤワなのに。記憶を失う前も、あんまり活動的じゃなかったんだろうな。

「そして、その後は皆でご飯を食べるの!! 運動した後は、うんと美味しくなるはずよ」

「それは……楽しそうだね」

ここころの未来予想図をぼんやりと思い浮かべながら、俺は彼女の話に耳を傾ける。次は動物園に行きたい、カラオケにも行きたい、見たい映画がある等々……。彼女に楽しそうな事を語らせたらキリがない。

それはまるで、俺に言い聞かせているかのようだった。今の俺にこの先が無いことなんて、彼女も分かり切っているはずなのに。まだ、こんなに楽しい事があるぞと。自意識過剰かもしれないが、俺を励ましてくれているかのようだった。

「まだまだ、楽しい事はたっくさんあるわ!! いっぱい探していきましょ!!」

「……そうだね。時間だし行こうか」

束の間の休憩を打ち切り、俺はまたここころの前を進む。俺達が向かうのは、屋外のプール。水族館といえばイルカ、水族館といえばショー。そう、今からまさにイルカのショーが行われるのだ。

会場の席は既に人で埋め尽くされていたが、運良く最上段の立見席はスペースが残されていた。ここでも充分見えるし、水しぶきを気にする必要も無い。

やがて五分と待たずに水族館のスタッフが、二匹のイルカを連れてステージに現れた。俺の隣で、こころは柵から身を乗り出す。

「皆さんお待ちせしました!! 今日、パフォーマンスをしてくれる子供達を紹介します。女の子のココロちゃんに、男の子のハヤテくんです

!!

「あら、アタシと同じ名前だわ!! テがトだったら、『ハヤト』でおそろいだったのにね」

「もしそうだったら、何か作為的なものを感じるよ」

一瞬黒服の人達が頭をよぎったが、さすがに違うかな。あの人達が何かするなら、水族館を貸し切るぐらいの事は出来るだろうし。さすがにやってる事が地味すぎる。

二匹のイルカは、観客に向かってご挨拶。二匹を見比べると、ココロは丸っこくてハヤテはシュツとしていた。イルカにも、性別の差が出て出るのかな。

「つと、忘れないようにしなくちゃね」

挨拶を終えると、いよいよショーの始まり。イルカ達のステージは、実にバラエティーに富んでいた。スタッフの手にしたフラフープをジャンプしてくぐったり、高所に吊るされたボールにタッチしたり。彼らの運動能力もさる事ながら、スタッフの言う事を理解している知力も素晴らしい。イルカは、実に頭が良い動物だ。

俺は、その様子をスマホのカメラで動画に収めていた。似たような事をしている人もいるが、大半は肉眼でショーを見ている。それは、隣のこころも同じ。

「あら、ココロよりもハヤテの方が動きが良いわね!!」

「確かに。俺たちとは真逆みたいだね」

名前が同じであることから、こころはイルカと自分を完全に重ねていた。キヤツキヤと騒ぎながら、パチパチと手を叩き喜んでいる。

プールに向けていたカメラを、ふと彼女に向ける。画面越しからでも、彼女の楽しそうな様子が手に取るように分かった。するとこころはこちらに気付いたようで、じーつとスマホのカメラを覗き込む。ちよつと近いよ。

「隼人、どうしたの?」

「あ、いや、記録に残しておきたくてさ。ごめん、隠し撮りしてるつもりはなかったんだけど」

「あら、そうだったの。アタシは構わないわっ」

それならば、こころ自身を録る必要はないよねといったツツコミはなかった。こころはまたすぐにステージに視線を戻して、イルカのショーに魅入っている。俺も、カメラをプールに戻す。

最後の特技である、二匹揃っての回転大ジャンプ。飛ぶタイミングも、高さも、着水も息ピッタリ。大きな水しぶきと共に、観客席から一際大きな声援が上がった。それは、隣のこころも同様で。

「わーっ、スゴいわ!! ねえ隼人、見た!? いまのスゴかったわね!!」
「見てるって。画面ブレちゃうから揺らさないの」

童心に帰って楽しんでいるこころは、いつもよりテンションが高いように感じる。せっかくの見せ場なのに、いまの声は動画に入っちゃっただろうなあ。まあ、これも『らしい』からいっか。

動画の手はそのまま、こころをチラリと見る。イルカに手を振ったり、ハヤテとココロの名前を大きな声で呼んだり。いま味わっている感情を、彼女は十二分に表現していた。もちろん、満開の笑顔で。

彼女と目が合ったので、俺も微笑み返す。少しだけ口角を上げて、なるべく優しく。この前よりも、上手く笑えているかな。それとも、まだぎこちないかな。表情筋が引きつってるから、きつとまだ下手くそだ。彼女みたいな笑顔をするには、もう少し時間がいりそう。

イルカ達がショーを終えて、最後にスタッフが挨拶をする。もう動画を切ってもいいかと思っただけ、イルカ達がステージを去ってしまった後だった。少し、ボーッとしてたかな。画面、全然見てなかったけど。

観客たちが席を立っても、俺達はしばらくそこに留まり続けた。俺が動画を保存した後も、こころが動こうとしなかったからである。彼女の珍しい動向に、俺は『はて』と首を傾げる。

「楽しかったわねっ、隼人」

「え、うん。そうだね、時間調べた甲斐があつたよ」

そんなことを言うただけにわざわざ待ったのかな。多分違うと思うけど。

誰もいない閑散とした観客席で、こころはさらに続ける。

「隼人、ずっと笑顔だったわ。気付いてないかもしれないけれど、とっ

ても楽しそうだったもの」

「そ、そう？ 変な顔じゃなかった？」

「そんな事ないわ。前も言ったけど、素敵なお顔よ。この前も素敵だったけど、今日はもーっと素敵だったわ!! 今までで一番ね」

無意識だった、か。意識して笑顔になろうとしていたこの前と比べると、それも進歩かな。全然気付かなかったし、ショーを見ていた時の感情なんて覚えていない。楽しかったのは間違いなかったけど。

何ヶ月も経ってようやくこの段階なのかと考えると、かなり鈍い歩みだと感じる。まだこころみたいな笑顔は作れないし、心の底から笑えてないと思う。少し、こころに申し訳ない。

「その、ごめんね。今さらで」

「何言ってるの。これからもたつくさん笑えば良いのよ!! 辛いことがあっても、アタシが笑顔にしてあげるわ!!」

「でも……」

そう言いかけて、俺ははっと口を閉じた。『でも、忘れてしまう』という言葉が、少しだけ頭に過ぎったからだ。俺が極力考えないようにしていたタイムリミット。それを、こころは少しも意識していなかった。

きつと、彼女は何があっても前を向いている。立ち止まる事があっても、変わらず前を向いている。彼女のそんな姿勢に引っ張られて、俺も前を向き始めた。少しずつでも、先に進めるように。

彼女の光は、ずっと先まで照らしてくれている。彼女はずっと俺を引っ張ってくれている。置いていかれないように、俺も前を向かないと。

「まだまだ時間はあるわ。さあ、笑顔になれる事を一緒に探しに行きましょっ!!」

こころの手を掴んで、また先導して歩き出す。後ろを振り返ると、彼女はニコリと微笑んだ。

ああ、やつぱりこの笑顔だ。見ているとこっちまで心が動かされる。うで、ほっこりと温かくなる。太陽のように優しく、俺を包んでくれる。

ずっと見ていたい。一番そばで感じていたい。他の誰でもない彼女の笑顔を。

きつと——俺は彼女の笑顔が好きだったんだ。
出会った時からずっと、ずっと……。

三十日目（Ⅱ）

再び館内に戻ってきた俺達は、お土産やグッズが売っている購買に赴いた。ひと通り水族館を堪能したので、あとは買い物でもして出ようということになったのだ。時間的に、めぼしいイベントも無さそうだし。

「隼人見てっ!! この被り物可愛いわっ。花音へのお土産にしましよ
う」

「松原さん困らないかな……」

ペンギンの被り物を実際に被りながら、こころは俺に見せてくる。確かに可愛いけど、こんな派手なものを送られても困るだろう。というか本来これはその場所で被るものであって、人に送るものじゃないと思うんだけど。

新しく出来た水族館だけあって、売られている物のラインナップも豊富だった。あれこれ物色しているところはとりあえず置いておいて、ひとまず家族へのお土産を選ぶ。無難にクッキーやチョコレート辺りがいいだろう。

次に探すのは、自分用のお土産。正確に言うなら、自分のために『遺しておく』ためのお土産を買うのである。食べ物論外として文具やおもちや、生活用品にぬいぐるみ等々、いくらでも選びようはある。「何にしよっかなあ」

松原さんで思い出したけど、何かお揃いのものを買おうって考えていたっけか。頭の隅に残っていたものを引っ張り出し、再度お土産探しに勤しむ。

種類が豊富だとは言ったが、何かお揃いで買うとなると探す難易度は跳ね上がる。男女共用で使えて、なおかつ身に付けるようなものだ。『これお揃いだね』と、いつでも言えるような道具。そんなものは、都合よく見つからない。

「あら、何を探してるの?」

「自分用にね。そっちはもういいの?」

「ええ。ちやーんと皆のお土産を買ったわ!!」

一体何人に買ったのか、彼女は袋いっぱいにお土産を手にししていた。家族だけに買った俺とは違って、こころの場合は友達が多いからかな。明日学校で、これを配っている姿が目に見えかぶ。

「アタシも探すのを手伝うわ!!」

「ありがとう。身につけられるものもいいな」

こころも加わって、あれでもないこれでもないとお土産探しを再開する。一口に身につけられるものといっても、色々ある。靴下やハンカチ、キーホルダー、帽子……学生だし文具なんかもアリだろう。

それでも、なるべくいつも身につけているものもいいなあと考えている俺にとっては、どれも決定打に欠けた。間違いなく、常に肌身離さず持っているようなものが欲しいのだ。

今まで生活してきて、肌身離さず持っていたもの……。

「あ、そういえば」

ポケットに手を突っ込んだタイミングで、俺はふと思いついた。一つあったよ。俺もこころも間違いなく持っていて、なおかつ肌身離さないであろうもの。

そう、それはスマートホン。高校生ならば所持率はほぼ十割だ。当然、こころも持っている。俺が見つけたのは、そのスマホにつけるアクセサリー……イヤホンジャックだ。

「こころ、どっちがいい？」

「ん？ それどうしたの？」

「うん、まあプレゼント……かな」

プレゼント、という言葉にこころの顔がパアッと明るくなった。俺から彼女に何かを送るなんて、してこなかったからだろう。驚きと喜びの混じった表情は、見ていてなんだかホッコリとする。

「じゃあこれっ!! こっちがいいわっ」

「ん、分かった。じゃあ俺はこっちな」

こころがイルカのイヤホンジャックを選んだので、俺は残ったペンギンを購入する。小さく水族館の名前が刻まれている、ここでしか買えないものだとも目で分かる。もちろん、お金は俺が払った。

早速二人して、スマホにイヤホンジャックをつける。スマホを互い

に近づけると、イルカとペンギンが仲良さそうに並んだ。

「隼人とお揃いねっ」

「……うん。これ見たら、二人でどこか行つたつてすぐに分かるよ」

言葉の意図を分かってくれたのか、こころは小さく『そうね』と呟いた。今日は楽しかった。写真もいっぱい撮つたし、動画も残したし。記録として残したものの以上に、語るべきところは多い。こういうのを、思い出というんだろう。

楽しい時間は、残酷にもあつという間に過ぎ去つてしまう。ついにさつき水族館を回り始めたと思つたのに、もう帰らなきゃいけないなんて。

明日も、明後日も、一週間後も、一ヶ月後も。こんな生活がずっと続けばいいのに。そう願つても、いま叶うことは決してない。始まりには、やがて終わりが来る。

「さ、帰ろっか。電車、時間だしね」

無駄にしんみりさせてしまったなあと内心反省。努めて明るく、少しでもだけ上達した笑顔も添えて呼びかける。辛い時こそ、きつと笑つた方がいい。こころなら、そう言うはずだから。

「ええ。そうだわ、駅まで競走しましょっ!!」

「それはかんべ……ちよっ?! 待って!!」

こころは俺の手を引くと同時に、ダツシユで水族館の出口へ向かった。俺の制止も何のその、全力で駆け出す。今日はずっと俺がリードしてたのに、結局巻き込まれてドタバタしちゃうんだ。でも、こつちの方が俺たちらしいかもしれない。

外に出ると、冷たい風が出迎える。二人同時にブルつと身を震わせるも、しかしこころはすぐに切り替えて走り出す。当然、俺も一緒になつて。

十二月手前。寒さが厳しくなつてくる時期だったが、繋がれていた手はほんのり暖かくて。このまま時間が動かずに、どこにも着かなければいいのに……。なんて、そんな事を本気で考えていた。

電車に乗って帰ってきてからも、俺達二人は共に過ごした。その辺のお店を適当に覗いたり、雰囲気の良いカフェに入ってみたり。特に目的も決めず、ブラブラと街中を二人で歩くだけ。

ただそれだけなのに、こころといると発見が多くて笑う事もあつて。飽きることは決してなかった。だが、楽しい時間は一瞬。一日の終わりは、あつという間に訪れる。

俺達は、最後に展望台へとやってきた。街の様子を一望できる、一昨日にも訪れたあの展望台だ。すっかり時間は下がってしまい、西の空は赤く燃え始めている。

「キレイ、だね」

「ね、言った通りでしょ!？」

「うん……。最後に見れて良かったよ」

前回は暗くて景色が分からなかったが、今ならよく見える。以前ころが言つてたように、確かにここからの景色は壮観だった。夕焼けに照らされて、俺達の住んでいる街が赤く輝いている。

無言の決定だった。ここに来ようと言つたのは、どちらでもない。自然と、互いの足がここへと赴いていたのだ。最後は、静かな場所に来たかったのかもしれない。

こころは、何も発しない。俺が景色を写真に収めようとするスマホを覗き込み、ベンチに腰を下ろすとその隣に座る。まるで、この後の全ての行動が俺に委ねられたみたいだ。

「あ、そうだ。忘れないうちにこれ」

「あら、封筒?」

「この前借りたお金。ちゃんと貯めたから」

「……ありがとう」

封筒の中身には、二万とちよつとのお金が入っていた。いま着ている服を買った時に、こころから借りた分のお金だ。もちろん、ハン

バーガーショップでのバイトを経て正規に手に入れたものである。

さて、もう俺が何かする事も無くなつてしまった。思い残しもやり残した事もなくなり、帰ろうと思えば今すぐ解散する事ができる。

それでもこの場を動かない……動けないのは、まだ未練があるからだろうか。俺が動くこと、それは別れを意味する。またすぐに会えるわけではない、長い長い別れだ。

「……ここ、門限とかある？」

「いいえ全く。決められてないわ」

「……そっか。もつと遊べたね」

お嬢様の家にありがちな門限も無し。俺達は高校生だから、十時以降の外出は許されていない。裏を返せば、それまでまだ時間はたっぷりある。

だがもちろん、そんな時間にまで引つ張るつもりはなかった。お互いの親を心配させてしまうし、ここにあと四時間も五時間もいられない。もう別れる頃合なんだと、俺は直感で感じていた。

「これなら、もつと遠出できたかもしれないね。それこそ、こころが良かったがついていた遊園地も動物園も全部回れたかも」

「そうねっ。それは素敵な事だと思うわ」

「でも、それだどちよつとヘビーかな。二日目とかあれば、良かったん……だけ、ど」

太陽が揺らめく。まるで陽炎のように、ぼんやりと不規則に。もつとしつかりと焼き付けていたい、まだその光を浴びていたいのに。

分かっている。自分で覚悟を決めなきゃいけない事ぐらい。そんな事は、もう何日も前からしていたつもりだ。しているつもりだった。

……でも、俺は自分で思っていた以上に弱かったようだ。

「……隼人」

ふわりと、優しい香りが俺を包む。こころが、俺を抱きしめてくれた。彼女の華奢なカラダは、俺を力強く捉えて離さない。俺の方が上背はあるのに、全てを包み込んでくれて……直接、彼女の温かみを感じ取れる。

俺の涙腺は、そこで決壊した。

「いいのよ、泣いても。我慢は良くないわ」

「ごころっ、ごころ……!!」

「……ずっと戦ってたものね」

「俺、記憶無くすのが怖くて怖くて……。もう二度と会えないかもしれないって思っ。俺嫌だから、そんなの絶対嫌だから!!」

情けなく、女々しく、全てを吐き出すように。俺は泣き叫んだ。人目も憚はまからずワアワア泣いた。感情が爆発して、自分でも抑えられそうもない。声はうわずり、息が乱れる。まるで幼子おさなごのように、喚き続けた。

こころはそんな俺に何も言わず、ただただ抱きしめてくれた。時折あやす様に、俺の背中をさすりながら。

「帰りたくない。ずっとここにいたい……」

ポツリと、つい本音が漏れてしまった。ダメだと分かっているのに、そんな彼女の優しさに甘えてばかりいる。叶いもしないワガママだ。

家に帰るのが怖い。記憶を失うのを待ちながら眠りにつくのが怖い。彼女を忘れるのが怖い。明日を迎えるのが……。怖い。

一度感じた恐怖は震えへと変わる。それをひた隠しにするように、俺はまたこころに抱きつく。顔を埋め、少しでも気分が和らぐように。

「隼人、顔を上げて」

声に釣られてふと顔を起こすと、唇に柔らかい感触がした。限界までに近づいた彼女からは、ほのかに上品な香りがした。片腕で俺の力ラダをしっかりと抱き寄せ、もう片方の指先で俺の涙をなぞるように払い、頬に優しく手を当てる。

それは一瞬の出来事。こころはパツと離れて、歯を見せて俺に微笑む。

「エへへっ。ビックリして涙引っ込んだわね!!」

「だって、いきなりこんな……!!」

ようやく、自分が何をされたのか理解した。頭が真っ白になると同

時に、いま抱えていたものが全て吹き飛んだ。それぐらい、衝撃的だった。

彼女の目をまつすぐ見れない。心音は速まり、頭がクラクラしそうになる。そつと自分の唇に触れると、今しがたの感触が脳裏をよぎった。

「独りだと、こんな風に忘れる事なんて出来ないものね」

俺の目尻に溜まった涙をすくい、こころはそう呟いた。彼女らしい、強引すぎる方法。でも、涙がさらに溢れることはなかった。

我ながら、こんな単純でいいのかなと思う。不安な気持ちはやや薄れ、少しばかりの幸福感が残る。自分の気持ちに正直になるなら、ああうん。やつぱり、すつごく嬉しい。

やつと分かった。

「アタシがずつと一緒にいる。隼人は独りぼっちなんかじゃないわ。アタシは隼人の辛い気持ちを理解する事は出来ないけど、楽にする事は出来る。笑顔にだってさせられるわ!!」

俺の手を取り、こころは力強く言う。ずつと一緒だと、以前もそう言ってくれた。何度も言ってくれた。その言葉通り、俺は何度も何度も助けられた。感謝しても、しきれないぐらいに。

「……うん。今まで助けられてきた。貰いつばなしだ」

こころは、俺と過ごしてどうだったんだろう。もちろん、彼女が好きで俺と一緒にいることぐらい理解している。俺は彼女に抱えきれないほどのものを貰ったが、逆に俺は何か彼女に渡せただろうか。

そんな俺の考えをかき消すように、こころは『それは違うわ』と否定する。

「隼人に出会ってから、アタシはたつくさんの笑顔を貰ったわ!! 隼人も、アタシに笑顔をプレゼントしてくれていたのよ!!」

「そう……なのかな。あんま実感ないけど」

「独りで笑顔になんてなれないもの。今日だって、隼人といっぴい笑顔になれたわ。こんぐらいよ、こーこーんくらい!!」

こころは大袈裟にも、両手をいっぴいに広げて表現する。どういう図り方なんだよ、と内心ボヤク。そんなんで表せるほどじゃないぐら

い、君の笑顔は輝いてたよ。

誰とでも、どこでもこころは笑顔になれる。それが当たり前だと思っていたけど、それは相手あつてのもの。嬉しいことに、俺という時のこころはいつだって笑顔だった。知らず知らずのうちに、俺は彼女を笑顔にさせていたんだ。

この笑顔を守りたい。俺にだって出来るはずだ。誰よりも輝いていて、愛しいその笑顔を忘れたくない。そう思うと、泣いてる暇なんてない。

「……フフっ。なにさ、その表現」

「あつ!! やつと笑ったわ!!」

心につつかかっていたモヤが少し薄らいだ気がした。これで、何か事態が好転した訳でもない事は分かっている。それなのに、今の俺は恐ろしくスツキリしている。こころと少し話ただけで、こうも違うなんて。

安心できた。俺にはまだ希望が見い出せる。何も知らない、孤独だと感じていた時とは違う。こころなら……どれだけ絶望の縁に立たされても俺を笑顔にしてくれるから。当然だ、彼女は太陽なのだから。

「うん。少し楽になったかも。……ありがとう、こころ」

「いいえ。やっぱり、笑っている方がいいもの」

こころが俺の手を放した。俺もコクリと頷く。

大丈夫、もう大丈夫だ。

「じゃあ……ね」

「ええ。また明日」

こころは、決してさよならとは言わなかった。きつと、また会うことが出来るのだから。また明日。なんて前向きな言葉だろうか。

独りでいた時は、明日を迎えるのが嫌だった。何かが起こる度に怖くなって、不安に胸が押し潰されて、だけどそれを取り払えなくて。明日になると、また嫌な気分になってしまう。月日を重ねれば重ねるほど、自分が嫌な思いをする。そう思っていたから。

だが、こころがそんな明日を変えてくれた。新たな発見、予想もし

ない出来事。こころといるだけで毎日が新鮮になり、明日を迎えるのが楽しくなっていた。

こころは、俺の明日を創ってくれていたのだ。だから、また明日。こころの創る、楽しい明日へ。

「……………うんっ。また明日」

俺は、こころに背を向けて歩き出す。決して振り返らない。まだ見ぬ明日はきつと明るいから。最初は陰つていても、光は常に手の届くところにあるのだ。きつと……………すぐそばに。

だって、陽はまた昇るのだから。

★★★☆☆

終

いかがでしたでしょうか。このお話はここでおしまい。たかが一ヶ月でしたが、彼にとつてはかけがえのない一ヶ月になったはず。それを伝える事が出来たならば、私共からもう語る必要はありませんね。

さて、私は最初にこう書きました。『このお話を読み終えた時、あなたはきつと心に温かさを感じる』と。このお話を通してどう感じたか、それはあなたの自由です。これからをどうするか、あなたの自由です。

しかし、これだけは覚えておいて下さい。あなたは独りじゃない。きつと今も、その光はあなたを照らし続けています。

エピローグ

まだ見ぬ未来へ

拝啓 少し未来の自分へ

これを読んでいる今の君は、きつと自分の事が何も分からなくて困惑しているんじゃないかな。見たことのない部屋に目覚めて、自分の事を思い出せなくて。それで何か探してみようと周囲を見渡して、机の上に手がかりになりそうな手紙を見つけた。そんなところでしょう。

これを書いたのは、紛れもない君自身。正確には、数時間前の君だ。陰山隼人、〇〇高校の一年生で部活には入ってない。好きな食べ物はコロツケとパンで、運動と音楽はやや苦手。君のプロフィールをざっくり書くなら、こんな感じだよ。

……ああ。こんな事をわざわざ書くためじゃない。君には、二つ絶対的に伝えたいことがあったんだ。まず一つは、記憶がない原因について。薄々気付いているとは思うけど、君は脳に厄介な病気を持っている。一ヶ月周期で、記憶が抜けちゃうんだ。だから、君が今まさに手紙を読んでいる十二月一日が、記憶リセットの始まりの日ってわけ。

次に二つ目。こっちの方が大事。きつと君は、これからすつごく変な人に出会おうと思う。金髪のロングで、笑顔が素敵な同年代の女の子。彼女の事は、どうか嫌いにならないで。意味分からない事を言うし、無鉄砲で色々巻き込まれるだろうけど。彼女は君の最大の理解者であり、大切な人だから。

詳しい事は、この手紙と一緒に置いてある日記を読んでみて。先月、君がどう過ごしてきたか分かるよ。最後の方ちよつと破けちやつてるけど……まあ、気にしなくていいから。

きつとこれから先も辛いことはあると思う。この手紙すらも信じられないと思う。でも、君は独りじゃないから。太陽を、決して忘れないで。

ああそうだ、最後に一つだけ。今から半月後くらいかな、君にあるプレゼントが届くように手配したから。それをちゃんと読んで、色々

と想い起こしてほしい。それが、この手紙以外に俺が遺したものだから……。

★★★☆☆

「ふう」

手に持っている本を閉じ、俺は一息ついた。結構な文量を一気に読んだからか、少し目と肩が疲れたかな。やっぱり、本を一気読みなんてするもんじゃない。それでも、病室にいる退屈な時間を潰すにはちょうど良かった。

前向き健忘を患っている俺は、病院にほぼ毎日通っている。平日、土曜、日曜お構い無しだ。学校にはちゃんと行っているが、放課後はすぐに親の車で直接病院へ。そこから検査を受け、家に帰る頃にはもう夜である。

十二月二十日の今日は土曜日。朝から病院に来て、治療を定期的に受けている。もちろん、この病気を治すための。俺自身は治す意味があるのかと思うけど、どうやらひと月前の俺の希望だったようだ。どうも難航しているらしいけれど。脳の損傷の原因が突き止められていないとか何とか。

「しつかしまあ……よく書いたよねこんなもの」

そんな、なんでもないような待ち時間。俺に妙ちきりんな本を持ってきた女性に、聞きたいことは山のようにあった。

「私は持ってきただけで、書いてないってば。まあ、書いた人も陰山さんが残したメモを元に、読みやすくなるように改良しただけらしいけど。もちろん、全てノンフィクション」

「アハハ、俺がこんな風にねえ……。つい半月前とは思えないよ」
「で、どうだったの？」

奥沢さん、と名乗った少女は段階を踏むことなくストレートに尋ねてきた。どうだった、というのには本の感想を聞いているんだろう。俺が読み終わるまで、ずっと病室に居座ってたし。

「どうって……何とも言えないかな。俺自身に何か変化は感じないし、いきなりこんな事を知らされて結構困惑してるよ。何のためにこんな物を遺したんだろうって」

「……そっか」

まるで『期待外れ』みたいな声色だった。なんて言えば正解だったんだろう。過去の自分の思惑なんて、想像しても分かるわけがない。

確かに前向きな話だったし、今の自分とはだいぶかけ離れた日々を送っていたのも分かる。だが、それまでだ。共感こそ出来ても、これを自分の事だと置き換えて考えるのには時間がかかる。第一、内容を見るにこれはプレゼントのはずだろう。なんで俺本人にまで送ってきたんだ。

「それで？ その弦巻さんは一緒じゃないの？」

「今日は用事があるってさ。会いたがってたけど、ここには来れないみたい」

「……そっかあ」

同じく『コレ』を読んだはずの彼女は、ここには来ていなかった。過去俺と親しくしていた弦巻ところだが、最近は会っていない。通話はよくするので近況は知っているが、バンド活動やイベントやらで忙しいようだ。季節柄仕方ないし、だからといって憤っている訳ではない。だが、どこか寂しい気はする。俺とあの子の関わりなんて、大してないのに。

「じゃ、私は帰るよ。ここらの事だけどき、用事があるのは夕方までみたいだよ。暇なら探してみたら？」

「え？ ちよつ、でも結局場所が分からな……」

「じゃあね」

奥沢さんは俺を促すような言葉だけを残すと、静かに病室を出ていった。探すにしても、場所の手がかりが全くないじゃないか。ろくに外にも出てないのに、どこを探せというのだ。

『太陽の備忘録』……か。本の裏表紙には、俺と弦卷さんが映っている写真がプリントされていた。どちらもいい笑顔だ。とても自分の顔とは思えない。少し前の自分がこんな明るいななんて、到底想像出来なかった。

「……俺も外に出るかな」

暇だったし、謎を残されたままなのはどこか癪に障る。俺は手頃な服を着込んで外に出ることにした。病室待機の時間はまだあつたはずだし、昼下がりだから少しは暖かいだろう。学校以外で自発的に外に出ようとしたのは、今月初めての事だった。

★★★☆☆

外に出て数分。早速行く場所の検討を失いかけていた俺は、商店街をブラブラと歩くことにした。ここは登校の途中で通るから知っている。弦卷さんが通う学校からも近いから、もしかしたらいるかもしれない。

クリスマスが近いこともあって、イルミネーションが鮮やかに街を彩っていた。土曜日という事もあり、人通りもいつもより多い。自分には少し窮屈なぐらいだ。

「いらっしやーい!! 夕食にコロツケ、クリスマスにコロツケはいかがですかー!!」

あまりにもアンバランスな掛け声に、俺は思わず足を止める。精肉店の売り子が、寒い中元氣よく店番をしていた。この季節なら鶏肉辺りを売り出すのが普通なのに、何故かコロツケを前面に押し出す妙な精肉店。俺は、ふと立ち寄った。

「あつ、いらっしやい!! こころんのお友達だったよね?」

「えつと……まあ、うん。北沢さん、コロツケ一つ貰えるかな」

「毎度ありー!!」

熱々のコロツケをお供に、ここをもう少し見て回ろう。今のところ、弦卷さんがいそうな気配はない。もしかしたら、商店街の中では

ないのかな。そうになると選択肢がかなり広がってしまい、探すのにも苦勞する。

弦巻さんが立ち寄ってそうな、色々な店を見て回った。羽沢珈琲店もダメ、今しがた行った北沢精肉店もダメと全滅。まだ心当たりがあるにはあったのだが、その当のお店——山吹ベーカリーはというところ……

「きゃ〜!! 薫様ー!!」

「ふっ、そう騒がないでくれ子猫ちゃん達。私のカラダは一つしかないのだから」

アイドルでもいるのかってぐらい、店先の人だけが凄かったので止めておこう。誰だよ薫って、傍迷惑な人だなあ。いや、この人に悪気はないんだろうけど。

あの取り巻きの中に弦巻さんがいるとも考えにくいし、あそこに突っ込むほどのリスクを犯したくもない。パン屋の看板娘もこれには困惑であろう。

そんなどこぞの薫さんがいることもあって、山吹ベーカリーは諦める。商店街はダメだったので、大人しく他の場所を探すしかない。

ここから近いのはどこだろうと考えてみるけど、よくよく考えたら地理なんて分かるはずもない。こうなったら、手探りで探すしか無さそうさ。

「んもう、なんだってこんな事……」

この寒い中外を歩き回っている現状に、どうも納得がいかない。電話を掛けることも考えたけど、用事がある以上いきなり電話が鳴って迷惑だったら困るし。仮に繋がったとしても、彼女に迎えに来させるのはやや気が引けた。

それに……何故か帰ろうとは思えなかった。明確な理由もないが、何故か諦めることを拒否している。それが余計にもどかしくて、俺の不満は募るばかり。

弦巻さんの用事の内容も知らなければ、場所もわからない。分かるのは時間だけ。トークアプリがあれば連絡を残すことも出来たのに、奥沢さんのはあるくせに何故か彼女とは交換してないし。

当てもなく、気の向くままブラブラ。どんどん山奥に進んでしまっている気がするが、一度引き返した方がいいだろうか。

「あれ、行き止まりだ」

辿り着いたのは、展望台らしきところ。今日は天気も良いから、街全体を見渡せる。この街にこんな穴場があったなんて知らなかった。思わぬ発見をしたが、当然ここにも弦巻さんはいない。

その代わりといってはなんだが、気弱そうな女の子がそこにいた。景色を見るでもなく何をするでもなく、ただ立ち尽くしているだけ。しきりにスマホで何かを確認しているようだ。声を掛けた方がいいのかな。

「あの……」

「ふえっ!? え、あ、隼人くん……。どうしたの? こんなところで」
「いや、こっちのセリフですけど」

その子は、俺の事を知っていた。学校では見た事ないから、きっとクラスメイト以外での知り合いだろう。名前、なんだったかな。戸山さんだったつけ。いや、なんか違う気がする……。誰だつけ。

「ここね、こころちゃんがおススメだつて言うから来てみたくて。バイト帰りによつてみたの」

「確かに、景色はスゴくいいですね」

「でね、そしたら帰り道分からなくなつちやつて……」
「ああ、なるほど……」

スマホで調べていたのは、地図を見ていたんだろう。確かに来るまでに色々入り組んでいたから、慣れてない人からすると迷いやすいのかもかもしれない。

「俺もうここ出るんで、案内しますよ。商店街くらいまでなら」

「ホント? 良かったあ、知ってる人に会えて……。あ、覚えてないんだよね……。私は松原花音つていいいます」

結局得たものは、この街の穴場を知れた事と方向音痴の先輩に出会えた事くらい。どちらも、さして大発見とは言い難い。ああ、あとお礼にとハンバーガーショップのクーポン券貰ったつけ。……。前にも貰ってるからか、既に財布の中にはいっぱいあるんだけどね。

結局松原さんを送り届けるために、商店街に戻ってきてしまった。戻ってきたついでに山吹ベーカリーを覗いてみたが、やはりというか弦巻さんはいなかった。やっぱり、ここは全滅だ。

かれこれ家を出てから数時間経つ。諦めて帰ろうとも思ったが、どうも足が病院に向かなかつた。弦巻さん、どこにいるんだろう。

近隣は探し尽くした。それでも諦められない。奥沢さんに唆そそのかされたからとか、そんなチンケな理由ではない。本を読んで感動したからとか、そんな事でもない。本に関しては、未だに信じられてないぐらいだ。

深層心理だろうか。理由も分からないのに彼女に会わなきゃいけない、そんな気がしていた。自分の力で見つけ出そうと、謎の決心を胸にして。

「CIRCLE……」

辿り着いたのは、小さなライブハウスだった。ここに来たことは、恐らくない。恐らく、といったのはもう自信がないからだ。見逃してもおかしくない建物に、ふと足を止めた事。そして——探し求めていた彼女がそこにいた事。全ての偶然が繋がりすぎて、混乱していたから。

「隼人……?」

「弦巻さん……。やっつと、会えた」

俺を待っていたかのように、彼女はそこにいた。でも驚いているみたいだから、これもきつと偶然。俺がここに辿り着いたのも、もちろん偶然。偶然が幾重にも重なり合った結果のはずなのに、何故かそんな気がしなかった。

今までの出来事全てを含めて、誰かに仕組まれていたような気さえする。でも、もちろんそんな事は有り得ない。そんな事が出来るのなんて、神様くらいのものだ。それを月並みで短絡的に言うならば、運命というやつなんだろう。

「どうしたの? 疲れた顔をしているわ」

「ハハ……。体力がない癖に、何時間も歩いたもんだからさ」

「あら、運動かしら!? 苦手を克服するのは素晴らしい事だわ!!」

「フフっ、もうそういう事でいいよ。あく、いい運動した」

俺は思わず、クスリと笑ってしまった。こっちの気も知らないで、まあ呑気なものだ。そんな彼女を見て、不思議と力が抜ける。安心感かな。久しぶりにあったはずなのに、なんだか懐かしい気がしないんだよね。

歩き疲れたので外のベンチに腰掛けると、弦巻さんもその隣に座る。会ってどうするかなんて考えてなかったから、言葉が続かない。今日はライブそのものがないのだろうか、周りは恐ろしく静かだ。

「そうだわ、隼人。あなたにどうしても言いたい事があったの!! 本、とつても素敵だったわ!!」

「……本? ああ、アレか」

切り出したのは、弦巻さんだった。本というのは、先ほど俺も読んだ『アレ』のことで間違いないだろう。もとより、アレは弦巻さんに渡すために書かれたものだ。

「二ヶ月前の事を思い出せて、すっごく笑顔になれたわ!! 思い出がいつでも読み返せるなんて嬉しいもの!!」

「……それは良かった」

自分とは直接的に関係ないけれど、なんか嬉しかった。何も覚えてない俺にはただの稚拙な本でも、弦巻さんにとっては思い出に浸れる一冊なんだ。彼女が喜んでいる姿を見ると、心が暖かくなる。

「隼人も読んだのよね? どうだった?」

だから、俺にはあまり効力を為さなかった。先にも述べたが、俺からしたらただのアマチュアの三流小説に過ぎなかったのだ。いわゆる、思い出補正なんてものは働かないから。

最初は困惑してばかりだったけど、いま落ち着いた頭で少し思い起こす。今の自分と、本の中の自分。十二月と、十一月の違い。送ってきた生活なんかを比較してみても、とある感情が沸き起こった。

「羨ましい……かな。同じ自分のはずなのに、過ごしてきた日々がまるで違うんだ。覚えてないのが、悔しいぐらい」

それは羨望。今の病院通いの生活に比べて、あの物語での自分はどうあれ生き生きしていたことか。日々新たなものに出会い、知ってい

くことで成長していた。毎日を楽しんでいた。それが、なんだか羨ましい。

本の中の自分と今の自分では、別人もいいところだ。あんなに明るく、活動的な自分を俺は知らない。

「そうなの。なら、今からでも遅くないわ。前みたいに楽しく過ごせばいいのよ!!」

「そ、そんな簡単に言われても……。ほら、今の俺と昔の俺だと全然違うだろうし」

「そんな事ないわ、隼人は隼人だもの。今日の前にいるあなたは、アタシの大好きな陰山隼人よ」

確かに、弦巻さんにとってはそうかもしれない。でも、やっぱり俺はそう簡単に割り切る事が出来ない。彼女の言うひと月前を共有する事も出来なければ、自分自身の事だとも思えない。

『でも……。』と俺がさらに否定を重ねようとすると、弦巻さんはさらに言葉を続けた。

「本来場所を知らないはずのここに来ていいるし、前と違って楽しく過ごしたいって思ってる。明らかに、今までの隼人とは違うわ」

「それは……」

CIRCLEだけではない。あの展望台にだって俺は立ち寄った事がない。商店街も、通ることはあれど内部を詳しく歩いた事もなかった。何も考えずに歩いた結果にしては、確かに偶然が過ぎている。

だが、それにしてもまだ結論づけられない。俺の記憶は戻らないままだし、病院の検査でも結果は出ていないのだ。それでも、弦巻さんは言葉を続ける。

「それにね、隼人は笑ってた」

「わら……う?」

「そうよ。今日の隼人、アタシと話して笑顔を見せていたわ。これが一番の根拠よ!!」

俺は、思わず自分の顔に触れた。笑う……。確かに意識してこなかった。以前までは結構苦勞していたみたいだったのに、今の俺はなんと

も思っていない。それに対する抵抗もなければ、不自然さもない。

「確かに偶然かもしれないし、アタシの考えすぎかもしれないわ。でもね、もしどこかで一ヶ月前の事を——笑顔の作り方を覚えていたとしたら、それってとても素敵な事じゃないかしら!!」

きっとそれは、俺がどこかで変わり始めているということ。亀のよくな歩みでゆつくりと、しかし確実に。自分では気付いていなかっただけで、それを教えてくれた。本を持ってきた奥沢さんにそんな意図は無かつたろうが、これもまた偶然。

最近会っていなかった弦巻さんとうとうして顔を合わせた事。昔の自分について少し触れた事。自分が進歩していると気付けた事。これらも、きっと偶然に偶然が重なった結果だ。

数えきれない偶然が重なって、今がある。そんな偶然を、俺は逃さないようにしたい。この出会いが、いつしか『運命』だと言えるように。

「そう、かもしれないね。偶然って凄いな」

「だから、もつともーつと思えば増やしていきましょう!! もしかしたら、来月もまた何か覚えているかもしれないわ!!」

「だと嬉しいな。あと十日だけ……いや、十日もあるもんね」

未来に繋げるという希望が見えてきたら、少しだけ病気が怖くなくなった。後日検査したら、何か変わっていたりするだろうか。ある日目覚めたら、記憶が全て戻ってました……なんてね。

俺がもし本当にひと月前の記憶を微かに残していたのなら、きっとそれは偶然じゃないと思う。忘れてくなくて、どうにかして遺しておきたくてカラダが覚えていたんじゃないかなって思うんだ。むしろ必然だったんだって。

この事に気付けただけでも、今までよりかなりの進歩だ。あとは、来月の自分に繋げないと……ね。俺の記憶が戻るまで。

「そうよ。二学期も終わるし、アタシもしっかり時間を取れる」

「そっか。じゃあ、また毎日会えるのかな」

「もちろんよ!!」一緒に楽しい事いっぱい探しましょう!!」

楽しい事探しは、弦巻さんに任せておけばいい。きっと彼女といれ

ば、新鮮な発見が出来るはずだ。何となく、そんな気がする。

「そうだわ、ここでクリスマスライブをする事を決めたの!! 隼人にもぜひ出てほしいわ!!」

「はあっ!? え、出るの!? 第一、まだバンドのメンバーには……」

「伝えてないわ。だから、それを今から伝えに行くの。さあっ、行くわよ!!」

「ちよっ、俺疲れてるんだけど!」

……やっぱり、任せっきりにしない方がいいかもしれない。分かっ
てはいたけど、やっぱり無茶苦茶だなあこの人!!! 今日の用事つても
しかしてソレだったの!?

弦巻さんは、俺の手を掴むと唐突に走り出した。もちろん、繋がっ
ている俺も一緒に走る。この感覚もなんだか初めてのような気がし
なくて、『コレ』も遺してくれた部分なんだなと密かに感じた。

前を走る彼女の顔が眩しくて、本当に楽しそうで俺もつられて嬉し
くなる。きっと彼女とは長い付き合いになるんだろう。病気が治る
まで、そして治ってからも。

ずっと先の未来の話なのに、何故かそう感じた。根拠なんてものは
なかったけど、そう確信した。

